
Amour ?ternel

masaki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A m o u r ? t e r n e l

【Nコード】

N 7 4 0 5 W

【作者名】

m a s a k i

【あらすじ】

如月美緒はある日、今最も勢いがある会社、四條グループの子息である恭哉と結婚することを聞かされる。父親に、知らない間に決められた結婚に反対する美緒…。

偶然写真を見て恭哉に気に入られたが、どうして自分が相手に選ばれたのかわからない。恭哉は、若いながらも優秀であり、何より見る人の目を奪うような完璧な容姿を持っている。どう考えても自分とはつり合わない人間…。

彼の真意がわからないまま、美緒は恭哉の射抜くような、まっすぐ

な視線に次第に絡めとられていく…。
その目に見つめられるだけで、身動きできない。決して逃れることなどできない…。

A m o u r ? t e r n e l（永遠の愛）をテーマにした純愛作品です。

誤字脱字が多々あるかもしれませんが、ご了承ください。
また、批難や中傷といった書き込み等は控えてください。

プロローグ

“永遠”なんてこの世には存在しない。

人も物も、いつかは朽ち果てていく。

“永遠”という言葉に当てはまるものなんて存在しない。

だけど、この“愛”は“永遠”だ……。

これから何度生まれ変わろうとも、必ず見つけ出してみせる。

そして、何度でも“永遠”の“愛”を誓おう。

この“愛”なしでは生きていけないように…。

嫌という程愛してあげる……。

いつか好きな人ができて、その人と両想いになる。

それから1年ぐらい付き合って、
誕生日とか何か特別なイベントがある日にプロポーズされる。

「僕と結婚してください」というシンプルな言葉と、
小さいダイヤモンドが付いた指輪…。

突然のことにとまどいながらも、「はい」と少しはにかみながら答える……。

女の子なら誰しも一度は考える素敵な場面。

もちろん私も、いつかは愛する人からプロポーズをされて、
幸せな結婚がしたいと考えている。

でも、今まで彼氏もいたことがない私にとっては、
結婚やプロポーズなんて、当分縁のないことだと思っていた。
思っていたのだが……。

「美緒さん。僕と結婚してください。」

私はある日、愛する人ではなく、
見知らぬ人に突然プロポーズをされることになる……。

第1話 決められた結婚

「美緒。彼は四條恭哉くんだ。」

父に「たまには夕食を食べに行こう」と誘われて行ったレストランで、

男の人を紹介された。

その人は私達が来てからすぐに現れた。

「恭哉くんはお前の夫となる人だ。」

「はい…?」

父に食事に誘われるなんて何かあるに違いないとは思っていたが、まさかこんなことになるなんて、想像もつかなかった。

「どういうことですか…?」

こういう状況になったら誰しも口にする疑問だろう。

まったく意味がわからない…自分は今どういう状況に置かれているのか。

「四條グループのご子息である恭哉くんが、偶然お前の写真を見てたいそう気に入ってな。ぜひとも、結婚したいと申し出てくれたんだ。それで…。」

…なんだ。そういう事か。

「それで私を結婚させたら、四條グループとつながりを持つことができ、うちの事業を拡大できると思ったんですね。私の気持ちを無視して。」

言い終わる前に状況を早々と理解した私は父の話を途中から引き継いだ。

私の家である如月家は会社を経営している。

小さい会社ではあるが、近年事業が成功したこともあり、他社が一目置く存在となりつつあった。

さらに事業を拡大したいと考えていた父のもとに吉報が舞い込んだ。

今、日本で最も勢いのある会社…
四條グループの子息が娘との結婚を望んでいる。

こんなおいしい話を見逃す手はないということで、今回のこの話だ。

「恭哉くんはまだ23歳と若いが、
四條グループの将来を担うとても優秀な人間だ。
そんな彼に望まれて結婚できるなんて、お前は幸せ者だ。」

私の棘を含んだ言葉などはまるっきり無視して、
いかにこの結婚が有意義なものであるかを父は説明する。

「お父さん、私はまだ19歳ですよ？
結婚だなんてまだ早いと思いますが。
それに、大学に通っているのに学業と結婚生活の両立なんてできません。」

聞き入れてもらえるとは思ってもいないが、
それでもやはり嫌だという意志表示はしっかりと示しておきたい。

「もちろん今すぐ結婚という話じゃない。
とりあえずは婚約という形になる。」
「私が婚約もしたくないと言ったら？」

さすがの父も眉根をよせて難しい顔になった。

結婚相手が居合わせている目の前で、
婚約もしたくないなどときっぱり言い捨てる娘に憤りを感じている
のだろう。

せっかくのチャンスをここで潰すわけにはいかない。

「すみません恭哉くん。

今娘は少しばかり遅い反抗期でしてね。

すぐ、私の言うことに反抗したがるのですよ。

本当は、あなたとの結婚を喜んでいるはずなのに、照れているのでしょう。」

四條グループの子息の機嫌をそこねまいと、父は必死に取り繕う。

何が少しばかり遅い反抗期だ。

もう10年以上は反抗し続けている。

今に始まったことではない。

でも、父が一度決めてしまったことは、いくら反抗したところで決して覆らない。

もうすでに、決まったことなのか…。

「わかりました。どうぞご勝手に。この政略結婚が破棄されないよう、

せいぜい四條グループに媚を売ってください。

話がそれだけなら、私はもうこれで失礼します。」

あとは、父が勝手に色々とことを進めて行くのだろう。
ならば私は、それに嫌々従うだけで、もう用もない。

テーブルに並べられた料理にはほとんど手を付けずに席を立つ。

せっかく料理を作ってくれたシェフには申し訳ないと思うが、
父と食事をするというだけで、
初めから食欲なんてこれっぽっちもなかった。

持ってきたハンドバッグを手を持ち、
私は自分の婚約者の顔を一度も見ることなく、
足早に店から出て行った。

第2話 冷えた家族

レストランを出て、私は家路へと急ぐ。

どうして、父はああも勝手に決めてしまうのだろうか？
理解できない。

母が居てくれたら：少しはマシだっただろうに…。

私には家族との思い出があまりない。

父は昔から仕事一筋で、ほとんど家にはいなかった。

だから私は、父親とは家にはいないものなのだと思っていた。
最初からいないものなのだと思っていれば、少しも寂しくなどない。

それに父がいなくても、母がいた。

とても優しく、明るくて、綺麗な人で、私は母が大好きだった。

いつも後ろにくっついて、料理やガーデニングなど、
母がすることはなんでも一緒にやった。

そんな何気ない日常の生活が、とても楽しかった。

でも、そんな母も私が小学校に入学した頃に他界する。

もともと体が弱った母は、

風邪をこじらせてしまい、あっけなく私を置いていった。

母が死んでからは家政婦さんが来るようになった。

しかし、学校に行っている間に家政婦さんが来るので、もちろん私が帰ってくる頃にはいなかった。

せっかく作ってくれた料理も一人で食べると何の味もしない。

ついさっきまで母と笑いあっていたはずなのに…。

私は、広い家に一人取り残されてしまった…。

父は相変わらず忙しかったが、私に気をつかってか、母がいたころよりも家に帰ってくるようになった。

今まではあまり顔を合わせることもなかったし、会話らしい会話もしたことがなかった。

だが、家にいると顔を合わせるようになる。
顔を合わせると当然会話が生まれる。

ろくに話したこともない父との会話なんて、急に弾むわけがない。

「勉強はしているのか」「学校が終わったら早く家に帰れ」など、急に父親面して言われても素直に聞けるわけがない。

当然、私は父に反抗した。

今まで放っておいたなら、
これからもそういう接し方をしてくれればいい。

それでも、養ってくれているのだから、最低限の言うことは聞いた。

悪い男に引つかからないようにと、
地元から離れた行きたくもない女子高に通った。

大学ぐらいは自分の行きたいところに進学したかったが、
やはり同じ理由で女子大に進学させられた。

親子の仲が良くななくても、

結婚は自由にさせてもらえと思っていたのに…。

結局、結婚まで父に決められてしまった。

散々父には反抗してきたが、

ここまでくるともうどうでもよくなってくる。

自分の娘を政略結婚の道具にしか思っていないような人に、何を言っても所詮無駄なことなのだ。

どうでもいい結婚なのだから、相手の顔なんて確認する必要もない。だから、さっき父に紹介された四條恭哉の顔は見なかった。

「でも、やっぱり失礼な態度だったよね…。」

父があらかじめ私に言っておかなかったから、いけないのだ。

だから怒りにまかせて、あんな態度をとってしまった。

さっきの私の態度を見て、相手が「こんな女と結婚できるか」と思ってくれたらしいが…。

携帯の時刻を見ると19時を少しまわっていた。

くだらない思考はやめて、早く帰って寝よう。

そう思って歩くスピードを速めると、急に一台の車が私の横に止まった。

振り返ってみると、運転席の窓が下りた。

「先ほどぶりだね。あ、でも君にとっては初めまして…かな？
四條恭哉…君の婚約者だ。」

第3話 婚約者

驚いた…。まさか追ってくるなんて思っていなかった。

それよりも……。

今、初めて四條恭哉の顔を見たが、
テレビに出ている人気の俳優やアイドルなんかよりも整った顔立ち
で、

一言でいうとかなりの美形だった。

切れ長の目だが、はっきりとした二重で、
鼻立ちもすっきりしており、薄い唇はどこか艶やかで、
大人の男の色気が醸し出されている。

天は二物を与えないというが、彼は例外だと思った。

優秀であるとは聞いていたが、容姿も完璧だった。
私は思わず彼に見とれる…。

しかし、うっかり見とれている場合ではない。
急いで、彼の顔から視線を外す。

何か話さなければと考えるが、思い浮かばない…。

「時間があるなら、少し話をしない？」

「話…ですか…。」

ようやく口から出てきた言葉はたどたどしかった。
当然だ。

今まで見たこともないような美形を前にして、
まともに話せるわけがない。

「さっきは、話もできなかったからね。」

そうだった…さっきはこの麗人を完全無視していた。

一言謝るべきか。

「あの、さっきはすみません。

とても失礼な態度をとってしまったて…。」

私が深々と頭を下げると、「いいから頭をあげて」と言われた。年下の生意気な女にないがしろにされたというのに、彼は気にしていないようだった。

「事前に知っているものだと思っていたんだけど、あの時初めて結婚のこと知ったんでしょ？
なら、仕方がない。」

彼が言う通り、初めてあの場所で結婚のことについて知ったのだ。

おそらく、父は事前に言ったら、私が食事をすっぽかすと思ったのだろう。

まあ、そうするだろうが…。

「父が勝手に決めてしまっていたんです。
私、全く知らなくて…。
だから…その、今回の結婚の話、一度白紙に戻していただけませんか？」

もう決まってしまったことだと思って半ばやけになっていたが、冷静に考えてみれば、話は結婚である。

なぜ、あの時冷静さに欠いていたのか…。
あまりにも横暴な父の行動に心底腹が立っていたからだろう。

学校なら気に入らなければ変わって、一からやり直しもできる。

でも結婚するとなると、そう簡単に離婚することなんてできない。ましてや政略結婚ならなおさらだ。

この人も、こんなに格好いいのだから、無理に私でなくても、他の金持ちの美女と結婚したほうがいいに決まっている。

それに、いくら格好よくても、相手のこともよく知らないのに結婚なんて考えられない。

何にしても、私が結婚したくないと言えば「じゃあ、他探すか」、的なことを考えてくれるかもしれない。

彼だって、結婚を嫌がっている女よりも、喜んで結婚する女の方が気分的にもいいだろう。

「結婚はもう決まったことだよ。

今から白紙になんて戻すことはできないから。」

「え…?」

思っていた答えとは異なっていた。

“私が嫌がっていると知っても、結婚するって言うの？なぜ……？”

「君が嫌だろうとなんだろうと、必ず僕と結婚してもらう。」

第4話 惑わす視線

運転席の窓枠に肘を付いて、私を上目遣いに見る…。

月明かりに照らされた彼の顔はとても美しい。
そして、有無を言わせないような力強い目だ…。

急に、鼓動が速くなる。

「…見たいテレビがあるので失礼します！」

彼に頭をぺこりと下げて、私は夜の街を全力疾走した。

“とにかく、彼が視線に入らないところまで走らなければ…！”

しばらく走ったあと、足を止めて上がった息を整えた。

久しぶりにこんなに走った。

高校までは体育の授業があるが、大学になると希望制になるので、体育をとっていない私は体を動かすことがめつきり減っていた。

ああ…見たいテレビがあるなんて、小学生でも使わないような言い訳だ。

明日は学校が早いからとか、課題をしないといけないとか、もっとマシな言い訳もあっただろうに…。

それでも、あの場所から一刻も早く立ち去りたかった。
そうしなければと思った。

じゃないと…。

彼のまっすぐで、

真剣な眼差しに射抜かれてしまいそうだった……。

反論することが許されないような、
そんな気持ちになってしまいひどく混乱した…。

“ 悪魔って、あんな感じなのかも…。”

そんな非現実的なことをつい考えてしまう程、
一瞬にして、私の心を揺さぶった…。

こんなの初めてだ。

今まで向けられたこともないような、
強い眼差しに惑わされてしまいそうだった…。

まだ、鼓動は速いままだが、私は再び、家へと歩き出した。

短い時間の中でたくさんの出来事があった。
それに、乗じて疑問も浮かぶ。

なぜ、彼は私との結婚を望んでいるのだろうか。
うちは、四條グループに比べるとかなり小さい会社である。

結婚して得するのは、四條グループの後ろ盾を得られるうちだけで、
あっちは損こそしないが、得はしないと思う。

じゃあ、私との結婚を本気で望んでいるとか…？

写真を見て気に入ったと言っていたが、

私の容姿なんて、良く言っても中の上ぐらいだ。

いくら写真写りがよくても、一目ぼれするほでもないと思う。

それに、「今まで彼氏もいたことない♀女として魅力がない」という方程式がすでに私の頭の中ではできあがっている。

どう考えても、自分よりかわいくて、美人な女の子は山ほどいる。なんなら、私がピックアップしてもいい。

あと考えられることとなると…彼がブス専であるか？

いやいや、そんな理由ならあまりにも私は可哀想すぎる…。できるなら、別の理由がいい。

やっぱり、他に何か理由があるのだろうか…。

何にしても、あの人には気を付けなければ…。

惑わされてしまったら、きつと……。

彼に捕われる……。。

「逃げられたか……。」

走り去った私の後ろ姿を見て、彼は一人つぶやく。

「でも、どんなに嫌がっても逃がしてあげない……。」

当然私には、彼のつぶやきなんて聞こえなかった。

「先に僕を捕まえたのは君だ……。美緒……。」

第5話 苦悩

「昨日は疲れたなあ…。」

講義が行われる広い教室の、
後ろの片隅で私は昨夜あった出来事を思い出していた。

やっぱり結婚できないと父に言おうと思ったが、
あれからまた会社へ戻ったようで、家には帰ってこなかった。

もし帰ってきていたら、きっと大喧嘩していただろう。
当たり前だ。

娘の結婚を勝手に決めるなんて、やっぱりどうかしている。

“流行りの、親が子供の代わりに婚活するってヤツ…?”

違うな。あの父親は絶対に自分の会社のことしか考えていないだろう。

会社のことなんて私にはわからない。
だから、口をはさむつもりなんてないが、

自分が政略結婚の道具にされるというのなら話は別である。

「投げやりでも、あんなこと言わなければよかった…。」

“わかりました”と言ってしまった。

今から父に抗議しても、もう遅い気がする。

父が今回の話を断るとは到底思えない。

なら、向こうから断ってもらえないか…。

“でも、どうやって？”

「美緒。どうしたの？ “あゝ”とか、“うゝ”とか言って。」

どうしようかと頭を抱えて悩んでいると、
友達の裕子が空いた隣の席に座る。

「おはよ。声に出てた？」

「うん。 “あゝ”とか“うゝ”とか、
猛獣みたいなうめき声出してたし。」

「あははは」と豪快に裕子は笑った。
何が猛兽だ。

自分だって、猛兽もびつくりするぐらいの笑い方するクセに。
裕子の笑い声はかなり離れた場所からでもよく聞こえる。

「ホント裕子は失礼だなあ。」

「美緒もたいがい失礼だからね。」

二人で顔を見合わせて笑った。

裕子は大学に入ってすぐにできた友達で、今では私の一番の親友である。

趣味も話も合うので、気兼ねなく話せると一緒にいるとラクだ。

「今日って午前中で講義終わるじゃない？」

駅前にできた新しいカフェに行ってみない？？」

「前に裕子が言ってたところ？」

行く！パフェがおいしいんですよ？」

共通の趣味の一つであるカフェめぐり。

甘いものに目がない私たちは、カフェを見つけてはしょっちゅう行っている。

甘いものは良い…。

かわいい盛り付けは見ているだけで楽しいし、
食べると幸せな気分にしてくれる。
お金を払うだけの価値は存分にある。

「じゃあ、この講義が済んだら行こう。」
「了解デス。」

今日は新しいカフェに行ける。
そう思うと、今から始まる眠くて退屈なだけの講義も我慢して聞ける。

楽しみだ。

「じゃあ、今日はここまで」と言って、教授が部屋から出て行った。
まったく、つまらない内容だった。
こんな話を聞いて何の役に立つのだろうか。
まあ、教養を身につけるための講義なんだから仕方ないか…。

「よくっし！美緒行くよくっし！」

早々と筆記用具を片づけて、かばんに仕舞い込んだ裕子は、席を立てて扉の方に歩いていった。

普段は優柔不断でマイペースな彼女だが、こういうことになるときばきと行動する。

「ちょっと、待ってよくっし！」

私も急いで机の上の筆記用具をかばんに詰め込み、彼女の後を追った。

横に並ぶと、さっきの講義の話をしたりなど、他愛のないことを話しながらキャンパスの門に向かう。

すると、門のあたりに女の子が大勢集まっている。

女子大なのだから、女の子が大勢いてもおかしくはないが、それにしても人数が多い。

しかも、きゃあきゃああと騒いでいる。

何かの取材でテレビ局でも来ているのだろうか？
と不思議に思っていると、裕子も不思議に思ったらしく、

「何騒いでんだろ？」と私に問いかけてきた。

女の子の人だかりに近づいて行ってみると、その原因がわかった…。

それは、きゃあきゃああと騒ぎたくもなるだろう。

そこには、昨日会ったばかりの四條恭哉がいた。

第6話 早い再会

なんで、四條恭哉が女子大にいるのだろう。

こんな真昼間から、ぶらぶらしているなんて、仕事はしなくてもいいのか？

それにしても、女の子たちの騒ぎようは凄まじい…。

まるで、韓国のイケメンが空港に来たときのニュースを見ているかのような。

確かに、彼ならそれに匹敵するぐらいかも。

私からは20〜30mぐらいは離れているが、この距離からでも「四條恭哉」だとわかる。

それぐらい、彼は存在感があるのだ。

そこに居るだけで、周りが華やいで見える。

“どこへ行っても、必ず注目されるんだろうな…”

そんなことをぼんやりと考えていると、彼がこっちに顔を向けた。

私の視線に気づいたのだろうか…。

彼のように目立つ容姿なら、

遠くからでもすぐに見つけられると思うが、

私のような平凡な女を簡単に見つけるのは難しいのでは…。

でも、確かに目が合っている気がする…し、

こちらに向かって歩いてきている。

「なんか、男の人がこっちに向かってきてない？」

隣にいる裕子もそう感じたらしい。

私に気づいてからすぐ、彼は目の前に来た。

「君のことを聞いたら、今日は講義が午前中で終わるっていうから、待っていたんだ。」

そう言って、彼は私に微笑みかけた。

まぶしい…。

昨日は夜で暗かったが、明るい陽の下で見ると、とてもまぶしい…。

彼は背が高く、私の頭2つ分はある。

顔が小さく、足が長い。

メンズ雑誌でモデルをしていてもおかしくない。
私が無遠慮に上から下まで眺めていると、彼がずいっと顔を近づけた。

「聞こえてる？」

「うわっ!？」

突然彼の顔がどアップになって、驚いた私は後ろに飛び退いた。

至近距離で顔を覗かれたらかなり心臓に悪い。

もし、私が心臓に疾患があったらどうするんだ。

そんなきれいなモノ（顔）を安易に近づけないでもらいたい。

「そんなに、離れなくてもいいじゃないか。傷つくな……。」
「…すみません。」

反射的になったのだから仕方ない。

人間の習性だ…きつと危険を感じたのだと思う。

彼に近づかない方がいいと……。

私を見てふっと笑った。

もしかして、わざと顔を近づけたのか？

「もう、帰るんでしょ？なら、お茶でもしない？」

そうだ、なぜ彼がここに居るのか考えていたのだった。
やっぱり、私に用があったのか…。

でも、これから裕子とカフェに行くことになっている。
先に約束した方を優先するのが当たり前だ。

彼にはせつかく来てもらって悪いが、
結婚のことを諦めてもらう口実もまだ考えつかないし、
やっぱり友達と遊びたい。

「あの、生憎ですが私はこれから…」
「どうぞ、どうぞ、連れて行ってやってください！」
この子、駅前にできた新しいカフェに行きたいって言うてましたよ
！」

丁重にお断りしようとしていると、
後ろから裕子が私をぐいぐいと彼の前へ押しやった。

「ちよっ…裕子!？」

「美緒の知り合いなんでしょ？」
こんなスーパースイケメンとどうやって知り合ったのよ！
まあいいから、後で教えて！
逃げられないようにしっかりやりなさいよ!!」

裕子は興奮しながら私の耳元へ、小声で話した。

私が振り向くと、裕子は片目を閉じてウィンクをする。

まんまと裏切られた…。

彼氏いるクセに…このミーハーめ…。

第7話 彼の気持ち

ああ…逃げたい…。

なんで、こんなことになっているんだろ…。

今私は、駅前にある新しいカフェに居る。

この、目立つ男…四條恭哉と共に…。

親友にあっさりと売られてしまった私は、誘いを断るわけにいかず、促されるまま彼の車に乗ってカフェへとやってきた。

本当なら、裕子との楽しい時間のはずだったのに…。

「そのパフェおいしい？」

「えっ?…ハイ…。」

季節のフルーツパフェを頼んだものの、緊張しすぎてなんの味だかさっぱりわからない。アイスが冷たいことぐらいはさすがにわかるが…。

もっと、じっくり味わって食べたいのに…。
この人が居たんじゃ落ち着けない。

真正面の席に座って、コーヒーを飲んでいる彼をチラと見た。

ここは、イタリアかどこかか？と思わせるぐらい、
優雅にコーヒーを飲んでいた。

貴族ってこんな感じなのだろうか…。
とても絵になる。

そこら辺のコーヒーをすすっているおじさん達が、
なんだかかわいそうに思える。

それより…周りの女の子の視線が凄い……。

カフェに来ている女の子が、みんなうっとりとして彼を見ている。
彼氏がいる子も、彼氏そっちのけで、彼に釘付けだ。

別に私に対して向けられている視線ではないが、
一緒にいるので、なんだかいたたまれない気持ちになる。

あっちこっちで、こんなに見られて、疲れたりしないのだろうか。

まるで、ずっと監視されているようだ…。
私なら絶対耐えられないな……。

この人は今までたくさんの視線の中で生きてきたのだろう。

こんな息苦しい生活の中に、生き抜きできる時間はあるのだろうか？
きっと、他の人の何十倍も疲れているだろうに…。

なぜか、彼の気持ちが知りたくなった。

「あの…。さっきから、周りの人達があなたのこと見てますけど、
視線とかって気にならないんですか？」

「小さい頃からそうだったからね。もう慣れてしまった。」

コーヒーカップをソーサーに戻して彼は微笑んだ。

やっぱり、小さい頃から人に見られていたのか…。

「どこに居ても注目の的ですもんね。」

さっき、大学に居たときも女の子がすごく騒いでいましたし。」

子供の頃の彼も、存在感があって目立っていたのだろうな。

視線に慣れてしまうのも納得できる。

そう思っていると、微笑んでいた彼がふと悲しそうな顔をした。

「全然注目なんてされたくないんだけどね。

外見だけを見て勝手に評価して：誰も内面を見ようとはしない。それに周りから、跡取りは“こうあるべきだ”“こうするべきだ”と、

自分の意志とは異なることを要求されることが多い。

僕の意志など、周りの人達には関係ないんだ。」

この人は自分とは別世界の人間だと思っていた。

でも、違う。

一緒だ…。私と同じ…。

とても寂しい人だ…。

第8話 生まれる矛盾

私が、父から自分の意に沿わないことを強要されるように、彼もまたそうなのだ。

周りが勝手に彼はこうだと決めつけて、それを望んでいる。

本当の彼の気持ちなど知りもしないで…。

自分のことを分かってもらえないのは、とても悲しいことだ。そして、とても寂しい……。

「あなたを外見で判断する人が多いかもしれませんが、決してそんな人達ばかりではないと思います。

ちゃんと、あなた自身のことを見てくれている人もいるはずです。」

自分と似ていると思うと、そう言わずにはいられなかった…。

「あなたは仕事ができ、とても優秀だと聞いています。

会社では、容姿ではなく、きちんと仕事ができる人が評価されるものでしょう？

あなたは、四條グループのご子息で、人目を引く容姿も持っているけど、

それだけでは優秀な人とは言えません。

そのように評価されるのは、あなたが頑張って努力しているのを、見てくれている人がいるからだとは私は思います。」

素直に思ったことを言った。

芸能界のような華やかなところなら、容姿が整っていればそれでいい。

しかし、社会に出て働くとなると、容姿が良いというだけでは通用しない。

頭を働かせて、迅速かつ完璧に仕事をこなすことが最も必要である。

四條グループのような大手の会社なら、なおさら求められることだろう。

彼は私の顔をじっと見つめていた。

お互いの間に沈黙が生まれる。

…しまった。

まるで彼のことをわかっているかのような言い方だ。

何も知らないのに、自分と似ていると思って勝手なことを言った…。

「…軽率なことを言って、すみません。」

「いや…少し驚いてしまった。」

以前にも似たようなことを言われたものだから…。
気にしないでいいよ。」

そう言う彼は、私の言ったことで腹は立てていないようだ。
ひとまず安心した…。

「君はどうなの？」

主語のない質問に頭がはてなになっていると、
彼が「さっき君が言ったこと」と付け足した。

「“外見で判断する人ばかりではない”と言ったけど、
君は僕のことをどんな風に見てる？」

まるで、私を探るような視線だ。
この人に嘘は付けけないと思った。

「あなたの容姿は目を引くものがあるので、
正直あなたを前にすると、その、何と言いますか…、
緊張…？ いや、委縮…？？」
とにかく変に意識してしまいます…。」

これまで、お目にかかったことのないようなイケメン相手に、
意識するなというのは無理だ。

出会ったばかりで、まだ彼の容姿に慣れていないのに、
彼の内面までを見る余裕は今の私にはない。

それに…私は彼との結婚を断ろうとしている。

結婚を断ろうとしている相手のことを、知る必要なんてない。
でも、私はさっき彼のことを“知りたい”と思った。

自分は矛盾してる…。

第9話 お互いの理由

私に似ていると感じたから、だから、彼のことを知りたいと思ったのだ。

「そうか…。でも君には、僕自身を見て欲しい。」
「…なぜですか？」

彼がこんなことを言うのが理解できなかった。

「結婚相手に自分のことを知ってもらいたい、見てもらいたいと思うのは当然だろう？」

それは、好き合う者同士なら当然だが、私たちは違う。別に好き合っていない。

第一、私は結婚に反対している。

「昨日お話ししましたが、私はこの結婚には反対しています。だから、あなたと結婚することはできません。」

もう一度自分の意志をはっきりさせておこうと思った。

「僕も昨日言ったけど、君と僕が結婚することは決まったことだ。君が嫌がっても結婚してもらおうよ。」

確かに以前彼は同じことを言った。

…けど、やっぱり理由がわからない。

「なぜ私なんです？」

父はあなたが私の写真を偶然見て、気に入ったからだと言っていたが…。

あなたなら、私よりもふさわしい人がいるはずですよ。」

どうして私でなければいけないのだろう。

他に彼に見合う美しい女性はたくさんいるはずだ。

「相手は君でなければならぬ。それ以上の理由なんてないよ。」

「質問の答えになっていません。どうして…」

「じゃあ、どうして君はこの結婚にそんなに反対するの？」

私が彼に問いかけているのに、逆に質問された。

「それは…自分の意志とは関係ない結婚だから…。
それに、会ったばかりの、何も知らない人と結婚なんてできません
…。」

結婚とは、互いを理解しあってからするものだと思っている。

もっとわかり合いたい、もっと一緒にいたいという感情がなければ、
結婚なんてできない。

理由もないのに、容易に結婚なんて出来るわけではない。

出会って間もない彼に到底そんな感情など抱けるはずがないのだ。

「君が僕と結婚したいと思えばいいんじゃないの？」
「は…？」

何を言っているんだこの人は…。

今、「会ったばかりの見知らぬあなたとは結婚できない」
と言ったじゃないか…。

人の話を聞いているんだろうか？？

「さっき君が言ったことは、この結婚を断る理由にはならない。」

「会ったばかりで、あなたのことなんて何も知らないのに、結婚なんてできない。ちゃんとした理由です。」

あなただって、偶然写真を見て私を決めたぐらいなのだから、私のことなんて知らないでしょう？」

これ以上の理由なんてないはずだ。

「君のことは知っているよ。」

「え…どうして…？」

思いがけない返答をされた。

私のことを知っている…？

偶然写真で見ただけのこの私のことを……？？

「…まあ、色々だね。理由はまだ言えない。」

言えない色々な理由って一体何なんだろうか。

ますます何を考えているのかわからない…。

「君は僕のことを知らないから結婚できないと言うけど、それって、僕のことを知ればいいんじゃないの？」

「知る…？？」

「そう。知らないのなら、知ればいいだけのことだ。」

そうすれば、君が望まない結婚をしなくてもいいでしょ？」

当然だとばかりに、彼は言う。

“そうか、知らないなら知ればいいんだ！
なんだ、簡単なことじゃないか！！”

……って納得できるか。

この人言ってることがめっちゃくちゃだ…。

第10話 逃れられない宿命

「あの：結婚は一生に一度の大切なものなんですよ？

これから、私に好きな人ができて、それからちゃんと段取りを踏んだのち、

お互いが同意して結婚したいです。」

こう言えば、この人にも私の気持ちが伝わるだろうか？

一般的なカップルが歩む、結婚までの道のり。

すぐくわかりやすく言ったはずだ。

どうか、伝わってくれ…。

「君さ、自分がどういう立場に立っているのか、
わかって言ってる？」

彼は頬杖を付いて、外の方を見ている。

店の外は駅前とあってか、平日でも人が多い。

特に興味もなさそうに、彼は行き交う人々を眺めている。

そんな彼を私は伺うように見る。

“私の立場…??”

「君は仮にも社長令嬢だよ？」

この先君に好きな男ができて、それなりの家柄や歴史がないと結婚は不可能だ。

つまり言いかえると…、家柄や歴史があるやつとしか結婚できない。

」

外に向けていた視線を、私の方に戻した。

「好きな人ができても結婚できない…?」

独り言のように、言葉がこぼれる。

「そういう家に生まれた者の宿命だ。

今まで築き上げてきたことを子孫は守っていく必要がある。

自分の親や、そのまた親もそうだったようにね。

そして、更に発展し、繁栄させなければならぬ。

そのためにも、政略結婚は必要不可欠だ。」

“宿命”

なんて重い言葉なんだろう。

そこまで、考えていなかった…。

彼に言われないと気付かないままだったかもしれない。

家は家、自分は自分と思ってきたけど、そうじゃなかった。
私も家の一部なのだ。

もう、ずっと前から定められていたことで、
いくら嫌でも、義務なら従わなければいけない。

この家のしきたりや、習わしに縛られて……。

それが、私の宿命なのだ…。

結婚による幸せなんて、私には無関係だった。

「君が思い描いているような結婚はできない。
できないけど、君が幸せになれる方法ならある。」

絶望にも似た感情が私の中に広がっていたが、
そこへ、救いの手が差し出される。

「…何なんですか？」

「僕と結婚することだ。」

頬杖を付いて崩していた姿勢を正す。

「僕は君と結婚することを望んでいる。

あとは、君が僕と結婚したいと思えば、
政略結婚には変わりはないが、君にとってそれは幸せな結婚になる。
そんなに悲観しなくてもいいんだ。」

その言葉は、弱った私の心に容易に入り込む。

“もしかしたら、そうかもしれない…”

そう思う私は、おかしいのだろうか……？

「改めて言うけど…。
美緒さん。僕と結婚してください。」

私を見つめる彼の目…。

この人を前にすると奇妙な感覚に陥る。

見つめられると、自分が捕われた感じがする。

彼から逃れることはできないと…。

視線に絡め取られていくような、不思議な感覚。

今まで感じたことのない、この感覚に私はひどく混乱してしまう…
…。

逃げてしまいたいのに、心のどこかで…
彼になら捕まってもいいかもしれないと思ってしまう。

出会って間もない人なのに、どうしてこんなに心を乱されるのか…。

第11話 彼の一面

「私…。」

どうしよう…。なんて言えはいいのだろう…。
“はい”とは言えないし…。

「まあ、今のこの段階で返事はできないか。」

小さくため息を付いた彼は、
再びコーヒーカップを持ち上げて口に運ぶ。

張り詰めていた空気が途端に和らぐ。

良かった…。

返す言葉が見つからなかったから、沈黙が生まれるところだった。

彼は、カチャとコーヒーカップを戻すと、
いきなり私の顔に手を伸ばしてきた。

“なに…!?”

さっきの緊張が和らいで、すっかり気を抜いていた…。

彼の細く長い指が私の口元にそっと触れる。

「口にチョコレートがついてる…。」

囁くようにそう言って、チョコレートを拭った指をペロっと舐めた。

その仕草はとても妖艶でいて、大人の男の色気を漂わせていた…。

「ちよっ…!?’

「甘い。」

そんな一連の動作を、真正面から見てしまった私は、自分の顔が赤くなっていくのを感じた。

“甘い”ってチョコレートなんだから、甘くて当然…。
じゃなくて、なんで舐めたりしたんだ、この人…!!?

言ってくれたら、おしぼりでごしごし拭くの…!!
今時、ドラマや漫画でもそんなことする人はいない。

こんな恥ずかしいことも、そこらの男がやったらかなり引いてしま
うが、
彼ならなぜかさまになってしまう…。

ああ…もう、うるさい! 心臓…!!
彼にとったら、こんなことは朝飯前なんだから、
ドキドキするなっ!!

「…他の女の人にも、いつもこういうことしてるんですか？」

自分一人だけ、焦っているのが恥ずかしくなって、なんとか誤魔化
そうとした。
きつと、常習犯に違いない。
すぐく手慣れていた。

「まさか。僕がそんなことしよっちゅうしてる男に見える？」

彼は「はは」と子供のように笑う。

完全にからかわれた…。

何か…すっかりこの人のペースにはまっている…。

真剣な顔や、赤面するようなことをしたかと思えば、子供のように無邪気に笑ったりして…。

「私、やっぱりあなたの外見に騙されていました。」

「さっき、君が言ったように外見なんて、
なんの判断材料にもならないんだよ？」

「…そうですね。」

嫌味をたっぷり込めて彼に言うど、あっさりと返された。

“外見はなんの判断材料にならない”

まったくその通りだ。

特にこの人に関しては、大いに当てはまる。

見た目通りの人だと思っではいけない。

今日私が、学んだことである。

さっきの講義よりも、実践的でためになった。

最初は、クールで寡黙で、紳士的な人だとばかり思っていた。
でも、人をからかったり笑ったりもする。

そして、内には悲しさや、寂しさも持っている…。

この短時間で、彼の色んな一面を見た気がする。
私も、彼の外見しか見ていなかったのかもしれない。

「ねえ、一つお願いをしてもいい？」

「なんですか？」

第12話　お願い

私にお願い？

改めて何か言うことがあるのだろうか…？？

「僕のこと、名前で呼んでくれない？」

「名前ですか…。」

「だって、“あなた”だとすごく他人行儀でしょ。」

そう言われればそうだ。

私は、自分の中では“四條恭哉”とフルネームで呼んでいたし。それに声に出すと、どう言えばいいのかわからなかった。

「じゃあ、恭哉…さん。とか？」

「うん。“あなた”よりは、それの方がいいかな。」

私に名前を呼ばただけで、とてもうれしそうだ…。

「それなら、私も“美緒”と呼んでください。

年上の人に“さん”付けされるのって、変だし…。」

友達からは、“美緒”と呼ばれることが多いので、呼ばれ慣れない“美緒さん”よりも、断然そっちの方が自分もしくりくる。

「わかった。美緒…。」

……全然しっくりこない。

名前を呼ばただけなのに、心臓がバクバクする…。

本当にこの人は、心臓に悪い…。

「さて、そろそろ出ようか？うちまで送って行くよ。」

そう言って立ち上がろうとしたところを、急いで制した。

「いえ！私はこれから友達と約束があるので、

送っていただかなくても大丈夫ですっ!!」

焦りのあまり、早口言葉のようになってしまった。
でも、何としても避けたい。彼の車で帰ることは…。

ここまで来る時は彼の車に乗せてもらったが、
大学からカフェまでは車で5分もかからないので、なんとか耐えられた。

…が。

自宅まで送ってもらうとなると、30分…いや、
信号がもし全て赤であった場合を考慮すると40分はかかる。

その間、この人の横に居るだなんて、緊張し過ぎて呼吸困難になっ
てしまう…。

カフェでの二人きりと車中の二人きりでは 格が違う。
私はまだ、そんな上級偏はクリアできない。

彼は「じゃあ、お金は払わせてね」と言っ
て、レジにさっさと伝票を持って行ってしまった。

思わず「割り勘で!!」と言いそうになって口を閉じた。

どう考えても、この人が割り勘なんてするとは思えなかった。

お会計を済ませて、店の外に出た。

「ごちそうになって、すみません。」

一言お礼を言っておこうと思って、軽く頭を下げた。

「いいよ。僕が誘ったんだし。」

それに、本当は友達と行くはずだったんでしょ？
邪魔してごめんね。」

やっぱり、気付いていたのか…。

でも、裕子にあんな風に言われたら、
彼も「やっぱりいいよ」とは言えなかっただろう。

逆に、気を遣わせてしまったのかもしれない。

「今日は君と色々話せて良かった。
結婚のことだけど…僕の考えは変わらないから。」

「私…。」

「君の気持ちもわかってる。
でも、少しずつ僕のことを知ってくれたらうれしい。」

そう言われると、何も言えなくなる…。

「また、お茶でもしよう」と誘われた。

携帯の電話番号とアドレスを赤外線で交換して、
「いつでも連絡して」と言って、彼は車で帰っていった。

第13話 一人の時間

疲れた…。

体力の消耗が激しい。

軽くグラウンド10周したぐらいだ…。

まだ、走ったほうが終わってからの爽快感もあるかもしれないが、今は疲労感でいっぱいだった。

今日は午前中しか講義がなかったはずなのに…。

やだなあ…絶対明日は裕子に質問責めにされる。

あの別れ際の顔…すごく楽しそうだった。

きっと、芸能リポーター並にあれこれ質問してくるだろう。

でも、聞かれたところで一体なんて答えたらいいのか…。

婚約者だけど私はまだ認めていないし、

でも、彼は絶対結婚するとか言っていたし…。

結局どういことなんだと言われそうだが、私だってわからない。今のこのよくわからない状況を誰か、教えてほしいものだ。

「私が望めば、政略結婚も幸せな結婚になる…か…。」

簡単に言ってくれるが、そんなこと普通は簡単にできない。

それは、私だって幸せな結婚ができるに越したことはないと思う。でも、やっぱり会ったばかりの人に対して、そこまで割り切れない。

“知らないなら知ればいい”とも言っていた。

確かに彼のことなんて何も知らない。

もし、彼のことを知ることができれば、自分から結婚したいと思えるようになるのだろうか？

…見つめられて、名前を呼ばれるだけで赤面状態なのに？
この段階では、なかなか難しい。

それにしても、なぜか向こうは私のことを知っていると言っていた。
会ったこともないのに…。

私の身辺に聞き込みでもして、調査したのだろうか…？

別に私について調べたところで、とくに何がわかるわけでもない。

彼のことに關しては、まだまだ考えることが多そうだ。

彼には、友達と約束があるからと言ってカフェで別れたが、そんな約束など誰ともしていない。

でも、このまま家に帰る気にはなれなかったので、近くのショッピングモールに行つて時間を潰した。

服や雑貨などを見たり、コーヒーショップでくつろいでいると、時間はあっという間に経つて、店を出る頃には明るかった空も、すっかり日が落ちて暗くなっている。

ずいぶん長居したなと思いながら、数分ほど駅まで歩いて、電車に乗った。

父からは、「電車など使わずに車で行け」と言われていた。

しかし、それは自分で運転するのではなく、
運転手に乗せて行ってもらおうということを意味している。

冗談ではない。そんな恥ずかしいマネなど出来ない。

私の家はまあまあ裕福であると思うが、それを他人には知られたくなかった…。

あくまでも、自分は普通の子と同じでいたい。

自分が社長令嬢だなどと友達にばれてしまったら、
きっと私に気を使うだろう…。

だから、通学もみんなと同じように電車を使っている。
父は今だに反対しているみたいだ…。

たぶん、金持ちは車での送迎をするものだから、
くだらない概念を持っているのだと思う。

第14話 自分の意見

私の家は2階建ての1軒家だ。

父は忙しくほとんど家に帰ってこないため、
実質私が一人で住んでいる。

家の前まで来ると、誰もいないはずの部屋から明かりが漏れていた。
それを見た途端、私は憂鬱な気分になった。

どうやら、ほとんど帰ってこないはずの父が帰ってきているらしい
…。

重い足取りで、玄関のドアを開けた。
靴を脱いで、自分の部屋がある2階へ上がろうとしたら、
リビングのドアがガチャリと開いた。

「美緒、何時だと思っているんだ。
ふらふらせずに、早く帰ってきなさい。」

2階に上がりかけていた足を止めて振り返ると、
不機嫌な様子の父が立っていた。

「何時って…、まだ20時前ですけど。」

「いつも、19時までには帰ってきなさいと言っているだろう。」

また、始まった。

今まで何回こんなやり取りをしたことか…。

「もう大学生ですよ？門限が19時なんて、いつまで子供扱いするんですか？？」

高校生でも、こんな時間まで遊んでいる子はいらと思う。
それなのに、大学生で19時の門限なんてありえない。

「大学生のうちは子供だ。」

よく言う。

ついこの前までは“高校生のうちはまだ子供だ”と言っていたくせに。

「それより結婚のことなんですが、あの時はお父さんが、私に何の断りもなく勝手に決めてしまっていたので、怒りのあまり承諾してしまいました、やはりお断りします。結婚はしたくありません。」

不機嫌な父が、より一層険しい顔になった。

「…お前は“わかりました”と言っただろう？なのに断るつもりなのか？」

「はい。そのつもりです。ついでに言うと、事後報告になりますが、すでに恭哉さんにはその旨をお伝えしました。」

ただし、向こうは納得していなかったが…。

でも、私の気持ちも少しは尊重してほしい。

彼の言い分も理解できる。

政略結婚をする以外の方法はないとわかっている…。

それなら、決められた流れに従っていけばいいが、私はそこまで物わかりが良くないし、何より気持ちが追いついてこない…。

「恭哉くんに言ったのか!？」

美緒：この結婚の、彼の何が入らないんだ？

四條グループの跡取りで、仕事ができる優秀な人間、
それに加えてあの容姿だ。

お前にはもったいないぐらいの相手だと言うのに…。」

父は半ば呆れている。

「私も、自分にはもったいないぐらいの、素敵な方だと思います。
ですが、結婚には同意しかねます。」

私は、自分の将来をこれ以上勝手に決められたくありません。

私の人生は、私だけのものです。

自分のやりたいようにさせていただきますので。」

前から言おうと思っていたことだ。

私の人生は私だけのもので、父のものではない。

指図されることなく、自分の自由に生きたい。

悪あがきだとは十分わかっている…。

それでも、自分らしく、自由に生きてみたい。

そうじゃないと、人生なんてつまらないままで、

あっという間に終わってしまう。

父に言いたいことを言った私は、そのまま自分の部屋へと向かった。

「美緒…。」

父が小さくつぶやいたのが聞こえたが、私は振り返らなかった。

第15話 忘れていた友人

朝目が覚めて、着替えをすませてからリビングへ行くと、そこに父の姿はなかった。

昨夜遅くか、今朝早くかはわからないが、会社に戻ったようだ。

どっちにしても、少しの間しか家に居ることができないのなら、戻ってこなければいいのに。

会社で休む方がゆっくりできるだろうと思う。

私は、簡単に朝食を用意してテレビのスイッチを入れた。

焼きたてのトーストにかじりつきながら、朝の番組を見ると、
“今日の占いコーナー”が始まった。

私は6月生まれなので、双子座である。

“双子座のあなたは、友達から良いアドバイスをもらえそう！”
“ラッキーアイテムはヒョウ柄の下着！！”

「……。」

友達からのアドバイスならわかる…。

ヒョウ柄の下着なんて、身に付けてどういうラッキーが起るんだ…。
まず、そんなもの持っていない。

もうちょっと身近なものをラッキーアイテムにしてほしいものだ。

最初の結果だけ信じてみよう…。

テレビの隅に映っている時計を見ると、7時半だった。
そろそろ大学に行く時間なので、朝食の片づけをしてから家を出た。

家から大学までは、電車を使って1時間弱だ。
朝の通勤・通学ラッシュは辛いが、
車で送って行ってもらうことを考えれば我慢できる。

大学の最寄り駅から、大学までは近いので、
私は健康のためにも自転車には乗らずに、歩いている。

途中で、何人かの知り合いと朝の挨拶をかわして構内へ入った。
そして、講義が行われる教室へ入ると、
後方からこちらに向かって手を振る人物が居た。

裕子だ。

私は、裕子がいる席まで歩いて行くと隣に腰を下ろした。

「おはよう、裕子。」

いつものように親友に朝の挨拶をすると、返事の代わりにニヤニヤした顔で見られた。

「みーおー…。昨日のあのスーパーイケメン、略して“Sメン”とはどういう関係なのかしらあ？」

忘れていた…。

今日は裕子にあれこれと聞かれるだろうということを……。

「“Sメン” って…ネーミングセンスが全くないし。」

「そこはいいのよ！それより、どうなのよ？？」

知りたくて仕方がないという顔だ。

まあ、裕子が好きそうな話のネタではある。

「どうなのかって言われても…。
今日の講義が全部終わってから話すよ。」

今のこの時間じゃ尺が全然足りないわ。」

後もう5分程で講義が始まる。

中途半端に話すと、裕子が授業そちのけになりそうなので、親友のためを思ってそうした方がいいだろう。

「なに？ 焦らすのかよっ！？」

ああ、すっごい気になるし。授業に身が入らない…。」

先に話そうが、後に話そうがこの人にとっては同じらしい。

っていうか、いつも授業に身が入ってないと感じるのは気のせいだろうか…？

昼からの講義を1つ受けて、本日の講義は全て終わった。

「美緒！ さあ、教えてもらおうわよ。

洗いざらい全て吐いて、楽になりなさい！！！」

2時間ドラマの熱血刑事のような口ぶりで、裕子が私に迫ってきた。暑っ苦しいったらない。

「はいはい、わかりました。
全て話しますから、どっか店に入らない？」

構内で話なんてしていたら、誰に聞かれるかわからない。
私たちは、近くのカフェへと移動した。

第16話 親友のアドバイス

「こっ、婚約しゃあゝ!?!」

「しっ! 声が大きいってば!?!」

大声を上げる裕子の口を押さえると、

裕子はおもごもまだ何かを言っている。

口を押さえていた手を離すと、息をスーハーと吸った。

「美緒、口と一緒に鼻も塞いでたから! 息できないし!?!」

「ごめん、ごめん。でも、裕子が大きな声出すから悪いんでしょ?」

「だって、びっくりしたんだもん。」

美緒がお嬢様っていうのは知ってたけど、

婚約者とかがいるとは思わなかったわあ…。」

裕子には、約束通り全て話した。

私の家が会社を経営していることは、

裕子にだけ言っていたので、その説明をすることは省けた。

「お嬢様とか、そこまですごいものじゃないから。」

「いや、十分凄いでしょ?」

やはり、他の人から見たらそういう風に思われるのか。
裕子はそんなこと気にしないから、いいけど…。

「美緒にあんなカッコイイ婚約者が居たなんてねえ。
やっと、遅い春が来たのに何断ってんのさ。」

「遅い春は余計だから。だって、一昨日初めて会ったんだよ？
会っていきなり結婚だなんて…。考えられない。」

そう、まだ一昨日の出来事なのだ。
たった2日間のことなのに、内容はとても濃い。

「いきなり結婚って言っても、実際結婚するのは大学を卒業してか
らでしょう？」

その間に好きになればいいじゃん。」
「簡単に言わないでよ。その間に好きになればいいけど、
なれなかったらどうするのよ？」

結局、好きでもない相手と結婚することになるのだ。
嫌に決まっている。

「今まで彼氏が居たことがないアンタにとって、最大のチャンスな
のよ！」

あんなイケメン探したってそういないから。
それが、婚約者として向こうからやってきたのよ？

例えるなら、宝くじ買ってないのに1等が当たったようなもんだから。」

裕子の例えはいまいちよくわからない。

何気に失礼なこと言ってるし…。

裕子の言うように、私にとっては良いことなのかな…？
確かにあそこまでのイケメンと出会うことなんて、
これを逃せば二度とこないだろう。

しかし、そんな不純な理由で結婚できるわけではない。

「いくらイケメンでも、よく知らないのに…無理だよ。」

「だから、これから結婚するまでの間に、彼のことを知っていけば
いいんじゃない。」

どっちにしても美緒は政略結婚させられるんでしょう？

よくわからないけど、そういうのって利益重視で、

当人の気持ちなんて関係ないんじゃない？」

「うん…。」

裕子の言ったように、この結婚を断っても、
どのみち政略結婚することに変わりないだろう。

「本当なら、自分も相手も望まないものなのに、

美緒の場合は相手の方が望んでくれているんでしょ？

結婚相手は美緒しかないって。」

「そうだけど…。」

私のことが好きだから結婚したいって言っているのかわからないよ？」

最もわからない部分だ。

彼は、私以外に結婚相手はいないって言ってたけど、それは利益目的なのか、それとも…。

私のことが好きだからなのか…。

彼のような人が、私を好きだなんて、想像するだけでもなんだかおこがましい気がする。

第17話 知らない自分

「それって、向こうが美緒のことが好きなら、結婚してもいいってこと？」

「そういうわけじゃないけど…。」

「私にはそういう風に聞こえるよ。」

もしその人が、自分のこと好きじゃなかったらって思うと不安なんでしょ？

自分だけ好きになちゃったらどうしようって。」

「え…？」

そうなの…？

だから、結婚する気になれないの…？

「そんな風に思っているってことは、その人のことを恋愛対象として見てる…つまり、気になってるんじゃないの？」

“恋愛対象”として…。

考えてもみなかった展開だ……。

「でも、まだ会って2日ぐらいだよ？」

「恋愛に日にちとか関係ないからね。」

会った瞬間に“この人だ”って感じるものだと思うよ。」

会った瞬間…。

私は彼と出会った時のことを思い出してみた。

「会ったときは、思わず見とれてしまったけど…。

でもその後になんだか、射抜かれそうになって走って逃げた。」

「射抜かれそうになった？ってどうゆうことよ。」

裕子は「拳銃で狙われたわけ？」とか冗談を言っているけど、感覚としてはそんな感じだった。

「すごく真剣に見つめられて、困っちゃって…。」

その視線に絡め取られて、捕われそうだと思った。そう思ったから、捕まってしまう前に逃げたのだ。

「なるほどね。それは、恋に落ちる瞬間だったのかもしれないよ？」

「恋に落ちる瞬間って…。」

「美緒はそういう経験があまりないから、

わかってないだけで、本当はそれ以上見つめられると、

好きになってしまいそうだったから、焦って逃げたんじゃないの？」

更に急展開だ。

自分で考えていたこととは、
あまりにもかけ離れたことを言われて驚いている。

「恋に落ちる瞬間って、
自分の全てが相手に捕われてしまったような感覚かも。」

今、裕子が言ったことと、私が感じたことは一緒だ…。

“自分の全てが捕われてしまう”

私を感じたのは、彼に対する危機感のようなものだったけど、
それは“彼のことを好きになってしまいそう”という意味だった…？
だから、好きになってしまう前に、逃げた……？？

「美緒って、誰かを好きになったりしたことってあまりないでしょう？
経験したことのない気持ちに戸惑ってしまったのかもね。」

「そうなのかな…。」

確かに、私は恋愛というか、人を好きになったことがほとんどない。
彼氏は欲しいとは思うけど、人を好きになれないから結果として未だに一人もいない。

「まあ、その人のことを好きになる前に逃げちゃったんだから、振り出しに戻ったってことよね。

美緒はすぐ理由を求めたがるけど、恋は好きになった後から理由がわかるもんよ？

理由がわからないからって、逃げてたら良い出会いを見逃しちゃうんだからね！

政略結婚とか何も考えずに、その人と接してみたらいいんじゃないかな？」

さすが、恋多き女だ。

彼女の言うことはかなりの信憑性がある…。

私は理由を求めたがるから、人を好きになれなかったのか…。

それが判明した今でも、彼のことを恋愛対象として見ているのか、自分ではわからない。

わからないけど、本当の自分の気持ちを知ってみたいと思う。

彼が言ったように、知らないことやわからないことなら、これから知っていけばいいのかもしれない。

これで、私が彼との結婚を頑なに拒否する理由がなくなった…。

第18話 メール

「それにしても、美緒は恋愛に疎すぎるよ。そりゃあ、今まで彼氏ができないはずだわ。」

「だって、よくわかんないんだもん。」

裕子が言うように、私は恋愛に疎いのかもしれない…。誰かを好きになったりしたことがないから、恋愛面が発達不足なのだろうか？

…かなり深刻な問題だ。

「これから、少しずつわかるようになるよ！」

私が深刻に考えていると、裕子が明るく励ましてくれた。やはり、持つべきものは友達だ。

「それにしても…あの人、ほんとうにカッコ良かったわあ。顔は完璧に整ってたし、背も高くて超イケメンだった。」

裕子は、うっとりとした表情で彼のことを思い出している。

「彼氏いるクセにそんなこと言っているの?」

確か、付き合ってから半年ぐらいの彼氏が居たはずだ。

一度会ったことがあるが、とても物腰がやわらかそうな好青年だった。

「彼氏は彼氏。イケメンは目の保養になるからね!」

「そんなもんかね?」

「だって、カッコイイ人にはどうしても目がいつっちゃうんだもん。でも、カッコイイなあって思うだけだよ?」

そこに恋愛感情はないから。一番好きなのは彼氏だしね!」

裕子はミィハーだが、一番はやっぱり、彼氏なのか。なんか、のろけられた気がする…。

「美緒さ、彼と連絡先を交換したんでしょ?」

「うん。」

「ちゃんと、連絡した?」

「してないけど?」

裕子は私の方を見て、「はあ〜」と長い溜息を付いた。

「そこがだめなのよ。いい?」

連絡の交換をしたら、その日のうちにちゃんと連絡すること!」

「私からしたら、なんか迷惑かかって思ってた…。」

忙しい人だから、空気を読まずに連絡なんてしたら、迷惑かもしれないと思ったのだ。

「遠慮なんてしないでいいの!最初はまず、メールのやり取りからね。」

メールなら、向こうが忙しくても、あんまり関係ないし。」

「へえ…。」

そうか、メールでいいんだ。

なぜか電話のやり取りしか思いつかなかった。

メールなら、時間のある時に見るから、迷惑にはならないだろう。

「何納得してんのさ。さあ、早速メールしなさい!!」

「今すぐ!?!」

「アンタのことだから、後回しにしたら絶対忘れるよ。」

簡潔な文章でいいから、送ってみなよ?」

「ホレ、さっさとする」と急かされたので、メールを送ってみることにした。

“昨日は、ごちそうさまでした。お仕事頑張ってくださいね。”

短い、これが一番良いかなと思って、彼に送信した。
ちゃんと読んでもらえるだろうか？

「男の人って、あんまり長い文章って読むのがめんどらしいから、
美緒ぐらい簡潔な文章はきつと読みやすいんじゃないの？」

意識したことはなかったが、そうなのかも。

裕子や他の友達から来るメールは、
絵文字がたくさんあったりするので、結構文章は長い。

対して私の文章はというと、絵文字をあまり使わないシンプルなものだ。

遊びに誘われたときの返事も、“わかった”とか、“了解”という
言葉で返すし。

「もっと絵文字とか使った方がいい？」

「別に。美緒はそれでいいんじゃない？」

私なんかは、なんでも派手好きだから、
メールもデコらないと気が済まないのよね。」

あははと豪快に裕子が笑っていると、私の携帯のバイブが鳴った。
携帯を開いて見てみると、送信者が“四條恭哉”となっていた。

“メールありがとう。うれしいよ。もう一仕事頑張れそうだ。”

裕子に返事がきたことを言うと、「よかったね」と笑った。

思ったよりも、早く返信があった。

忙しいだろうに、ちゃんと返信してきてくれたことが、素直に嬉しかった。

第19話 約束

あれから、3週間程メールでやり取りをした。

その日あったことや、天気の話など…他愛もない内容だ。

私がメールを送ると、その日のうちに必ず返事を返してくれたし、逆に彼のほうからメールが送られることも多々あった。

メールのやり取りなら緊張せずに会話ができるので、私が思ったことや感じたことを色々と話した。

自宅で、テレビを見ていると、いつものように彼からメールが送られてきた。

“こんばんは。やっと仕事がひと段落したよ。
明日もし暇なら、ランチにでも行かない？”

「ランチ…。」

特に明日は何も用事はない…が、どうしようものかと考えた。

この前、裕子に彼を“恋愛対象”として見ていられると言われてから、以前よりも彼を意識してしまっている…。

メールだったら、文章だけのやり取りなので、緊張なんてしないが、会うとなると緊張してしまうだろう。

用事があるとか適当に言って、断ってしまおうか…。

一瞬そんな考えが浮かんだが、止めた。

せっかく誘ってくれているのに、嘘を付いて断るなんて失礼だ。それに、逃げてばかりじゃだめだって裕子も言っていたし…。

“お疲れさまです。明日は用事ありません。ランチをご一緒させてください。駅まで出て行きましょうか？”

逃げずに、彼の誘いを受け入れることにした。しばらくすると、返事がきた。

“よかった。朝、少し仕事をしてからになるから、駅まで出てきてもらえると助かる。じゃあ、11頃に駅へ迎えに行く。”

仕事がひと段落したと言っていたのに、明日も仕事をするのか…。本当に忙しいんだろうな。

“わかりました。”

返信をすると、さっそく問題が生じた。

「明日、何を着て行こう…?」

友達ならデニムとかでもいいが、相手は誰もが振り返るイケメンだ…。

それなりの格好をしなければいけない。

と言っても、まさかパーティードレスなんて着れないし…。

悩みに悩んで、先日買ったばかりの、ギンガムチェックのワンピースを着て行くことにした。

「それにブーツを合わせよう。」

かばんは何を持って行こうかと考えていると、ふと思った。
とても自分が楽しみにしているということを…。

「すごい、張り切ってるし…私…。」

誰も居ないのに、思わず笑ってしまった。

いつもなら、適当なものを選んで出掛けるのに、
今回はかばんまで何を持って行こうか考えてるなんて…。

女の子がデートをする前日って、こんな感じなのだろうか？
相手の目に少しでもかわいく映りたいから、一生懸命考える。

…って、何恋する乙女的な考えをしてるんだ！？
別に恋人でもないし、デートするんじゃないのに。

でも、男の人とランチをするっていうのは、デートって言っ
ないのか…？

イヤイヤ、ただ単にお食事をするだけだ。

なのに、なんで自分はこんなに張り切っているんだろうか？
鏡を見ると、生き生きとした顔が映っていた。

イヤイヤ、違う違う。
きっと、初めての出来事だから、知らない間に張り切ってしまったんだ。

それにしても、張り切り過ぎな気が……。

様々な考えが頭の中を巡って夜が更けていった。
やはり、私は理由を深く追求しすぎるのかもしれない……。

第20話 待ち合わせ

出かける準備を済ませた私は、戸締りをして外に出た。

昨夜の天気予報の通り、今日は快晴。

空を見上げると、季節は秋だというのに、
まだまだ日差しが強かった。

近くの駅までは、徒歩で15分程である。

少し家を早く出てしまったが、遅れるよりはいいかと思い駅へ向かった。

駅について携帯の時計を見ると、10…45だった。

約束の11時までは、まだ時間があつたので、ベンチに座った。

駅前にはたくさんの方が居た。

友達や恋人と楽しそうに話している人や、

私のように誰かを待っているような人など、それぞれだ。

しばらくの間、人間観察をしていると、携帯のバイブが鳴った。
見てみると電話のようで、“四条恭哉”と表示されていた。

「恭哉さんだ…。」

電話に出ると、「もしもし?」という声が聞こえた。

「今駅前の駐車スペースに車停めているんだけど、もう着いた?」
「はい。私も今駅前に居ますので、そちらまで行きますね。」

私が居る場所から、彼の居るところまではすぐなので、
急いで向かった。

きょろきょろして、彼を探して居ると、「こっち」という声がしたので、

目を向けると運転席の窓を開けて、こちら向かって手を振っていた。

「おはようございます。」

「おはよう。走ってこなくてもよかったのに。」

助手席に乗ってくれる?」

走ってきたので、少々息が上がっていた私に彼は苦笑した。

助手席のドアを開けて「失礼します」と言って車に乗り込んだ。

「もしかして、結構待ってくれてた？」

彼が気遣うように尋ねてきた。

「いえ、私もさつき着いたばかりです…。」

やばい…緊張してきた…。

運転席と助手席って結構距離が近いんだ。

彼の方をチラッと見てみると、

黒の細身のパンツでTシャツの上に薄手の上着を着ていた。

スーツを着ているところしか見たことなかったので、

意外にラフな感じの私服姿がとても新鮮に思えた。

スーツの時は“できる男”という雰囲気だったが、

今日は本当に雑誌モデルのようだった。

カッコイイ人は何を着てもやっぱりキマっている。

「さて、どこに行こうか…何が食べたい？」

彼が問いかけてきたので、余計な思考は頭の隅に置いた。

「えっと…。私いつも行くっていったら、
カフェが多いので、たまには違うお店にも行ってみたいかなと…。」

大抵、外で食事をするとなると、
友達とカフェに行くので、カフェ以外の店はあまり知らない。

「なら、イタリアンとかどう？近くに美味しい店があるんだけど…。」
「イタリアン好きです。そのお店に行ってみたいです。」

そう言うと、彼はこちらに顔を向けて微笑んだ。

「じゃあ、そこに行くか。」

「…はい。」

そんな至近距離で微笑まないで欲しい…。
うるさいぐらいの心臓の音が彼に聞こえてしまいそうだ。

やっぱり、緊張する。

息が上がって変質者のように、はあはあ言っていないだろうか…？

平静を保とうとしても、私の意志とは関係なく、
どうしても彼を意識してしまう。

「今日の格好、かわいいね。美緒によく似合ってる。」
「ありがとうございます…。」

運転しながら言われたので、顔は見えなかったが、
向かい合って言われたら、かなり赤面してしまう台詞だ。

照れずにサラッとと言える彼がすごい。

「恭哉さんは、私服って結構ラフな感じなんですね。」
「いっつもがっちりしたスーツだから、私服はラフな方がいいんだ。」

「…よく似合っていると思います。素敵です。」

男の人なんて褒めたことがないので、どう言えばいいのか分からなかったが、
感じたことをそのまま伝えた。

「ありがとう。すごく嬉しい。美緒はほめ上手だね。」

彼には負けるが…。

こんなこと、他の人からもいっぱい言われているだろうに、
彼の言葉通り、とてもうれしそうだった。

第21話 緊張のランチ

車で20～30分行ったところに、その店はあった。

“隠れ家”という言葉がぴったり合いそうで、場所もあらかじめ把握していないと、迷ってしまういそうならわかりにくい。

車から降りて店のドアを開けようとすると、後ろから手が伸びてきた。

「お先にどうぞ」と言って、彼がドアを開けてくれる。

あまりにも自然なエスコートで、
“もし執事が家に居たらこんな感じかな…”と想像してしまった。

店内へ入ると、わかりにくい場所にある店にも関わらず、何組かお客さんが居た。

一番奥の席に着いてからメニューを広げて、サラダやパスタ、ピザなど、取り分けて食べれそうなものをいくつか注文する。

店内は余計な装飾品がなく、クラシック音楽がBGMとして流れている。

席と席の間隔が他の店よりかなり広めなので、ゆったりとして落ち着いた雰囲気だ。

「結構良い店でしょ？」

私が店内を見回していると彼が声を掛けてきた。

「はい。とても落ち着いているし、オシャレです。」

さすが、彼が選んだ店である。

おそらく想像だが、男の人がランチに行こうと言ったら、ファミレスのようなところではないのだろうか。あくまで、想像であるが…。

ふと彼と目が合った。

が、私は合っていないふりをして店の外を見た。

私は未だに緊張している状態だ…。

さっきも緊張していたが、彼は運転していたので顔を見ずに話せて

いた。

「もしかして、僕のこと避けてる？」

「うへっ!？」

思わず出したこともないような奇声を上げてしまった。

「さっきから…いや、初めて会った時からずっと、僕の目をあまり見ないから…。」

「そっ、それは…」

「やっぱり、僕は顔も見たくないぐらい、君にとっては不快なものなんだろうか…?」

目を伏せてとても悲しそうな顔をしている。

「違います!全然そんなじゃないんです!! 私、どうしても恭哉さんを前にすると動悸が… いえ、緊張してしまっんです!!」

何気にかミングアウトしてしまった…気が…。

その時、店員さんが「お待たせいたしました」と料理を運んできた。
なんて、タイミングが悪い…。
逆に良いのか？

全ての料理をテーブルに並べ、「どうぞごゆっくり」
と言って去っていった。

「……………」
「……………」

奇妙な間ができてしまった。
すると、突然彼がぷつと噴出した。

「ははは…！そんなに必死な顔しなくていいから。」

笑い出すぐらい必死な顔していたんだろうか？

こっちは、誤解されたいいけないと思って、必死だったのに！

「そんなに笑わないでくださいよっ！」
「ふふ…ごめん。あんまり必死に言うから、かわいくってさ。」

彼はクスクスと笑っている。

でも、何だか意外…。

この人でも、こんな風に声を出して笑うんだ。

会うたびに、彼の新しい一面が見えてくる。

“温かいうちに早く食べよう”と言って、料理をお皿に取り分けた。食べてみると、想像以上に美味しかった。お腹も減っていたので、食も進む。

「僕に緊張するの？」

もう済んだ話だと思っていたが、まだ覚えていたようだ。

「だって、そんな綺麗な顔で見られたら、誰でもドキドキしちゃいますよ。」

なかなか慣れないものだ。

「ふーん…。そっか。」

あれ…？

もしかして、嫌な思いをしたのだろうか？

以前、彼は“周りの人は自分の外見しか見ていない”と言っていた。

私も、その人達と同じだと思われたのかもしれない。

第22話 海でのドライブ

それから、何だか気まずい空気になってしまった。

何か言わなければならないと思うが、何と言えはいいのかわからなかった。

食事を済ませて、会計をするためにレジに向かう。

私がかばんから財布を出そうとすると、「僕が出すから」と言われた。

反論するわけにもいかないので、ご馳走になった。

店を出て、彼の車に乗り、

「どこか、ドライブでもしようか」と彼が言ったので、車を走らせる。

そのまま1時間程走ったと思うが、その間も沈黙が続く…。

車が、海岸沿いの駐車スペースに停車した。

“さっきから、何も話さない…。やっぱり怒ってしまったのかも…
…”

それでも、ちゃんと言っておかないといけないと思って、
彼の腕をぐいと引っ張った。

「あのっ！確かに、恭哉さんの顔を見ると緊張してしまうけど、
外見で判断しているとかではありません！！」

自分の本当の気持ちだ。

誤解されていると思うと嫌だった…。

何だか、今日は彼に弁解ばかりしている気がする。

彼は一瞬びっくりしていたが、すぐに笑顔を見せた。

「うん。わかってるよ。」

「えっ？」

「もしかして、僕が怒っていると思って、ずっと気にしていたの？」

「う…。はい……。」

「てっきり、気分が悪くなったのかと思った。」

だから、私に気を使ってあまり話かけなかったようだ。

「美緒は僕のことを、外見で判断するような子じゃないって。ちゃんとわかってるよ。」

そう言って、彼は微笑んだ。
よかった…ちゃんとわかってくれてた。

「でも、君が僕の外見に意識してるって聞いて、嬉しかったんだ。」

114

嬉しい？怒るんじゃない？
外見で判断されることを嫌悪しているのに…？
どういうことだろうか。

「こんな煩わしいばかりの外見でも、君に意識してもらえてるって
思うと、
この容姿に生まれてきて良かったなって。」

ああ…もう…。

どうして、そんなこと平気で言えるんだ…。
冗談でも言わないで欲しい。

顔から火が出る……。

「顔が赤いよ？」

私が赤面していたら、“車の中暑い？”と、見当違いなことを言っている。

誰のせいだと思っているんだ…。

「恭哉さんが照れるような、恥ずかしい冗談を言うからです。」

なるべく顔を見られないように、下を向いた。
きつと、耳まで赤いと思うけど…。

「冗談じゃないよ。」

本気なら、尚更この人性質が悪い。
天然でこんなこと言うなんて。

「僕はこの外見で良い思いをしたことなんて、ほとんどないからね。」

「そうなんですか？ 学生の時とか友達たくさん居たんじゃないですか？」

目立つから、友達がすぐにたくさん出来そうだ。

それに、学生時代とかめっちゃくちゃモテて、女の子をはべらせてそう…。

「仲の良いやつは居たけど、

それ以外の人は、やっぱり信用できないって感じだったな。

ここまで来ると人間不信かもしれないね。」

自分がその人達に必要なにされているのか、きっとわからなかったんだろう。

彼の周りにたくさん人が集まっていたても、

“ 本当の自分を見てくれているのか ” と不安だったんだ…。

そう思っていると、彼は私を見つめ、手を伸ばしてきた。

“ なに…？ ”

すると、私の胸の下辺りまで伸びている髪を、ひと房すくい取りそれを指に絡めた。

「僕はね、自分の人生に、多くの人間は必要じゃないと思ってる。上辺だけの関係なんていらない。」

まっすぐな彼の目が、私の動きを停止させる。

しかし、私の鼓動は速さを増す…。

「本当に自分に必要な人だけが、傍に居てくれたらそれでいいんだ…。」

指に絡めた私の髪を口元に持っていき、小さなキスを落とした。

まただ…。

この場から逃げてしまいたいと思う……。

でも、逃げられない……………。

第23話 困惑

彼の行動に戸惑っていると、手が離されて、自分の元へ静かに髪が戻ってきた。

「せっかくだから降りようか。」

何事もなかったかのように、ドアを開けて車の外に出た。ドアの閉まるガチャツという音で、はっとして私も外へ出る。

いけない…。

想定外の事態が起こり過ぎて、私の乏しい知識では対処しきれない。

誰か、“こういう時はこう対処する！失敗しない上手な返し方。”なるマニュアルブックを作成してほしい…。
発売されたら、速効買いに行く…。

彼の隣に行くと、海の方から風が吹いてきた。肌に当たると、結構冷たい。

太陽は西に傾きつつある。

日中はまだ日差しが強く暑いが、

陽が沈み始める夕方になるとかなり涼しくなる。

彼も同じようなことを考えていたようで、

「陽が沈むのが早くなつたね」と、まぶしそうにしている。

私は、そんな彼の横顔を見て、奇麗だと思った。

彼に引きつけられるように、その横顔に見とれてしまった。

「やっぱり、僕と結婚するのはイヤ？」

海を見つめながら、彼はぽつりと言った。

その表情からは何も読みとれず、彼が何を考えているのかわからない。

「前は…嫌でした。

強いられた結婚なんて思っていました。

けど、今は…そうでもない…です。」

あんなに嫌で仕方がなかったのに、最近はそこまで思わなくなった。
どういう心境の変化かは、自分にも分りかねる。

説明の付かない感情に、混乱するばかりだ…。

「会って初めは知らないことばかりだけど、
徐々に相手のことがわかっていくようになる。

僕はもっと君のことを知りたいし、

君にも僕のことをたくさん知ってもらいたい。

政略結婚かもしれないけど、君には望んで結婚してもらいたいから
…。」

政略結婚なら、相手の気持ちなんて考えないだろうに、
彼は私のことを気にして、考えてくれている。

そう思うと、胸が苦しくなった…。

「私は自分のことしか考えていなくて…。」

彼の気持ちまで考えられる余裕がない。
自分のことで精いっぱいなのだ。

「僕も自分のことしか考えてないよ。」

「そうなんですか？」

それでもちゃんと、私を気遣ってくれているのに。

「頭の中では計算してるんだ。

どうやったら、君の気を引くことができるかとか、そんなことばかり考えてる…。

でもね、仕事なら計算通りにいくけど、

人の心はそう簡単にはいかない…。

計算するんじゃないだめだって…そう思ってる。」

変わらずに海を見つめている彼の表情からは、
やっぱり何も読みとれない。

その言葉も、私を揺さぶるための計算されたものなのかもしれないが、

それでも、彼の本心であるような気がした…。

「暗くなる前に帰ろうか。」

そう言って、彼は車の方へと歩き出した。

私は、その後ろ姿を見つめた。

彼の思っていること、感じていることを、
もっと知りたい……。

第24話 帰り道

帰り道は、今日のイタリアンがおいしかったという話から、ほとんど食べ物のお話をした。

私のオススメのカフェを紹介したり、彼の行きつけのレストランを教えてもらったり…。

「恭哉さんは、色々お店を知っているんですね。」
「そう？仕事で使ったりもするからね。」

俗に言う“接待”だろうか。
相手の好みに合わせて、いろんなジャンルの店を知っておく必要があるのかも。

「また、誘ったら一緒に行ってくれる？」
「…はい。」

断る理由もないし、彼のチョイスした店なら間違いないだろう。

「次は自分の分はちゃんと払いますので…。」

いつも彼におごってもらうなんて、あつかましい。
高級店なら厳しいが、普通の店なら自分のぶんぐらい払える。

「何言ってるの。僕が払うから大丈夫だよ。」

「でも…。」

「僕が払いたいんだから、気にしないでいい。
おいしそうに食べてる君を見ると、こっちも払いがいがあるしさ。」

そんなにがつついて食べているんだろうか…。
もっと上品にしなければ…！

「でも、朝・昼・晩と毎日100万ぐらい使われると、
さすがに僕も金欠になるかも。」

クスクスと笑うので、私もつられて笑ってしまった。
彼でも“こんな冗談を言ったりするんだ”と思うと、
余計におかしかった。

「まあ、とにかく気にしないで。」

僕に付き合ってもらおうお礼だと思って。」

「はい。ありがとうございます。」

話していると、あっという間に私の家まで着いた。

「家まで送らせて」と言われたので、

その言葉に甘えて、家の前まで送ってもらった。

もう家に着いて、後は車を降りるだけなのだが、
なぜか…すぐに降りる気になれなかった。

「えっと、メール何回か送らせてもらったんですけど、
迷惑じゃなかったですか？」

とりあえず、何か会話をしようと口に出してみたが、
この内容はかなり今更な気がする…。

それに、聞かなくてもなんとなく答えがわかる…。

「全然。最初の返事の通り、すごくうれしかった。」

ほら、やっぱり…。

この人ならきつとこう返すだろうと思った。

それでも、そう言ってもらえるとこっちもうれしくなる。

「仕事の邪魔とかになってないかなって…ずっと思っていたんです。」

「邪魔なんかじゃないよ。むしろ助かってるんだ。」

私のあの超くだらないメールが？

自分で送っておいてなんだが、

わざわざメールにするまでもないような内容だと思う…。

「疲れたときに、君のメールを見ると元気になるんだ。
すぐ息抜きできる。」

「あんなメールでも…ですか？」

「うん。」

そんな風に思われていたんだ…。

もっと、マシなこと送ろうかな…。

「だから、これからも君の感じたことや思ったこと、
内容はなんでもいいから、送ってほしい…。
もっと、美緒のこと…教えて？」

私が座っている助手席の後ろに腕をまわし、
目を細めて怪しく笑う…。

「美緒も、僕の知りたいことがあったら、言って？」

知りたいことは何でも教えてあげる…。」

……………。

全身が赤くなってる気がした。
今日、何度目の赤面だろう…。
いちいち数なんて数えてない。

絶対、私が赤くなるのをわかっていて、そんな笑い方をしてきたに
違いない…。
確信犯だ。

今のは、絶対計算したことだろうと思う。

彼の計算通り、私はまんまと彼の罠にはまってしまった…。

第25話 気付かないふり

家に帰ってきたら、ちょうど18時だった。

朝の10時半頃から出掛けて、もうこんな時間になっているなんて思わなかった。

以前、カフェでお茶をした時の方が、時間は短いはずなのに、その時よりも時間の経過が早く感じられた。

今日も緊張はしていたけど、彼と普通に会話することができた。彼との会話を楽しんでいた。

少し慣れたのかも…。

正確には耐性が付いたというか……。

でも、たまに見せるあの艶っぽい態度には、どう対処していいのかわからない。

彼のああいう行動には、慣れない…。

逃げられないように視線で縛りつけて、接近し、
甘い言葉を囁いて誘惑する…。

“ 誰に対しても、あんな風にするの？ ”

ふと、そんな考えが浮かぶ。

彼ぐらい素敵な男の人なら、意味ありげな視線を向けるだけで、
簡単に相手の心を揺さぶれる…。

例え、彼にそんなつもりがなくても、

“ 自分は特別だ ” と勘違いする人もいるかもしれない。

“ そんなの……！！ ”

.....。

その後の言葉は…？

いつもの私なら“そんなの、私には関係ない”
と思って流すだろう。

だけど、今の私は…。

“そんなの、嫌だ…！！”

そう思った。
なぜ…？？

自分でも説明できない感情…。

違う。

本当はわかっている。

わかっているけど、わからないふりをしているだけ…。

一度自分の気持ちに気付いてしまったら、もう引き返せない。
きっと、自分でもその気持ちは止められない…。

今でさえ、こんなにも胸が締め付けられるように苦しいのに、
もっと苦しくなる…。

知らない自分を知るのは、とても不安で、怖い…。

だから…。

気付いていないふりをしよう…。
それが楽だから……。

かばんの中の携帯のバイブが鳴る。

メールだ。

「恭哉さん…。」

“今、家に着いた。今日は時間を作ってくれてありがとう。君との距離が少し縮まったって思うのは、僕の自惚れではないよね？また、連絡するから。”

この人は、こんな文章でさえ、私の心をいとも簡単に揺さぶる。

また、胸が痛む…。

どうして私なんかのことを、気遣って、思ってくれるの？
どうして優しくしてくれるの…？

私が政略結婚の相手だから？
それとも…。

“あなたの気持ちが変わらない…”

知りたいと思ったのに、今は知るのが怖い。

玄関のドアが開く音がした。
父が帰ってきたのだろう。

「美緒、来週の土曜の夜はスケジュールを開けておきなさい。」

リビングのドアを開けると、開口一番にそう言った。

「土曜の夜に何かあるんですか？」

また食事なら断りたい…。

「取引先の会社が設立記念パーティーを開くんだが、その社長さんが、お嬢さんと一緒にどうぞと言っている。せっかく、そう言ってくれているのに断るわけにもいかないからな。お前も出席させてもらいなさい。」

面倒なことになった…。

私はパーティーが苦手だ。

あんなのに参加して一体何が楽しいのだろうか。

子供の頃はおいしい料理が食べられるからと、行くこともあった。

最近、忙しいとか理由を付けて断っていたが…。
先にもう承諾しているなら、行かないわけにいかないだろう。

私が出席したところで、特にすることもないのに…。
行く意味があるのか、甚だ疑問だ。

私が嫌な顔をしているのを見て、父はため息を付いた。

「当日までに、秘書の子にお前の服などを用意してもらおうから、それに似合うように、今みたいな顔を止めて笑っていなさい。」

言い終わると同時に、父の携帯が鳴った。

仕事の要件のようで、帰ったばかりにもかかわらず、慌ただしく出掛けていった。

笑っているだなんて…。

おかしくも、楽しくもない場所で笑えるものか。

取引先のパーティーか…。

ということは…。

「恭哉さんも来るのかな…？」

しばらく彼には会いたくはないな…。

どうすればいいのかわからないのに、彼を前にするとよけい混乱してしまう…。

そう思うと、ますます行くのが憂鬱になった…。

第26話 ひも解いていかれる心

「はあゝ…」

私は今日、何回目かもわからないぐらいの深い溜息を、教室の片隅でついた。

原因は…パーティーのことももちろんあるが、一番は彼のことだ。

ここ数日、頭の中は彼のことではいっぱいだ。
変わらずメールのやり取りはしているが、
なんだかムラムラ…違う。もやもやしている気分になる。

これまで感じたこともないような、
何ともいえない妙な気分が続いている…。

教室に、教授が入ってきて、講義が始まった。

教授が慌ただしく黒板に板書をしているが、
私は全然授業に集中できていない。

手にシャーペンを持ってはいるものの、
手元にあるノートにはまだ一文字も書いていない。

授業を聞こうとするが、頭に何も入ってこない。

すると、突然横に座っている裕子からメモが回ってきた。

“どうしたの？元氣ないじゃん。”

まったく、裕子の観察眼には感服する。

“そうかな？普通だよ。”

でも、心配をかけたくないの、あくまで平静を装う。

“うそつけ。全然ノートとってないじゃん。”

いっつもなら、教授のくだらない発言までメモってるくせに。

何か悩んでることでもあるんでしょう？

優しい裕子さんが、話を聞いて差し上げる。

だから、言ってごらんよ。っていうか、さっさと言って。言え。”

彼女の目はごまかせないか。

よく私のことを見てるな…。

…でも、なんか文章の後半は脅しみたいだったけど。

なんだか、それも裕子らしくて笑えた。

今日の講義が全て終わったので、荷物をまとめて帰ろうとすると、裕子に腕を引っ張られた。

「ほれ。行くよ！」

「ちよっ…行くって、どこに？」

廊下をぐいぐいと引っ張られながら歩く。

「どっか適当な店に入って、アンタの悩みを聞いてあげる！」

いつもにも増して、強引だ…。

彼女からは、どうやら逃げれそうにない。

大学の近くの喫茶店に入って、店員さんに注文する。

頼んでからすぐに注文した飲み物がきたので、ひとまず口にした。

「で？恭哉さん…？だっけ？？と何かあったの…？」

一息ついてから、裕子がおもむろに話し出す。

私が何に悩んでいるかなど、一言も言っていないのに、ずばりと裕子は言い当てた。

そんな風に私が思っているのが、顔に出ていたようで、

「今、悩むことって言ったら、その人のことしか考えられないし」と、言われた。

完全に、私の思っていることがばれている。

「…この前、彼とランチに行った。」

「えっ！？何！デートしたの…！」

なぜか、裕子は興奮してる。

「そういうのじゃないから。ただ、会ってランチしただけだよ。」

「それを一般的には、デートっていうのよ…！」

そうなのか…。

あれはやっぱりデートだったのか…。

「それで！それで！！」

早く続きを聞かせろと言わんばかりに、催促する。
心なしか、鼻息も荒い…。

「会って、ランチして。それで…。」

「きゃー！まさか、キスでもされちゃったの！？」

突然、突拍子もないことをさらっと言われて、
私は口に含んでいた飲み物を、危うく吹き出しそうになる。

「違う！勝手に想像して盛り上がらないで！！」

「は？違うの？？何だ。つまらん。」

想像力が豊かなのはいいが、私で想像しなくてもraithたい。

「じゃあ、何をそんなに気にしてるの？」

裕子は、オレンジジュースをストローでかき回している。

「私、今すごい混乱してるんだ…。」

「混乱？」

「うん…。どうしたらいいのか、わからない。」

こんなことを裕子に言っても、困らせるだけだろう。
それでも、裕子は私の話を聞いてくれる。

「何がわからないの？」

「彼に対する、自分の気持ち…。」

「どんな風に？」

まるで、裕子はカウンセラーのように、
私のぐちゃぐちゃになっている気持ちを少しずつひも解いていく。

「前みたいに、そんなに結婚するのが、
嫌じゃないって思うようになってるんだ…。」

「うん。それで？」

「そう思うようになってから、どうして私と結婚したいのかわかって
考えて…。」

彼の気持ちを知りたいのに、知るのが恐くて…。
そんなことを考えてると、もう訳わかんなくなっちゃって…。」

知りたいけど、知るのが怖い…。

矛盾する自分の気持ちに、イライラしてしまう。

「…ねえ。それってさ…。」

「うん？」

「美緒は、もしかして彼のことを好きになっちゃたんじゃないの？
いや…、正確には好きになりかけてるってところかなあ？
だから、そんなに不安になったり、悩んだりするんじゃないの？？」

そうじゃないと言いたかったが…。
やっぱりそうだったんだ…。

私は、きっと彼のことを好きになりかけてる…。

第27話 踏み出せない自分

好きになりかけているだけで、まだ彼のことを好きにはなっていない。

裕子はよく私のことがわかるな…。

「好きになりかけてるんなら、もう確定させちゃいなよ！」

簡単に言ってくれるが、そんなこと…。

「彼のことを好きになったとして、もしあっちが私のことなんて、何とも思っていなかったら？ 私だけが彼のことを好きになったままなの？」

完全なる片思いだ…。

振り向いてくれない人のそばに、ずっと居なければいけないの…？

それで、彼に好きな人でもできてしまったら…？

私は黙って見ているしかないじゃない…。
辛すぎる…。

「美緒の気持ちはわかるよ。

自分だけ好きになっても、相手が好きになつてくれなきゃ意味ないもん。」

裕子は心配そうな目をしている。

「でもね、それじゃあ前には進めないよ？

自分の気持ちを封じ込めておいても、苦しいだけだよ？」

自分の気持ちに知らないふりをしていれば、

これ以上苦しい思いをしなくてもいいのだと思っていた。

“ちがうの？”

「恋愛の最も難しところだよね…。

お互いが好き合っていれば、何の問題もないけど、

そんな上手いくことばかりじゃないからね。

美緒は…特に家の都合とかがあるし…。」

だから、踏み切れない。

初めての経験で、どうすればいいのかもわからないし…。

これまで、避けてきた問題に直面してしまった。

「こんなややもやした状態で、彼とは会えないよ…。」

土曜日のパーティーで会ってしまったら…。

「だめだめ！考えても仕方ないよ！

恋愛なんて、考えてもどうにかなるものじゃない。
意識せずに、勝手に行動しちゃうんだから、
自分のやりたいようにやらせてあげなよ。」

私も、裕子が言うようにできるだろうか？
余計なことなど考えずに、心の赴くまま…。

政略結婚なんてものがなければ、もっと楽に考えられるだろうに…。

「いっそのこと、聞いちゃえば？ “私のこと好きなの！？” って。」

真面目な顔で何を言うかと思えば…。
聞けたら、苦勞しない。

「聞けるわけじゃないじゃん。自意識過剰すぎる。」

どれだけ、自分に自身のある女なんだって思われるだろう。
分不相応にも程がある。

「まあ、そうだよね。」

うん…。私、彼は絶対、美緒のことが好きだと思うけどなあ。」

また、突拍子もないことを言い出した。

「適当なこと言わないでよ。」

根拠もないのにそんなこと言われても信用できない。

「話で聞くと、すごく大切にされてるみたいだし。
それに、前に大学で会ったときも感じたんだけど、
美緒を見る目が優しいっていうか、なんかこう…、
政略結婚するだけの相手にあんな目をするかなって。」

裕子にはそう感じたのか…。

見られるこっちとしては、いちいちどんな感情をした目かなんて確認できない。

あの人を相手にして、そんな余裕があるはずない。

なんにしても、私のことをどう思っているかなんて、彼にしかわからない…。

そうして、結局振り出しに戻ってしまう…。

裕子に長いこと話を聞いてもらったが、問題は何一つ解決できなかった。

裕子も「良いアドバイスができなくてごめん」と、気にしていたようだったが、やはり人に話を聞いてもらえるだけでも、気持ち的にはずいぶんラクだ。

“最近、裕子にはお世話になりっぱなしだなあ…”

今度、何かお礼をしなければ…。

「自分のやりたいようにやらせてあげる」…か…。」

自宅へ帰りながら、裕子との会話を反芻してみる。

「私はどうしたいの…?」

自分に問いかけてみても、何の返事もなかった…。

第28話 パーティー

あれから、あっという間に日にちが経った。

気付けば、もうパーティーの当日だ。

父に「17時半に迎えに行く」と言われている。

そろそろ支度をしなければ…。

父の秘書の人が用意してくれたパーティードレスは、薄いピンク色のとても可愛いものだった。

胸元やスカートの裾部分に、レースが付いている。

強調し過ぎないように、バランスよく付けられていて、可愛らしさの中にも上品さがうかがえる。

非常に好みだ。

父の秘書にしては、なかなかセンスがあるなと思った。

派手にならないように、化粧をして、髪も軽くハーフアップにまとめる。

ネックレスなどの小物も用意してくれていたようで、それも、また好みだった。

姿見で、全身を確認する。

“まあ、こんなもんか”

ドレスや、小物類のセンスが良いので、若干いつもより自分が可愛く見える。

所詮、自己満足かもしれないが…。

そうこうしていると、家の前に車が止まった気配がした。

父が迎えに来たのだろうと思って、家を出る。

外に出ると、一台の車が停まっていた。

父のお抱え運転手さんが、運転席から降りて、後部座席のドアを開けてくれる。

ドアぐらい自分で開けるが…。

そう思いながらも、お礼を言って車に乗り込んだ。

父がすでに乗っていた。

「お仕事お疲れ様です。」

一応、労っておく。

「そのドレス良く似合っている。」

珍しくも、父に褒められた。
褒めることもできるんだと少し驚く。

「ありがとうございます。」

「死んだ母さんに似てきたな…。」

本当に、珍しい…。

母の話をするなんて…。

外を見ながら、物思いにふけっているようだ。
母のことでも思い出しているのだろうか？

母が亡くなっても、父はあまり母の話はしなかった。

本より、仕事に忙しく滅多に家に居なかったのだから、一緒に母を懐かしむ思い出もほとんどない。

母は、なぜ父と結婚したのだろうか？

家庭も顧みないような人と結婚して、果たして幸せだったのか…。

昔、母に「おとうさんがいなくても、おかあさん、さみしくないの？」

と聞いたことがあった。

母は確かその時…。

「少し寂しいけど、離れていても、ちゃんとお父さんとお母さんは愛し合っているから、大丈夫よ。」

そんなことを言っていたはずだ。

私には見えない何かで、

二人はつながっていたのだろうか…。

離れている時間なんて、
気にもならない程お互いを想い合っていたのだろうか…。

母が居ない今、もはや知る由もないが…。

母に想いを馳せていると、どうやら目的地に到着したらしい。

「ここは、取引先の社長さんのお宅だ。

今日は、たくさんのお客人が居るようだから、
挨拶はしっかりしなさい。」

子供じゃないんだから、言われなくても、
愛想笑いのおまけ付きで挨拶ぐらいできる。

さっきまで、何かを思っているようだったのに、
すっかり、いつも通りの父に戻っている。

どうせ、さっきも仕事のことも考えていたのだろう。
パーティーで取引先にどうやって媚を売ろうとか…。

そんなことに必死になるなんて、実に馬鹿げている。

車を降りると、そこにはとても大きな洋館があった。
自宅というよりは…ホテル？

“このお宅は一体何人家族なんだ？”

心の中で、ツツコミを入れる。
それぐらい、立派な家だった。

私の家も、結構大きい部類に入るだろうが、そんなのは比じゃない。

きっと、この家なら相当のお客さんを招待できるだろう。

父と一緒に玄関まで歩く。

普通の家なら玄関まで30歩程で辿り着けるが、
どう見積もっても200m以上はある。

規模が違う…。

門から玄関までは、庭になっていて、
たくさんの花がきれいに植えられている。

庭師か何かが、きちんと手入れをしているのだろう。

じゃないと、一家総出で手入れしないといけないほどだ。

庭の中程まで来たところで、庭の奥にある、
薔薇のアーチが目に入った。

こういう家なら、そんなものの一つや二つあってもおかしくはない
が、

なぜか気になった。

…というよりも、見覚えがあるような気がした。

第29話 薔薇のアーチ

私はその場に立ち止まって、薔薇のアーチに釘付けになった。

真っ赤なバラが、咲き乱れている様は、とても美しい。

他の花も美しいが、この薔薇に目がいつてしまう。

どういふわけか、妙に気になる。

特に変わった作りをしているようでもないのに…。

それに、気になるというよりは、見覚えがある。

“懐かしい…”

そう思うが、いくら考えても思い出せない。

この家に前も来たことがあっただろうか？

薔薇のアーチなんて、昔自分の家にもあったぐらいだから、どこか友達の家とかで見たものに似ているのかも…。

そこで考えるのはやめて、先に行く父の後を小走りで追いかけた。

ようやく、玄関まで到着した。
遙か向こうに、門が見える。

父が、出席名簿に署名をして、パーティー会場へと足を踏み入れた。

18時半からの開始で、まだ30分はあるがすでにたくさんの人が集まっていた。

私のように若い女性も結構いる。

思っていたように、家の中も広い。
パーティー会場は、どうやらホールのようなのだ。

“家にホールがあるなんて、相当なお金持ちだ”
なんて、庶民的な感想が浮かんた。

私は、自分ではいたって庶民的だと思う。

社長令嬢という扱いにはなるが、贅沢することに興味はない。

みんなと一緒に普通に生活するのが、自分の性に合っている。

だから、こういう畏まった場所に来るのが嫌で仕方ない。

父と一緒に、主催者の社長さんのところへ、挨拶に伺う。
非常に恰幅の良い、陽気なおじさんという感じだ。

裕子のように笑い方が豪快で、
きつと会場内の端から端まで響き渡っていることだろう。

そんな陽気なおじさんも、ビジネスにおいてはかなりのやり手だ。

その証拠がこの大豪邸。

この家は、いわば、この社長の権力そのもの。
とてもそんなやり手には見えないが…。

私は、心の中とはいえ、かなり失礼なことを思ったのだった。

その後に、何人か父の取引先の方に挨拶をした。
みんな「お嬢さんはお綺麗ですな」とか言っていたが、
お世辞だとわかってるので、特に嬉しくもない。

会場には続々とお客さんがやってくる。
ここの社長は何人に招待状を出したのだろう…？

絶対に、誰を呼んだかなんて覚えていないだろう。

そう思えば、彼の姿は見当たらない。

今日はこのパーティーに出席しないようだ。

“よかった…”

壁に掛けられている時計を見ると、18時半になっていた。

ホールの中心に少し高い台があり、そこへ先ほどの社長さんが上がる。

「えー、本日はお足もとの悪い中お越しいただき…」

ツツコミたくはないが…。

今日は一日良い天気だった。

このとぼけた挨拶に会場は和やかな雰囲気になる。

社長なんて人は、父のように気難しくてお固い人なのだと思いますが、
必ずしもそうではないらしい。

社長さんが乾杯の音頭をとって、皆で乾杯する。

私は19歳で未成年なので、お酒ではなくジュースだ。

乾杯の後も、何人もの人に父と挨拶をした。
いいかげん疲れてきた…。

「美緒。お前はもういいから、食事でもしていなさい。」

父にそう言われて、私は厄介払いとなった。
愛想笑いするより、食事する方が何倍も良い。

テーブルの上には和洋折衷の様々な料理が並べられている。
立食パーティーなので、適当においしそうなものを見繕って、
隅のテーブルに持って行った。

一人で料理を食べていると、

4
5人の若い男の人達が私の傍へとやって来た。

第30話 遅れてきた客人

その男達は見たところ、私と対して年が変わらない。

今日のお客さんの子息達だろう。

なんだか遊び人という感じがして、私の嫌いなタイプの人種だ…。

「君って如月社長の娘さん？」

一人の男が話かけてきた。

「はい。そうですが、何か？」

父ではなく、私に用事だろうか…。

「下の名前を教えてよ。」

別の男が、図々しくも名前を尋ねてきた。

なぜ見知らぬこの人達に、名前を教えなければいけないんだ？

それに、名前を聞くにしても、聞く前にまずは自分から名乗ると、教えられなかったのだろうか？

しかし、もし父の会社と関係がある人達だといけないので、無視するわけにもいかず、「美緒です。」とだけ答える。

せつかく、食事だけでも楽しもうとしていたのに、何を邪魔してくれるんだ。

気分が下がる。

そう思っていると、最初に話し掛けてきた男が

「俺らとあっちで一緒に飲まない？」とヘラヘラ笑う。

…酔っ払いじゃないか。

私は未成年なので、この会場内で飲めるものといったら、ジュースかお茶か水ぐらいだ。

そんなものを彼等と飲んでもおいしくもないし、楽しいはずがない。例えお酒が飲めたとしても、一緒になど飲みたくはない。

「すみませんが、私はまだ未成年なのでお酒は飲めません…」

「いいじゃん。ちょっとぐらい飲んだって大丈夫だからさあ」

断ったが、全くおかまいなしだ。
私の腕を引っ張ろうとしたところで、突然会場内にざわめきが起こる。

周りのお客さんが会場の入口を見るので、
私もつられてそちらを見てみる。

そこには、二人の男性が居た。
そのうちの一人は、確実に見覚えがある。

「恭哉さん…。」

パーティーが始まった時には彼の姿が見えなかったので、
てっきり今日は出席しないと思っていた。
けど、やはり来たのか…。

彼と一緒にいる中年の男性は、彼の父親の四条社長だろう。

初めて彼の父親を見たが、彼に良く似ている。
おそらく、昔は今の彼のように、とても格好良かったはずだ。

二人は、主催者の社長さんに挨拶をしているようだ。

私は、その光景を少し離れた場所から見る。

彼は、こんなにたくさん居る人の中でも、やっぱり存在感がある。

周りの人達が皆かすんでしまうぐらい、私には彼がまぶしくうつる。

社長さんとの挨拶が終わったようだ。

そして、何人かに軽く挨拶をしながら、

少しずつ、少しずつ、こちらに近付いてきているような気がする。

「おい、四条恭哉だ…。あいつ、こっちに来るぞ…」と、
危うく存在を忘れるところだった先程の失礼な男達が、
ヒソヒソと話している。

私は、すぐ隣に居る男達なんかよりも、彼が気になる…。

どこに居ても、何をしていても彼へと目がいく…。
彼が目で私を捉えると、迷わず私の方へとやって来る。

“やめて…こっちに来ないで…”

私を見据えたまま、一歩、二歩と近付く。

“その目に見つめられるだけで…”

「美緒。」

私の前まで来て足を止める。

“その声を聞くだけで…”

「こんばんは。」

まるで私だけのためにあるかのような優しい笑顔。

“私の全てがあなたで一杯になるの…”

第31話 不機嫌な彼

「…こんばんは、恭哉さん。」

自分の気持ちに整理が付かないまま、再会してしまった。

彼は私ではなく、その隣の方へと視線を向けている。

「美緒、彼らとは知り合いなの？」

「彼ら…？」

そこには、私に声を掛けてきた男達が居た。

…いけない。

ついに、存在を忘れていた。

彼はその男達を、今まで見たこともないような鋭い目で睨んでいる。

その目だけで、彼らを殺してしまうのではないかと思うほどだ。
綺麗な顔で睨むと凄まじい迫力がある。

もし、自分に向けられていたらと思うと恐ろしい…。

彼に睨まれた男達は、何も言わずに慌ててその場から去っていく。

皆、顔が青白くなっていた。

あんな風に睨まれたらそうなるだろう。

“蛇に睨まれた蛙”とは、

今のような場面で使うのが適しているに違いない…。

何が原因かはわからないが、

どうやら彼を不快にさせてしまったようだ。

以前、彼に嫌がらせでもしたのだろうか…？

自分達よりも、良い男だからとか言って妬んでいたのかも。

「何か言われたりされたりしなかった？」

男達に向けていたものとは違って、
私には心配するような目をしている。

「…いえ、あっちで飲もうとか言われただけです。」

彼は少し眉を寄せる。

この発言も、何か引っかかるものがあつたらしい。

「そんなこと言われたのか…。

言い寄られているように見えたから、心配だった。」

言い寄られる？

絡まれたの間違いだ。

酔っ払っていたところに私が一人で居たから、コンパ的なノリで絡んできたのだろう。

全く、迷惑極まりない。

しかし、なぜ彼は私が絡まれている場面を見ていたのだろうか？

“こんなに大勢居る人の中から、私一人を見つけてくれた…とか？”

…いや、自分の良いように解釈しているだけだ。

たまたま私が目に入っただろう。

「美緒、可愛いね。」

「え…？」

急に褒めるものだから、びっくりする。
今日の服装のことか。

「このドレス、父の秘書さんが用意してくださったんです。」

彼も私と同じように、可愛いドレスだと思ってくれたみたいだ。

「ドレスもだけど、それを着ている君が可愛い。」

……。

良かった。

今日はパーティー用に、いつもよりも濃いめにチークを入れているので、
顔が赤くなっても多少ごまかせる…。

この人は会うたびに、むず痒くなるような甘い台詞を言ってくる。
言われるこっちの身にもなってほしい…。

「今日は如月社長と一緒に来たの？」

彼は周りを見渡しながら、尋ねる。
どうやら父を探しているようだ。

「はい。どこかに行ってしまったようです…。
恭哉さんは、今いらっしゃったんですか？」

「そう。仕事が長引いて到着が遅れてしまった。」

それで、パーティーの最初には居なかったのか…。

「この前、仕事で如月社長とお会いした時、
パーティーに君も連れていくと言ってたんだ。
だから、多分、君も来るだろうと思ってね。
急いで来たんだ。」

父はどうやら、彼に私が行くことを言っていたらしい…。

でも、そう言う彼に、また私は自惚れてしまう。

主催者を祝うためではなく、私に会うために。

仕事が多忙だったのに、
わざわざ会いに来てくれたということなのだろうか？

“あなたがそんな事を言うから、私は勘違いしてしまう…。”

何気ない一言で、
一体どれだけ私を揺さぶるつもりなのだろうか。

第32話 すり替わる気持ち

私に向けてくれる、優しさや微笑み…。

それは、私だけに与えてくれるものだど、思っているのだろうか？

“もしそうなら、私はあなたの事を…”

ようやく気持ちに結果が出せると思った矢先…。

「恭哉さん！」

彼の後ろから大勢の女の子達がやって来た。

彼女達は、隣に居た私などまるつきり目に入っていないらしく、私を押しつけて彼を囲んだ。

一気に彼との距離が遠くなる。

「いつ、いらっしやったんですかあ？」

「そのスーツ素敵ですう！」

と、甘ったるい声で話す。

美人でかわいい子達ばかりだ。

自分は綺麗で可愛いんだという自信に満ち溢れている。

とても華やかで、どの女の子をとって見ても彼とよく似合う。

私とは全然違う…。

私は彼女達のように美人でも可愛くもないし、
自分に自信なんてない。

なのに、こんな自分を彼が、
恋愛感情を持っているかもしれないなど…。

とんだ自惚れだ。

ほら…、

思っていたように、私なんかよりも彼に似合う子はたくさんいる。

ようやくわかった。

私と彼とでは釣り合わない。

今のこの彼との距離が、

そのまま二人の心の距離であるように感じられる。

彼は女の子達に囲まれて、楽しそうに笑っている。

“私以外の女の子にも笑うんだ…”

そう思うと、胸がチクリと痛む。

自分以外の人に笑い掛けている姿を見たくなくて、
その場から離れた。

一人になりたい。

あそこに居ると、今にも涙が出てしまいそうだった…。

別に、彼が誰と話そうが誰に笑おうが、
関係ないし全然悲しくもないはず。

…なのはどうして、こんなにも切ないのだろうか？

とにかく、一人になりたいと思いながら歩いていると、
知らない間に中庭まで出てしまったらしい。

ここなら誰も居ないので、一人になって気持ちを落ち着けられそう
だ。

この家に来た時に、妙に気になった薔薇のアーチへと足をすすめる。

近くまで来て見てみると、意外に大きかった。

まじまじとそれを見る。

「やっぱり見覚えがある…。」

以前にここに来たことがあったのか…？

頭の中に暗闇の薔薇のアーチが浮かぶ。

それは、今ここで見ているものよりも目線が低い。

“ そうだ。前見た時も、夜だったような…”

過去のことを思い出しかけた、その時だった。

「美緒…！」

今、一番聞きたくない声がした。

振り返りたくないのに、

気持ちとは相反して体が声の主の方へと向く。

そこに居たのは軽く息が上がっている彼だった。

「急に会場の外へ出て、どうしたんだ？」

よく見ると服が乱れている。
外へ出た私を走って追いかけてきたのだろうか…？

「人がたくさん居たので、
少し気分が悪くなって外の空気を吸いに来ただけです。」

とてもじゃないが、女の子達と楽しそうに話しているのを、
見たくなかったからだとは言えない。

「大丈夫？一緒に中庭でも散歩しようか。」

暗くてちゃんとした表情は見えないが、心配しているようだ。

：頼んでもいないのに、勝手に心配などしないでほしい。

「結構です。少ししたら戻りますので、先に戻っていて下さい。」

私は素っ気なく答えた。
そんな私を不振に思ったらしく、彼は「何か怒ってるの？」と尋ねる。

「いいえ。怒ってません。」

「じゃあ、何でこっちを見ないの？」

そう言って、私と目線を合わせようとする。

私は目が合わないように下を向く。

「ほら、怒ってるじゃないか。」

ため息を一つ付く。

ため息を付きたいのは、こっちの方だ。

「怒っていませんから。」

一人になりたいので、先に戻ってください。」

早くこの場から去ってもらいたくて、
再度彼に、戻るように促す。

“お願いだから、早くどこかへ行って…！じゃないと私…”

彼の前で泣いてしまいそうだ……。

第33話 暴走する感情

先に戻ってほしいとこんなに頼んでいるのに、
彼は動くことなくまだここに居る。

どうして、早く行ってくれないのだろうか…。

「何か、君の気に障ることを僕がしてしまったのなら、
はつきり言ってほしい。

中途半端なままにしておくことなんて出来ない。

もしそうなら謝るから…。」

どうやら、彼は私のお願いなど聞いてはくれないようだ。

「何でもないですから…。

気に障ることなんてありませんので、
謝っていただく必要はないです。」

“だから、私には構わないで…”

そういう思いを込めて、彼に背を向ける。

「…何でもないことないだろう？

美緒、ちゃんと言ってくれないとわからない。」

今までの穏やかな口調よりも、少し厳しいものになる。

なぜ、私が彼に問い詰められなければならないのだろう？
何でもないし、怒ってもいないと言っているのに！

「もう…、放っておいて下さい！！」

訳もわからず、募る苛立ちを彼へとぶつける。

完全に支離滅裂。

こんなの…ただの八つ当たりだ…。

駄目…これ以上、彼と話しているともっとひどい事を言ってしまう。

今の私は、冷静に考えられない。

自分の感情を制御できないでいる…。

彼が動かないというのなら、

私がこの場から立ち去るしか方法がないだろう。

“ 早く行こう ”

そう思って走り出そうとしたら、
いきなり後ろから腕をぐっと引かれた。

「美緒!!」

逃げられないように、しっかりと掴まれている。

「放して下さいっ…!!」

それでも何とかして振り払おうとするものの、びくともしない。
線の細い彼からは想像もつかないぐらいの強い力…。

改めて、この人は男の人なのだと認識させられる。

「お願い、放して!」

「駄目だ…逃げる気だろう?

離さない。何が気にいらぬのか言つて。」

低い声で、動けないように私を支配する。

「…どうして！？どうして、そんなに私に構うんですか！私なんか放っておいたらいいでしょう！！」

ここ何年もの間、こんなに大きな声を出した覚えがない。

「放っておけるものなら、とっくに放ってる！」

より腕を掴む力が強められる。

掴まれている所がズキズキと痛む…。

「そうですね…。

私は、あなたの政略結婚の相手だから、勝手な事をしないように、ちゃんと見張っておく必要がありますね。

もしかして、父に言われでもしましたか？」

嫌な言い方だ。

本当は、彼が純粹に私を心配しているとわかっているのに、暴走する想いは止まらない…。

「違う。」

彼は否定するが、私の苛立ちはエスカレートしていく。

「うちの会社があなたの会社にとって、
どれだけの利益をもたらすのか知りませんが、
わざわざうちみたいな発展途上の会社の娘を
結婚相手に選ばないといけない程、
そちらの会社は落ちぶれているんですか？」

一度走り出した想いは、
もう自分でもどうにもならない。

“ 止めて、違う…違うの！
こんな事彼に言いたくなんてないのに…！！”

「あなたのルックスなら、さっき囲んでいた良家の女の子ぐらい、
簡単に落とせるでしょう？向こうはその気でしたよ？
どう考えても、私よりも彼女達の方があなたによっぽど似合ってる。
私はあなたの結婚相手として相応しくない。」

息つぎをするのも忘れて、早口でまくし立てるように言った。

……………。

言ってしまった後に気付く。

“今…私、とてもひどい事を彼に…!!”

急いで振り返る。

月明かりが彼の顔を照らし出す。

彼は、悲しそうに…俯いていた……。

第34話 二人の距離

“どうしよう、私…。

彼が一番傷付くことを言った…。”

昔から外見しか見られなくて、
自分の中身は見られていなかったと以前言っていた。

そのことで思い悩んでいると知っていた。

なのに、私は彼の最も弱いその部分を傷付けた。

早く弁解しなければ…！

さっきは言い過ぎてしまった、

本当は全然そんな風には思っていないんだと…。

「あの…。」

「それが君の気持ちなのか…。」

話し出したと同時に、彼の言葉が重なって、

遮られてしまう。

「ずっと、僕に嫌々合わせてくれてたんだね…。
政略結婚の相手である僕を無下にはできないから…。」

私の腕を掴んでいた手の力が弱まり、痛みからは解放された。

「はは…。なんだ、全部僕の思い込みだったわけか…。」

自嘲するようにそう言うと、腕を掴んでいない方の手で顔を覆う。

「この前食事に行った時に、君が僕に近付いてくれたと思った。
でも、僕に気を使ってくれただけだったんだろう？
それに気付かないで…自惚れてるよな…。」

顔を覆っていた手を外し、正面にある薔薇のアーチを見つめる。

その表情は、まるで傷付いた小さな子供のようだ…。

こんな顔を、以前にも見た気がするが、

今は過去を思い出している場合じゃない。

「私本当は…」

ちゃんと彼に謝ろうとしたその時、急に腕を引っ張られた。

そのまま勢いよく、彼の胸の中へと飛び込む。
たくましい腕に強く抱きすくめられ、足が浮く。

突然の事に驚いて、離れようと彼の胸を両手で押す。

しかし、離れるどころかますます腕の拘束は強まり、
まったく身動きがとれなくなった。

「君はひどい人だね…。」

私の耳元で囁く。
抱きしめられているので、今、彼がどんな顔をしているのかわからない。

「近付いたと思ったら、すぐに離れていってしまう…。」

苦しみを吐き出すような声に、私は言葉も出ない。

「君が僕との結婚を嫌がっていても、僕のことを知ってもらえたら、その気持ちを換えられることができると思った…。」

まだ出会って1カ月ぐらいだし、時間が掛かっても、いずれ結婚したいと思ってくれるだろうって考えてたんだ。でも、こんなに嫌がっていたなんて…。」

こうして近くに居ても、君と僕との距離は遠かったんだね…。」
君の気持ちを読み間違えてたみたいだ…。」

抱きしめていた腕を緩め、私と視線を合わせるように屈み込む。

いつもなら、反らせない程の強い目をしているのに、今は頼りなく不安げな目をしている。

彼にこんな顔をさせてしまったのは、間違いなく私…。」

「ねえ、美緒…。」

君は僕の言うことなんて信じてくれないかもしれないけど…、これだけは信じてほしい。

僕は、君と結婚したかった。

他でもない君だから、結婚したいと思えたんだ…。

その気持ちは今でも変わっていない。

でも、僕がそう望むことで君の迷惑になるのなら…。」

私をまっすぐ見つめる。

「結婚の話はなかったことにしよう…。」

彼は苦しみを押さえるように、優しく微笑む。

肩からそっと手が離される。

私に触れていた彼の温もりが消えていく…。

私に背を向けて、パーティー会場の方へ歩き出す。

徐々に遠くなっていく彼との距離を埋めたかったが、
私はその場に佇んだまま、その距離を埋めることができなかった…。

第35話 心の叫び

パーティー会場からは、賑やかに笑い声などが聞こえてくる。みんなお酒が入ったことで、盛り上がっているのだろう。

…もう彼もその中へと、入っていったのかもしれない。

私はまだその場から動いていない。

あの賑やかな場所へは戻りたくなかった…。

薔薇のアーチの近くにあるベンチへと腰を下ろす。

やはり、この光景を以前にも見た事がある…。

この家で見たのか…。

どれぐらい前の事だろう。

もし、私が小学校に上がる前後なら、さすがにはっきりとは覚えていない。

過去へと想いを廻らせるが、

その考えだけに集中することができない。

どうしても私の意識は、ここに居ない彼へといってしまふ。

自分が出した答えに、相応しい終わりだったはずだ…。

どうせ、結婚の事は自分から断るつもりでいたのだから、向こうが先に言ってくれて良かった。

余計な手間が省けた。

これは、私が望んだ事なんだから、何も気にする必要などない。

「あれ…？」

頬に違和感があり、手を当ててみると温かい液体が触れた。

「嘘でしょ？私、もしかして…泣いてるの……？」

ありえない。

どんなに泣けると言われるラブストーリーや、動物ものの映画を見ても、

感動こそするが涙など一つも流さない私が…泣いてる？？

「違う。きっと、目にゴミが入ったんだよ…。」

メイクをしているにも関わらず、ごしごしと目を擦るが、いくら擦っても涙は止まらない。

止まらないどころか、余計溢れてくる。

「おかしいな、私…。別に悲しくもないのに…。」

それなのに…。

胸が張り裂けそうな程痛い…。

溺れた時みたいで、うまく呼吸ができない。

胸を押さえて下を向くと、ハーフアップにまとめていた髪が、肩を滑り落ちてきた。

その髪を見て思い出す…。

前にこの髪にキスをしてくれた人…。

「…恭哉さん。」

自然と彼の名前が口から出る。
その名前を呼ぶだけで、苦しい…。

とてもひどい事を言ったのに、
彼は私を怒って責めたりなどしなかった。

勝手なことをしたのに、
それでも私の事を真剣に考えてくれていた。

あんなに優しい人を傷付けるなんて…。

パーティー会場で、
彼がたくさんの女の子に囲まれていたのを見てから、
自分の暴走する気持ちを、止められなくなった。

あそこに居た自分はとても小さな存在に思えた…。

そんな自分が彼を好きになってもいいのか、
わからなくなった。

彼を好きになって傷付くのが嫌で、逆に彼を傷付けた。

私は逃げたんだ…。

彼は私の事を理解しようと、ちゃんと歩み寄ってくれたのに、私は向き合う事もわかり合う事もせずに、ひたすら逃げてしまった…。

“君はずるい人だね…”

彼が言うように私はずるい。

本当は…ひどい事を言っても、それは私の本心ではないと、彼に気付いてもらえると思っていたのかもしれない。

彼ならわかってくれるだろうと…。

“ あんなにひどい事を言うのは、あなたを意識していたから。結婚を嫌がったのも、何もかも全部…、

あなたを想えば想う程、どうしようもなく不安になっていたから…”

私だけ、こんなにも彼を想っているのかもしれない、そう考えると、見えない彼の心を知るのが恐かった。

“ だから、早く気付いて…本当の私の気持ちに…”

彼に向かって、心の中ではそう叫んでいたのだ。

伝えたくても伝えられない。

もどかしい、私のこの想いを…。

言葉にしないで理解してもらおうなんて、本当に私はずるい…。

第36話 消せない想い

あれから一週間が経った。

彼とは、ほぼ毎日メールでやり取りしていたのに、あの日を境にぱたりと連絡は途絶えてしまった。

当然だ…。

それだけの事を、彼にしてしまったのだから。

きっと、私のアドレスも削除しているだろう。

私は……。

今も消せないまま…。

登録していても、使うことがないのだから、さっさと消せばいいのだが、それができない…。

あの夜のことは、まるで昨日の出来事のことのように、かなり鮮明に覚えている。

あれで私達の関係も終わったのだ。

私達の関係って何だったの…？

“政略結婚をするかもしれない相手”

なんてあやふやな関係だったんだろう。

簡単に壊れてしまうような、脆いものだった。
所詮はその程度だったんだ…。

この出会いはお互いにとって、ただの通過点に過ぎず、
彼と私の人生は交差してなかった。

もう、彼と会うことはないだろう。

なのに…。

心にぽっかりと穴が開いてしまったような、消失感がある。

でも、こんな気持ちも今だけ…。

きっと、時が経つにつれて薄れていくはず。

彼のことも、思い出せないぐらいに…。

部屋の壁に掛けてあるカレンダーを見る。

「もう10月か…。」

来月は裕子の誕生日だ。

そろそろプレゼントの用意をしなければ。

今日は特に用事もないので、買い物がてら探してみよう。

家に一人で居ると、

考えたくないことを考えて、滅入ってしまう。

気分転換にもちょうど良い…。

部屋着から外出用の服へと着替えて、出掛けることにした。

この辺で一番品揃えが良い、駅前にあるショッピングモールに来た。

今日は土曜日なので、家族連れやカップルが多い。

適当に色んな店に入って、品物を物色する。

“誕生日プレゼントか”。裕子は何が欲しいのかな…”

考えていると、アンティーク調の写真立てが目に残った。
花の模様に小さなストーンが散りばめられていて、
とてもかわいい。

そういえば、

「彼氏との写真がたくさんあるけど、
飾れるようなちゃんとした写真立てがないのよねえ」と、
前に言っていた気がする。

これなら使ってもらえそうだ。

レジに持って行き、プレゼント様にラッピングをしてもらう。

「少しお時間が掛かりますので、店内でお待ち下さい」

と店員さんに言われ、もうしばらくこの店で時間を潰すことにする。

プレゼントが早く見つかって良かった。

これで裕子も、彼氏との写真を飾れることだろう。

“彼氏か…”

私も早く恋人が欲しいものだ。

政略結婚の相手ではなく、普通の恋人…が。

あ……。

また、彼のことを思い出してしまいそうだ。
せっかく忘れていたのに、彼に意識がいきそうになる。

“余計なことは考えないで、店の商品を見よう…”

さっきは、店の入口の辺りしか見ていなかったので、
反対側の商品も見てみる。

かわいい小物がたくさん置かれていて、
すぐに私の意識はそちらに向く。

反対側はガラス張りになっていて、外は通に面している。
通りを挟んだ向かいには、大きな有名百貨店がある。

性格が庶民的な私は、バーゲンなどの催し物がない限りは行かない。
お金持ちでなければ入らないような、

海外の超高級ブランド店が多数入っている。

何度か冷やかしかし程度で店に入っただことがあるが、
桁違いな物ばかりだった。

私は店内から、何気なく向かいの百貨店の入口を見ると、
一際目立つ人物が目に入った。

「恭哉さん？」

間違うはずがない。
彼だ。

「だれ…？」

そして、その横には…。
楽しそうに彼と腕を組んでいる女性が居た……。

第37話 後悔

彼の横に居る女性…。

その人はかなりの美人だった。

スーパーモデルのようにスタイルが抜群で、手足が長く、顔が小さい。

品がある美しさが感じられる。

彼の隣に居ても、全く引けを取らないぐらいの存在感があり、彼と共に道行く人々の視線を集めている。

まるで絵に描いた様な二人だ…。

百貨店の外で仲睦まじく話をしている。

二人で買い物に来ていたのだろうか？

彼は、手にショッピングバッグを何個も持っている。

あの女性はきっと、彼の“恋人”だろう…。

彼にとって、特別で大切な恋人…。

二人の様子を見れば、そう思う。

そうか…。

恋人が出来たのか…。

あれから一週間だ。

彼は次の出会いを見つけて、前へと進んでいるのに、私は一週間経っても、まだ一步も前に進んでいない。

それどころか、日々後退しているようにさえ感じられる。

“あの時こうすれば良かった、こう言えばよかった”と、もう戻らない時間をいつも考えて嘆いている…。

自分から望んで出した答えを悔やんで、傷付いているなど、なんて自分勝手な人間なのだろうか。

二人は迎えに来たであろう車へと、乗り込もうとしている。

エスコートをして先に女性を車に乗せた。

続いて彼が乗ろうとしたところで、彼が顔を上げる。
急にこちら側を見た。

道を挟んでいるとはいえ、よほど目が悪くない限りは、
肉眼で顔が確認できるぐらいの距離である。

私は、さっきからずっと外を見ていたので、
すぐに彼だとわかったが、まさか彼がこちらを向くとは思ってもい
なかった。

目が合った瞬間に、私は急いで商品の物陰へと隠れた…。

たまたま目が合っただけで、何もやましい事などしていないのだから、
別に彼から隠れなくてもよかった。

でも、反射的に身体が動いてしまった。

“びっくりした…”

彼と目が合うなんて…。

心臓が激しく跳ね上がり、勢いよく暴れ出す。

“動揺するな…落ち着け…!!”

必死でそう自分に言い聞かせるが、私の身体はなかなか言うことを聞いてはくれない。

“そうだよね。”

これから、今みたいに、偶然に会うこともあるかもしれないんだ…”

その度に、動揺しているようではいけない。

いつまでも彼に捕われたままでは…だめだ…。

私達の距離は確かに離れたはずなのに、彼はまだ私の心を掴んで離してはくれない…。

がんじがらめに絡めとられて、私は身動きが出来ない。

ああ…。

まだ私は、彼のことを…忘れられそうにない。

何かをして気を紛らわしていても、彼を目にすれば、私の全てはいとも簡単に持っていかれてしまうのだ。

彼に出会うまでは、誰かに縛られることなく、自由に生きたいと願っていたはずなのに、今は全然逆の事を思っている。

周りから決められても、それでも彼の隣に居たいと…。

例え、政略結婚でも構わない。
私の独りよがりでもいい。

彼と一緒に居られるのなら、それ以上多くを望んだりはない。

だから…。

“私はあなたの側に居たい”

今さら、自分の本当の気持ちに気付くなんて…、ばかだ。
あまりにも遅すぎた…。

ずっと気付かなければよかったのに、どうして…？

どのみち、もうこれは口に出してはいけない想いだ…。

それなら、私は心の奥にその想いをしまい込んで、鍵を掛けるしかない。

それで、彼とのことは忘れよう。

（だから…どうか、あなたから解放してください…）

第38話 戻らない時間

次の日は、裕子が家へ遊びに来た。

裕子いわく、私の家は広くて居心地がいいらしい。
私にとったら無駄に広いこの家は、手入れが大変で、
居心地が良いとは言えない。

母が居た頃はそうは思わなかったが、私一人になってからは、
静かなこの家はとても住みにくくなった。

「いやあ、この家はいいわあ。」

裕子は、ソファアにどっかりともたれている。
まるで電気屋のマッサージチェアの体験コーナーで、
くつろいでいる客のようだ。

「こんなに広い家に、ほぼ一人暮らしなんて、
もったいない。」

「ほんとだよ。私もこんなに広い家じゃなくて、
もうちょっと小さめの家の方がいいよ。」

大学に入学する時に「一人暮らしがしてみたい」と、父に頼んだのだが、あっさりと却下されてしまった。

母との思い出が詰まったこの家は、私にとって大切な家だ。でも、母が居ない今は静寂につつまれていて、私を孤独にさせる。だから、別の場所で暮らしたかった…。

「美緒一人だけで住むには、この家は静かで寂しいね。」

裕子は、外の庭を見ている。

昔は花に囲まれていたが、今は何も植えていない。

この前のパーティーでお邪魔したお宅程ではないが、色とりどりの花をたくさん植えていた。

そこで、あの庭にあった薔薇のアーチが頭に浮かんだ。確かに見たことがあるはずなのに、

いつ、どんな状況で見たのか思い出せない。

子供の頃のことなら、“そんなこともあったな”と、流せばいいのだが、なぜかずっと気になっている。

最近、気になるというよりは“思い出さなくてはいけない”と、感じるようになった。

何か自分にとって、大切なことであつた気がしてならないのだ…。

「美緒？」

「え？」

私が考えを巡らせていると、裕子が私の目の前で手を振っている。

「なんか意識飛んでたよ？」

「ごめん、ごめん。ついうつかり考え事してた。」

裕子がいるのに、他の事を考えてしまっていた。

「考え事？それって、恭哉さんのこと??」

違う。

さつきは、彼のことは考えていなかった。

さつきは…。

彼を街中で見かけた時に、彼への想いは封印したのだ。

それからは、彼のことに意識を向けないようにしてきていた。

しかし、裕子が彼の名前を口にした途端、

押さえこんでいた想いが溢れそうになってしまった…。

「ねえ…。前から気になってたんだけど、彼と何かあったの？
最近の美緒は元気がないっていうか、
わざと明るく振舞ってるって感じだったからさ…。
気になってたんだよ？」

私が何で悩んでいるかなんて、隠していても気付いていたのか…。
親友を見くびっていた。

「彼と…。結婚を解消することになりそうなの…。」

いや、もう解消しているのかもしれない。
すでに、彼には次の婚約者候補が居たし…。

「は？解消って…一体、どういうこと？？」

突然のカミングアウトに、裕子は驚いている。

「彼がそう言ったの…。でも、彼にそう言わせたのは私だった…。」
「美緒がそう言わせるようなことをしたの？」

彼が私のことを好きで結婚するのか、その真意を知るのを恐れてしまったこと。

パーティー会場で、たくさんの奇麗な女の子達に囲まれているのを見て、自分の存在がひどくちっぽけに思えて、彼女たちに劣等感を感じたこと。

彼への気持ちを自覚していたのに、傷つくのが怖くて、ひどいことを彼に言ってしまったこと。

全て話した。

裕子は、頷きながら聞いてくれた。

「美緒は、後悔しているの？」

後悔か…。
ずっとしてる…。

「うん…。でも、もう遅いんだ…。
昨日、彼がすごく美人な女の人と居たのを見ちゃったの…。」

かなりの衝撃だった…。

“君と結婚したいと、今も想ってる”

そう言っていたのに、もう次の人が居ただなんて…。
ショックで、目が合った彼から隠れてしまった。

もう、引き返すことはできないのだ…。

自分に言い聞かせて、納得させたのだから、それでいい……。。

第39話 叱咤

「っていうか、アンタさっきから何なの？」

「…はい？」

「あくもう、いいかげん、聞いててイライラするわっ！ムカつく。」

おとなしく私の話を聞いていた裕子が、険しい顔をしている。

「まったく！ぐじぐじして、いくじがないっ！！

人のことなんてお構いなしで、かつ失礼な、

いつもの美緒はどこに行ったのよ？」

「…ちよつと裕子さん、かなりひどいこと言ってませんかね…？」

「実際そうでしょうがっ！！」

こっ怖い…。

目が見開いている…。

「ねえ…美緒。本当にどうしたのよ…。

なんでいつものように、ちゃんと自分の気持ちを伝えられないの？」

「裕子…。」

裕子はいつも自分のことのように、私の心配をしてくれる。

“私よりも、私の気持ちがわかるんだから…。”

これまで、彼女の言葉に数えられないぐらい、助けられてきた。

「前に言ったよね…？」

自分から逃げてたら、せつかくの良い出会いを見逃すよって…。」

「…うん。」

確かそんなことを言っていた。

あの時は、そんなに深く考えていなかった。

「人や自分に遠慮して叶う恋なんてないんだよ？」

“この人だ”って思ったら、なりふり構わなくなっちゃうんだから。どんなに自分が格好悪くても、みじめでも、そんなのは気にならない。

美緒は恋愛に気取りすぎなんだよ。

何も考えずに、自分の想いだけを信じたらいいいんだからね。」

そうか…。

私はたくさんのことに遠慮していたのか…。

“遠慮して叶う恋はない”か…。
今なら良くわかる。

「裕子の言う通りだよ…。

私は色んなことを気にし過ぎて、自分の思うように動けなかった…。
自分のやりたいように、やらせてあげられなかった。」

だから、こんなに後悔しているのだろう。

「彼から婚約を解消しようって言われてから、
後悔することが多かった…。もう遅いのにな…。」

悔んでも、仕方がないのだ。
進んだ時を戻すことなどできないのだから…。

「美緒は、本当にそれでいいの？」
「……。」

だって、どうにもできないのだから、
彼とのことは忘れるしかない。

「自分の気持ちにケリを付けなよ。
そんなんじゃ、いつまで経っても前に進めないよ?」

前に進む…。

私は、ずっと後ろを振り返ってばかりだ…。
行動だけじゃなくて、気持ち的にも後ろ向きになってる。

「ケリを付けるって…どうやって?」

私の中では、彼を忘れることで前に進もうと思っている。
それではいけないの…?

「美緒が思ってること、全部彼に伝えなさいよ。」
「でも…。」

もう前に進み出した彼に、過去の話をしてもいいのだろうか…。
それこそ、彼の迷惑になってしまうのでは…。

「彼のことを忘れるにしても、
今の自分の気持ちに区切りをつけないとだめ!
じゃないと、これから彼のことを引きずったままだよ?
こんなに苦しいことなんてないと思う…。」

いくら、頭の中では彼のことは意識しないようにして、
忘れたふりをしていても、心では彼のことを想ってしまう。

だから、区切りを付けることが必要なのかもしれない。

「うん…。私、ずっと苦しいんだ…。

忘れようと思えば思うほど、

私の中で彼への想いが育っていくのを感じてるの…。
どうしていいのか、わからなかった…。」

こんなのもやもやした感情なんて、経験したことがない。

「そう思うならなおさら、自分の気持ちを彼に伝えた方がいいね。
もう、後悔しないように、ありのままの自分を出して…。
きっと、彼も美緒の気持ちを聞いてくれるよ！」

「…だといいいんだけどね。」

今更何を言い出すんだと思われるかもしれない。

自分が結婚したくないと言ったのに、勝手だと…。

不安な気持ちでいると、裕子が私の肩をばしっと叩いた。

「辛気臭い顔しない！」

やけになって、全部言ったらいいんだよ！
彼だって、美緒の本当の気持ちが知りたいって思ってるはずだよ…
？」

「いたい…。そうだね。うん！今度こそ自分に正直になるよ！」

裕子に喝を入れてもらって、なんだかスッキリした。
もう、うじうじするのは止めよう。

「やっと、いつもの美緒らしくなってきたじゃん！
その調子で頑張れよっ！！」

「ありがとう。」

こうやって、気にしてくれる友人がいるから、
私は元気になれるのだ。

やっぱり少し恐いけど、
それでも、本当の気持ちを彼に伝えよう…。

そうして得られる結果なら、私も納得がいくだろう……。。

第40話 夢の中

夕方になって、裕子は帰った。

私の話を親身になって聞いてくれて、とてもうれしかった。自分ではどうにもならない悩み事も、人に聞いてもらえば楽になるし、解決への糸口も見つかる。

私は携帯を手にとって、メールを打っている。
宛先は…彼だ。

“ 美緒です。ご無沙汰しています。
お話したいことがあります。
いつでもいいので、少し時間を作っていただけませんか？ ”

「送信…っと。」

このメールを見てくれるだろうか？

もしかしたら、私のアドレスを削除していたり、
着信拒否にしていたりするかも…。

メールを送ってから、1時間経ってから携帯のバイブが鳴った。
開いてみると、彼からの返信だった。

「返事…返ってきた…。」

良かった。

返事自体が来るかどうか分からなかったから…。

“ わかった。

明日なら大丈夫だから、最初に行った駅前のカフェに17時でもいい？ ”

あの駅前のカフェか…。

“ 17時で大丈夫です。

お忙しいのに、無理を言ってますみません。 ”

彼に返信する。

明日か…。

彼は、私が一体何の話をしているだろうか…？

夕飯を食べ、入浴した。

それから、しばらくテレビを見ていたが、眠くなってきたので就寝することにする。

眠りに付く直前まで、彼のことを考えていた。

明日、私の気持ちを伝えたら彼はどんな顔をするだろうか……？
不安で仕方がないが、自分の気持ちを正直に伝えよう……。

今日は、珍しく夢を見た。

夢に出てくるのは、小さな子供の自分。
パーティードレスを着ている。

“あのドレスは、母が亡くなる前……。確か私が6歳頃に着ていたものだ”

滅多に着ることができないドレスを着て、
鏡の前でくるくると回り、うれしそうにしている。

そこに、父がやってきた。

私の手を取って、車に乗せる。

母はどうやら家で留守番をするようだ。

そういえば、昔は父と一緒にパーティーへ出かけることがよくあった。

小さな私は、車窓から流れる景色を興味深そうに見ている。

しばらく車で走ると、とても大きな家に着いた。

“あれ…？この家って…”

父と手を繋いで、広い家の庭を歩いて玄関へと向かう。
その庭は様々な花が丁寧に植えられていた。

「あのバラかわいい！」

「見事なものだな。」

父と私は、目の前にある薔薇のアーチの前に居た。

“やっぱり！この前のパーティーでお邪魔した家の庭だ…。
薔薇のアーチはこの家で見たんだ。”

前にも来ていたことがあったのか…”

場面は変わって、パーティー会場へと移る。
私は、おいしいご馳走に目を輝かせていた。

「美緒。お父さんは挨拶してくるから、
お前はここでごはんを食べていなさい。」

「はい。」

そう言うのと、父は一人どこかへ行ってしまった。

私は特に気にすることもなく、一人で黙々と食事をしている。

「おいしい！」

小さい子供ながら、相当食べている…。

私は昔から食い意地が張っていたようだ…。

しばらくしてから、私は食事を止めて外に出る。
向かった先は、先ほど見た中庭のようだ。

勢いよく走って、薔薇のアーチの前まで行く。

「かわいい〜！」

小さな自分の背丈よりも、
はるかに大きい薔薇のアーチを見上げる。

“前に思い出した場面は、ここだったんだ”

薔薇のアーチをくぐって遊んでいると、
近くにあったベンチに誰かが座っていることに気付いた。

ベンチの方を見てみると、

そこにはまるで天使のような可愛らしい男の子が居た。

顔を見るだけでは、男の子か女の子か判断できないが、
ネクタイをしてズボンを穿いているのだから、おそらく男の子だ。

年は、6歳の私よりも、4〜5歳年上に見える。

“すごく可愛い男の子…。でも、なんか見たことある気がする。”

その少年は、笑うと更に可愛いだろうが、

なぜかとても暗い顔をして、俯いていた。

第41話 冷めた少年

“あんな顔をして、どうしたのだろうか？”

今にも泣き出しそうだ。

小さな私も、気になったらしい。

ベンチに座っている少年の元へ歩み寄る。

「どうしたの？ かなしいの？？」

俯いている少年を下から覗きこむようにして、伺う。
突然現れた小さな女の子に、驚いた顔をしている。

「君は…誰？」

「みおだよ。なにしてるの？」

子供ながらに、少年に話しかけるなんて、
ずいぶんと積極的だ…。

“でも、話しかけずにはいられなかったのかも”

俯いていた顔を重そうに持ち上げる。

真正面から見てみると、やはりかなりの美少年だった。

「別に……。座っていただけ。」

そっけなく答えるが、ただ座って、庭を楽しんでいるようには見えない。

「あっちで、ごはんたべないの？」

さっきから、質問攻めだ。

少年も、私のことを少し鬱陶しそうにしている。

「いらない。パーティーは好きじゃないんだ。」

あんなのを楽しむ大人なんて、俺には一つも理解できないな。」

「そうなの？ みおはたのしい。おいしいごはんがたべられるし、それに、みおとおなじくらいのおともだちがいっぱいいるもん。」

確かに、食事をしていた時パーティー会場には小さな子供が結構居た。

自分と同じぐらいの年の子と遊んだ記憶もある。

今はパーティーなんて嫌いだが、子供の頃はそういうのもあって、喜んで行っていた気がする。

子供なら、ああいう日常生活とは離れた場所は、たくさんの興味があって楽しいはずだ。

“なのに、この子はとてもつまらなさそう…”

「は？友達？？あんな奴らと仲良くなんてしたくないね。マジで話しているだけで、イライラする。」

鼻で笑うように少年は話す。

まだ10歳そこそこの子供だと言うのに、その表情と口調はどこか大人びている。

「ともだちなのに、おはなしするのいやなの？」

「ああ。いやだね。それに、友達なんかじゃない。」

たまたま、今日来ているような奴と仲良くする必要なんてないだろう。ばかばかしい。そんな面倒なことやってられるか。」

“すごく冷めている…”

どうして、こんなに反抗的な態度なのだろうか？

「でも、おともだちとはなしていると、たのしいよ。」

私は、にこにここと笑っている。

その顔を見て、彼は眉根を寄せた。

「楽しい？どこが。俺の顔色ばかり伺って…。

所詮、俺の容姿にしか興味ないんだ。人のことを人形程度にしか見ていない。

俺の中身なんて、これっぽっちも見えない。

そんな奴らが友達だって？笑わせる。」

…まさかこの愛らしい子が、ここまでの毒舌だとは思わなかった。
一体何が彼をそうさせてしまったのだろうか？

子供の私には、難しい言葉を使う彼の言うことは、
きつとほとんどわかっていないだろう…。

「え？なにいつてんの？？」と言った顔をしている。

少年も、それに気付いたようだ。

「君に言ってもわからないか…。」

大きなため息を付いて、また俯いてしまった。

「わかんないけど、おにいちゃんはすっきりした？」

「え…？」

私にも意味がわからないことを、私は言っている。

“ ”

「おかあさんがね、ひとにはなしをきいてもらうと、いやなきもちがとんでいって、すっきりするっていったの。」

ああ、そういうことか。

母にとって嫌なことは、家に父が居なかったことだった。

私が居るから寂しくないとは言っていたが、いつも寂しそうな顔をしていた。

“美緒と話をしていると、嫌な気持ちが吹っ飛んで、お母さんはすっきりするのよ”

よくそんなことを言っていた。

だから、彼の話を聞いてあげようと思ったのだろう。

少年は、小さな女の子に氣を使われるなんて考えてもみなかっただろう。

勢いよく顔を上げた。

「おにちゃん、ずっとかなしそうで、いたそうなかおしてる…。おはなしして、すっきりした？」

少年に、元気になってもらいたいという、純真な子ども心だ。

「そうか…。うん…。少しすっきりできた。」

しかし、そう言う少年の顔は今にも泣き出しそうだ。

「誰も俺のことなんて考えてくれてないんだ…。

俺を人形みたいに扱って…。それが嫌なんだ…。」

少年の言っていることはよくわかる…。

自分の考えや、気持ちを無視されることは、とても辛いし、悲しいことだから…。

今もだが、子供の頃は特に、

父から意にそわない要求をされることが多かった。

子供の頃の父親は、とても恐かった記憶がある。

ただでさえ、あまり家に居なかったので、言うことを聞かないと、もう帰ってきてくれないのではないかと思っていた。

“え…?”

別に父が居なくても、寂しくなどなかったはずなのに、本当はずっと寂しかったのだろうか…?

寂しくないふりをしていたのだろうか…?

あまりにも、遠い記憶過ぎて思い出せない……。

少年も、私と似たような経験をしていたのかもしれない。

第42話 思い出される記憶

「だれもおにちゃんのこと、みてくれないのはさみしいね。でも、おにちゃんをみてくれるひともいるんじゃないの？」

“つい最近、この台詞によく似たことを言った気がする…”

今は夢の中で、はつきりと思い出せない。

「みおはね、おとうさんがみおのことみてくれないの…。でも、おかあさんはいつもいっしょにいてくれるの。」

おにちゃんは？

「俺は…家族の皆はちゃんと俺自身のことを見てくれてる…。」

「よかったね！」

“本当によかった…”

過去の事とはいえ、この少年が家族さえも信じられていなければ、あまりにも可哀想だ…。

傷ついていても、信じらる人が居ればまだ救われるだろう。

誰か一人でもいいから、自分のことをちゃんと見てくれていれば、

それでいいのではないかと、私は思う。

「おにいちゃんはひとりじゃないね。

みおも、ちゃんとおにいちゃんのことをみてるよ?」

「…今日初めて俺に会ったのに?」

「うん。みおとちゃんとおはなししてくれた、やさしいおにいちゃんだね!」

私を見て少年は、少し照れくさそうに笑う。
その顔はまるで…。

「わぁ!おにいちゃん、てんしみたい!!」

「天使?」

「すごくきれいだね!!」

暗い顔をしているよりも、笑っているほうがこの子には似合っている。

昔の私もそう思って、天使のようだと言ったのだろう。

「君と話していると、何か心が落ち着くな…。

嫌なことを忘れられるよ。」

「きみじゃないよ!みおはみおだもん。」

どうやら、ちゃんと自分の名前を呼んでくれない少年に、腹を立てているようだ。

「そうだね。みお…。可愛い名前だ。ありがとう。元気が出た。」

今度は、まぶしいぐらいの笑顔だった。

「おにいちゃんのおなまえは？」

そういえば、まだ少年の名前を聞いてはいなかった。

「俺？俺の名前は…。」

「美緒く！！！」

少年が、名前を言おうとしたところで、遠くから父の呼ぶ声が聞こえた。

会場から居なくなった私を探しているようだ。

「おとうさんだ！はやくいかなきゃ！！！」

父の声ができる方へ、走って行こうとすると、
後ろから手を掴まれた。

「みお、俺の名前は…だから。」

「うん。わかった！じゃあ、またね！…ばいばい。」

父の元へと走り出した。

少年が私に名乗った名前…。
聞き間違いでなければ…。

“ みお、俺の名前は恭哉だから ”

そこで夢は終わって、私は眠りから目覚めた。
長い夢だった…。

そして…。

私が思い出せなかったことを、やっと思い出せた。

夢の中で出てきた少年は、おそらく…。

彼だ…。

「あんなに昔に出会っていたなんて…。」

思ってもみなかった。

夢の少年の顔と、この前のパーティーの時の彼の顔はよく似ていた。

以前彼に「私のことを何も知らないのに結婚できるのか」と、聞いた時に、彼は…。

“君のことは知っている”

そう言っていた。

もしかして、昔に会った時のことを言っていたのだろうか？

なぜか、私は全く覚えていなかったが…。

彼は私のことを、覚えていてくれたのかもしれない。

どうして、こんな大事なことを今まで忘れていたのだろう。
あんな美少年と会っていれば、記憶に残っていそうだが…。
なんにしても、ずっと引かかっていたことが解明された。

それでも、まだ気になることはある……。

第43話 落ち着かない時間

講義が終わって、私は駅前のカフェへとやってきた。
携帯の時計を見ると16…30だ。

かなり早く来てしまった…。

“先に店に入って、待ってしよう”

ドアを開けて、店に入る。

もうお茶をするには時間も遅いので、店内には数名ほどこかお客が居なかった。

開いている席に着いて、ホットコーヒーを注文した。

あっという間に寒くなってきたので、

最近は温かい飲み物を注文することが多くなった。

程なくして、コーヒーが運ばれてきた。

ミルクを少し入れて、スプーンでかき回して、一口飲む。

それから、テーブルの上に置いていた携帯の時計を再び確認する。

“さっき見たときから5分ぐらいしか経っていない”

もうすぐしたら、ここへ彼がやって来る。

今日は朝からずっとそわそわしていた。

会って話したいことがあるとは言ったものの、
何から話せばいいのだろうか…？

前に会ったのが、あのパーティーだ…。
散々言いたいことを言って、彼を傷つけた。

まずは、そのことから謝るべきだろう。
しかし、彼が来てからいきなり謝るというのも…。

“もう少しワンクッション置いて、挨拶から始めよう”

“こんにちは”？

もう17時がくるのに、“こんにちは”では変だ。
じゃあ、“こんばんは”…？

17時だと“こんばんは”になるのだろうか…。

今自分が考えていることは、しょうもないことだとは思いますが、
最初をしっかりと掴んでおかなければ、進む話も進まない。

仮に“こんばんは”だとして…、次は…。
時候の挨拶か…？

“さわやかな秋となりましたが、いかがお過ごし…”

これでは、まるで手紙だ…。
何て言えばいいのだろう…。

挨拶一つでも、こんなに悩むなんて、私はよっぽど緊張している。

「美緒。」

「うえっ。はいっ！」

どうしようかと考えていたら、急に声を掛けられた。
思わず声が裏返る。

まだ、約束の時間になっていないのに、彼は到着したようだ。
私の向かいの席に腰を下ろす。
店員が注文を聞きにきて、彼も私と同じホットコーヒーを注文した。

“まだ来ないと思っていたのに…！”

この期に及んで、心の準備ができていなかった。

すぐに、注文したコーヒーが来た。

私はコーヒーにミルクを入れる派だが、彼はブラックで飲むらしい。
…って、観察している場合ではない。

“まずは挨拶から…”

「君から、呼び出しのメールが来るなんて思ってたなかった。」

自分から話出そうとしたら、彼が先に話出した。

シュミレーションしてきたことは、全く意味がなかったみたいだ…。

「すみません…。忙しいのに、時間を作っていただいて…。」

申し訳ない気持ち一杯になっていると、「気にしないでいいから」と言われた。

「僕も君と話したいことがあったんだ。」

「そっ、そうですねか…。」

彼が私に話たいこと…？

“もう、婚約の話は正式に破談になったから”とか、
“他の女性と婚約することになったから”とか…、
そういう報告をしたいのかもしれない。

少し怖気づいてきた…。

「君は、僕に何の話があったの？」

コーヒーカップを置いて、尋ねてきた。

実は、彼が来てから一度も目を合わせていない。

彼はちゃんと私を見てくれているのに、逸らしてしまう。

“もう逃げないって決めたんだから、ちゃんと目を見て話さないと
！！”

なんとか、自分に喝を入れて彼の方へと視線をうつす。

彼は、相変わらずまっすぐで強い目をしている。
もう目が合ったからには、そらせない…。

弱い自分を奮い起して、正直な想いを伝えることにした……。

第44話 告白

「この間のパーティーで、とても失礼なことを言っ
て、本当にすみません!!」

テーブルに頭を擦りつけるように、私は深々と頭を下げて、
彼に謝罪した。

「自分でも、ひどいことを言ってしまったと思っています…。
決してあなたを傷つけたくて言ったわけではないんです! 本当です
!!」

話し方に力が入る。

「ずっと、後悔していました…。
どうして、あの時素直になれなかったのかって…。
自分から逃げてしまっていました…。」

「美緒…?」

彼は困惑したような表情をしている。
いきなり何を言い出すのかと思っているのだろうか…?

それでも…。
どう思われても、弁解したい。

「あの時私に“怒っているのか”って聞きましたよね…？
違うんです。怒っていたんじゃないかなかったです…。」

核心に触れようとすると、語尾が尻すぼみになっていく。
肝心なことだから、しっかりと伝えなければいけない。

「パーティー会場で、あなたを囲んでいるたくさんの女の子に、
私は嫉妬していたんです…。」

自分よりも、遥かに可愛くて綺麗な女の子達に…。
平凡な私よりも、あなたに似合う子がたくさん居て、
どうしようもなく、嫉妬してしまったんです…。」

自分と彼女達を比べてしまったのだ。

「あなたが、女の子に笑いかけているのを見て、
胸が苦しくて、痛かった…。」

自分以外の女の子に笑うあなたの顔を見たくなくて…。
それで、あの場から去ったんです…。」

彼は黙って、私の話を聞いている。
今、何を考えているのだろうか？

彼の考えてることは相変わらずわからない…。

「泣きそうだった…。

だから、誰も居ない中庭に出たんです。

一人になりたかったのは、涙を見られなくなかったから…。
あなたが追いかけてくれて、本当は嬉しかったんです。

でも、私はイライラしてて…。

ついあんなひどい事を言ってしまった…。

気付いたら、自分の本心とは全く違うことを口走ってて…。」

話してるこの瞬間も、泣きそうだった。

「じゃあ、本当はどう思っていたの？」

問い詰めるでもなく、優しい口調で尋ねる。

「本当は…。あなたと結婚したいって思ったんです…。」

「え…？」

この前までは、結婚したくないと言っていたのに、いきなり間逆のことを言っているのだ。

彼が驚くのも無理はない…。

「あなたに、“結婚の話はなかったことにしよう”って言われて、すごく辛かったんです…。私が言わせたようなものの…。自分の招いた結果なのだから、受け入れるしかないって…。思っていたんですが…。どうしてもあなたを忘れることができなかった…。」

「……。」

目に涙が溜まってきた。

ここで泣くのはフェアじゃないと、わかっているのに、
どんどんこみ上げてくる…。

「忘れようとすればするほど…。あなたの事を好きになっていったんです…。

日に日に募っていく気持ちが、溢れだしそうだった…。」

“好き”

初めてちゃんと口にした…。

言ってみて、やっぱり私は彼の事が“好き”なのだと、
改めて感じる…。

「今更何言ってるんだって、思ってるかもしれませんが、これが私の正直な気持ちです…。

誤解したまま終わリたくなかったので、どうしても聞いてもらいたかったんです…。

もう一度、婚約してくれなんて言いません…。

あなたが、もう次の相手の方と前に進んでいるのを、引き留めようなんて思っていません…。

今聞いたことは、全て私の独りよがりだと思って、聞き流してください…!!」

“泣くな!泣くな!!”

必死で自分に言い聞かせる。

これ以上、彼に余計な気を使わせてはいけない。

第45話 勘違い

「いや…あの、ちょっと待って。」
「…?」

彼はなぜか焦っているようだ。

「混乱してて、何から言えばいいのかわからないんだけど、
“次の相手”って一体誰のこと?」

“次の相手”は、彼の新しい婚約者の人のことだ。
わかっていないのだろうか…?

「この前、駅前で一瞬お会いしましたよね…?」
「ああ、君がショッピングモールに居て、
僕が向かいの百貨店に居た時のことだろうか?」

それはわかっているようだ。
なら、隣にいた相手のことだと容易にわかるだろうが…。

「…はい。その時に一緒に居た綺麗な方は、恭哉さんの新しい婚約者の方ですよね…?」

とてもない美人な人だった。
私などがかなう相手ではない。

「その時一緒に居た…? あゝ…。」
あの人は違う。そんなじゃないんだ。」
「…でも、とても仲よさそうにしてて…。」

腕まで組んで、楽しそうにしていた。
お似合いだと思ったのだ。

「あの人は、僕の“姉”さんなんだ。」
「そうだったんですか、おねえさ…」

“ん？ねっ…姉さん！？って、ええ~~~~~！！！！”

お姉さんだったのか……！！！！
あんなに仲睦まじくしていたから、てっきり恋人だと思っていた…。
違ったの！？

「お姉さん…ですか……。」

「そう。買い物に行くから、暇なら荷物持つをしろって言われてね。
あの日は、せっかくの休みだったのに、嫌々付き合わされていたんだ。」

そう言われてみれば、二人はどことなく顔が似ていたかもしれない。
弟が美形なら、姉も美形だったわけか…。

どうやら、とんでもない勘違いをしていたようだ…。

恥ずかし過ぎる。

穴があったら、至急入りたい……。

「ねえ…さっきのこと、本当なの？」

「さっき…？」

「君が、僕の事を好きだって言ったこと。」

はい…確かに言いました……。

やけになって、勢いまかせに言ってしまったけども…。

“ そうだ…、私恭哉さんに告白したんだ ”

顔が熱い…。

今の私はきつと茹でダコのように全身が真っ赤だろう。

「嘘じゃないです…。本当です…。

今更こんなこと言ってますみません…。」

「どうして謝るの？」

「あの、だって…もう婚約は解消されてしまったし…。」

彼に次の婚約相手が決まっていなかったのは、内心嬉しかった。

でも、結婚の話は白紙に戻っているはず…。

「してない。」

「え…？」

「婚約は解消していない。」

まだ君は僕の婚約者で、僕は君の婚約者だ。」

予想外の展開になってきた。

まだ婚約は解消されてなかった…。

「あの夜に“結婚の話はなかったことにしよう”って言ったけど、僕は未練がましくてね…なかったことには出来なかった。」

苦笑いをする彼は、何を考えているのだろうか…？

知るのが恐かった彼の気持ちも、今なら聞くことができそうな気がする。

「私、ずっと恭哉さんの気持ちが知りたかったんです…。」

「僕の気持ち？」

何のことだろうといった顔をしている。

「どうして私があなたの結婚相手だったのか…。

どうしていつも優しくしてくれていたのか…。
色々考えていたんですけど、わからなかった。

あなたの事を好きだと気付いてから、余計に気になって…。

でも、聞けなかったんです。

私の片思いだと思っていたから…、本当のあなたの気持ちを知るのが恐かった…。」

やっと、聞きたいことを聞いた。

彼が何て言うのかはわからないが、自分が納得して聞いた結果なら、それでいいと思う。

「まだ、聞きたいことがあります。

私達は、昔一度会っていますよね…？

この前パーティーがあったお宅の中庭…、薔薇のアーチで…。」

昔のことも、彼に会ったら聞きたかったことだ。

もし、昔会っていたとしたら、なぜ私と再会した時に、

“はじめまして”と言ったのか…。

彼の方を見ると、とても驚いた顔をしている。

私が言ったどの部分について驚いているのだろうか？

「…正直、どこに驚いていいのか…。」

テーブルに片肘をついて、顔を覆っている。

“そんなに驚くことを私は言ったのかな…?”

「そうか…、そうだよな…。」と独り言を言っている。
そして、顔を上げると私に微笑みかけた。

「前に“君の知りたいことは何でも教えてあげる”って言ったからね。」

その言葉の通り、何でも教えてあげるよ…。
でも、ちょっと場所を変えようか…。」

そう言って、彼は席を立ったので、私も立ちあがった。

第46話 マンション

「……………」

「美緒、コーヒーと紅茶どっちがいい？」

「じゃあ、紅茶をお願いします……………」

「なら、僕も紅茶にしようかな。」

“場所を変えよう”と言われて、連れてこられた場所……。
そこは……………。

「何もない部屋でしょ。」

この言葉でもわかるように、今私は……………。

彼の家に来ている。

なぜ、こんなことに……!?

カフェを出てから、彼の車に乗って移動することになった。
カフェではなくて、もう少し静かな店に行くのだとてつきり思っ

いたので、

どこに行くのかは聞かず、行先は彼に任せていた。

しばらく走ると、車が止まった。

「着いたから降りて。」

そう言われたので、車から降りた。

どんな店に着いたのだろうか、周りを見回す。
どこにも店なんてない…。

着いた所は店ではなく、マンションだった。

「あの、ここは…?」

恐る恐る尋ねる。

もしかしたら、マンションの一室とかでレストランとか…。

「僕の家だけど?」

“それが何か?”という表情だ…。

「ですよね…。」

ははと苦笑いをする。

どう考えても彼のマンションだろう…。

よりによって、彼の家に来るなんて、想像できるはずがない。
確かにカフェよりは静かだろうとは思うが。

しかし、このマンション：一体何階建てなのだろうか？
マンションの1階部分から、目線を建物の上へと向けていくが、
危うく後ろにのけ反りそうになるぐらいの高さだった。

“でか…!!”

「美緒、こっち。」

彼に呼ばれて、マンションの中に入る。

“ここ…ホテルじゃないよね……?”

1階は、まるで超高級ホテルのようなロビーになっていた。
そして、普通のマンションではまずないであろう、
フロントが設けられている。

入口とロビーには屈強な警備員が居た。

私が呆気にとられていると、

「美緒？」とかなり遠くの方から声が聞こえた。

置いていかれないように、

慌てて追いついて、一緒にエレベーターに乗り込む。

…が、このエレベーターも普通ではなかった。

一体何階のボタンを押すのだろうか、彼が指さす方を見る。
何かがおかしい…。

普通のエレベーターには、階ごとのボタンがあるはずなのに、
それがない。

そこには、“開”と“閉”ボタンしかなかった。

このエレベーターのボタンで、
どうやって自分の住んでいる階まで行くのだろうか…?

不可解な疑問はすぐに解決することとなる。

エレベーターが着いた先は、このマンションの最上階だった。
まさかとは思うが…。

「もしかして、今乗ったエレベーターは、最上階の人専用エレベーターですか…？」

「うん。僕しか使わないから、もったいないよね。」

“僕しか…？”

つまり、このマンションの最上階は彼だけの居住区で、今乗ってきたエレベーターは彼専用のものらしい…。

四條グループを甘く見過ぎていた…。
ここまでだとは思わなかった…。

ほんの5分程の間に、こんなに驚くことがあるとは…。

家に入ってから、まだまだ驚くことが山ほどあった。

一番は、この家の広さだ。

最上階のワンフロアだけかと思いきや、この家は二階建てだった。うちの一戸建てよりも遥かに大きい。

大きな窓が付いていて、外の夜景を一望できる。

他にも家具は全てフランスの有名メーカーだったり、何人前の食事を作るのかというぐらい広いシステムキッチンだったり…。

私は、彼の家の規模にただただ絶句した。
彼はやはり別世界の人間のようにだ……。

第47話 初めての訪問

一通り驚いて、現在に至る…。

「飲み物を用意するから、適当に座っておいて」
と彼に言われたものの、私はどこに座ればいいのだろうか…？

取りあえず超大型のテレビが置いてある、リビングのソファに座ってみた。

“ふかふかだ…”

私は、とてつもなくすごい家に来てしまったようだ…。

芸能人のお宅訪問のレベルなんかじゃない。

まさに、彼はセレブだった。

自分が“社長令嬢”という肩書を持っているのが、恥ずかしいぐらい…。

“こんな人と私が婚約してるなんて…”

やはりドッキリか何かではないのかと、疑ってしまう。

根が庶民の私にとって、彼は手が届く存在ではない。

ますます、彼が私などと結婚をしたがる理由がわからなくなった。

「お待たせ。」

頭を抱えて悩んでいると、彼が紅茶を運んでテーブルの上に置く。
非常に良い香りがする。

“どこに座るのかな…”

今私が座っているソファは2人掛けだ。

その他に2人掛けがもう一つと、4人掛けのものがある。

適当に座って良いとは言われたが、

客の分際で4人掛けに座るのはさすがに失礼だろうと思い、
2人掛けに座った。

“やっぱり4人掛けかな…”

否。

2人掛けに座った。

それも、空いているもう一つのものではなく…、
私が今座っているその真横へ……。

“なんで…？他空いてるよね…？？”

もしかして、私が座ってるこのソファ―は彼の指定席なのかも”

それなら、私が移動する必要がある。

他の席に移るために席を立ちあがったら…。

手を引かれた。

「あの…私、あっちの席に行きます…。」

「なんで？」

「恭哉さんがここに座るのなら、席を変えた方がいいかと…。」

だから、その手を離してほしい…！！

目でそう訴える。

しかし…。

「移動しなくていいから。」

話をするんなら、近くに座ったほうがいいだろう？」

それはそうだが…、無理に同じソファ―に座らなくてもいいでは…。

「座って。」

手を下から引っ張られて、私は元の位置にすっと戻る。
反論する雰囲気でもなさそうだったので、
仕方なくそのまま座ることにする…。

車なら、まだシートとシート間に一応くぎりがあるが、
今はそんなものはないので、足を広げようものなら、
すぐに彼の長い足に当たるだろう。

“この態勢でちゃんと話せるのかな…”

私は不安になった…。

彼が「冷めないうちにどうぞ」と、紅茶を勧めてきたので、
「すみません。いただきます。」と言って飲んでみると、
とても美味しかった。

“これも高いんだろうな…”

いけない…、さっきから見物全ての値段を考えてしまっている…。
何か気の利いた会話をしなければ…。

「広くて素敵なお宅で、驚きました。
これならたくさん友達呼べますね。」

これが果たして気の利いた会話かどうかはわからないが、
感じたことを言ってみた。

「友達なんて呼んだことない。」

「え…？」

「この家に僕の家族以外で来たのは、君が初めてだよ。」

思わずうつとりしてしまうような笑顔だ。
私が彼に招かれた初めての訪問者ということか…。

“…？初めて？？”

「…最近こちらに引越してこられたんですか？」

それなら、納得できる。

「いや、もう2年は住んでるけど？」

……。

2年も住んでいて、家族と私以外の訪問がないって…冗談？

「どうして他の人を呼ばないんですか…？」

気になる。ぜひとも確かめたい。

「自分の家に誰かを呼ぶのって好きじゃないんだ。なんか落ち着かないっていうか…。」

さらっと重大なことを言って、彼は紅茶を飲む。

ちょっと待って。

じゃあ、何で私を呼んだんだろうか？？

今、彼が言ったことは…つまり……。

“私は特別ってこと…?”

これは自惚れではないはずだ…。

“どうしよう…!?!? かなり嬉しいんだけど…”

もう、これ以上私の心臓に負担を掛けさせないでほしい。
心臓がいくつあっても足りない…。

第48話 鈍感

「一息ついたことだし、さっきの話の続きをしようか。」

「続き…。」

「まだ、僕は君の質問には答えてなかったからね。」

そうだった…。

この家に来た目的を完全に見失っていた。

カフェでの話の続きをするために、来たのだ。

彼の本当の気持ちを知るために…。

「まず、何から話そうか…。」

腕を組んで考えているその仕草でさえ、私にはまぶしく見える。
本当に私はこの人の事が好きらしい。

だから、彼の思っていることを知りたい…。

「君は、“僕の気持ちがわからない” って言ってたけど、
あれって本気なの？」

いきなり核心に迫ってきた…。

この状況で冗談を言えるほど、私は器用ではない。

「…はい。前に恭哉さんは、

結婚相手は私でないといけないって言っていましたが、その理由がいくら考えてもわからなくて…。」

なぜ、私である必要があるのだろうか？

今日改めて、この政略結婚の意味がわからなくなった。

「……。美緒は、結婚ってどうしてするんだと思う？」

彼の気持ちを教えてほしいのに、

話は“結婚”についてに変わってしまった。

聞かれたので、仕方なく答える。

「好きな人とずっと一緒に居たいから…？」

人生を共に歩み、お互いの時間を共有するために“結婚”は必要だ。誰に聞いても、私と同じ回答をするだろう。

「それがわかるんなら、簡単なことじゃないの？」
「…？」

「僕は君だから結婚したいって言ってる。」

「はい。それは知ってますが…？」

それとこれが、どう関係あるというのだろうか…？
さっぱりわからない。

「思っていた以上に、君は鈍いようだ…。」

彼は、がつくりといった感じで頭を垂れている。

それでも、私は彼が何を言いたいのかわからない。
思っていた以上に鈍いって…。

私が鈍いと、前から思っていたということ？？
なんだか、ムツとしてしまった。

「自慢ではありませんが、

私はよく勘が冴える子だと昔から言われてきました！」

決して自慢ではない。

「僕も、君は人の気持ちを考えられる子だと思うよ。でも…それもある部分では機能していないようだ。」

私が、機能していない部分??

そこで、以前裕子に言われたことを思い出した…。

“ 美緒は、恋愛面に疎すぎる ”

“ 恋愛面 ”。

失念していた…私はそっち方面は未発達だった!!

「…それって、恋愛とかですかね…。」

「そう。」

いやいや、でもまだわからない。

恋愛面に疎いから、それがどうだというのだろう…。

「確かに、私は恋愛に関しては壊滅的ですが…。
そこが鈍いのと、どう関係が…？」

自分で言っていて、悲しくなる…。

「かなり手強いな…。仕事相手の方が上手くいく……。…」

私は知らない間に、彼にとって強敵となっていた。
そんなに私はやっかいなのだろうか…！？

「君が鈍い恋愛部分を、さっきの話に補ってよく考えて。
どうして、結婚するのかって君に聞いたよね？」

それで、君は何て答えた…？

ここまで言えばさすがにわかるだろう…。」

「好きな人とずっと一緒に居たいから」って言いまし…。」

“好きな人とずっと一緒に居たい”……？

“好きな人”

「え〜〜〜〜〜〜！！！！恭哉さんは私が好きなんですか！！！！」
「…良かったよ。やっと僕の気持ちに気付いてくれて…。
これでだめなら、絶望的だと思った……。」

興奮状態の私に反して、彼は沈んでいる。

嘘でしょ…？

この人が私を好きだなんて……。
信じられない……。。

第49話 偶然の出会い

あり得ないことが起きた。

彼が私のことを“好き”だなんて…。

今日の出来事の中で、この驚きは群を抜いている……。

「考えてもいませんでした…。」

というより、そう考えられるだけの知識や経験がなかった。

もし、裕子のように恋愛面が発達していれば、彼の気持ちにすぐ気付けた…？

「僕も、口にこそ出しては気持ちを伝えなかったけど、言葉や態度で示してたつもりだよ…？」

それが、全く意味のないことだったなんて…。」

言葉や態度で示してくれていた？

「そうでしたっけ…？」

「シヨックだ…。あれだけ“結婚相手は君しかいない”、

“君だから結婚したい”と言ったのにな…。

それに、なるべく僕を意識してもらおうと、わざと接近したり…。」

私と結婚したいと言っていたのは、

裏を返せば“好きだ”と言っていたということ？

赤面するぐらい距離が近かったのも…？？

そんな意図が隠されていたなんて…わからなかった。

「…あの射抜くような目も？」

「射抜く？そんな風に感じていたのか…。でも、間違っではないな。君を落とそうと画策していたんだから。」

私の心がざわついた出来事は、全て彼の私に対する思いだったよう
だ。

恋愛面に疎い私が、隠された想いまで読みとれるはずがない…。

“自分の気持ちだって、

裕子に導いてもらわないとわからないぐらいだもん…”

「すみません…。私にはハードルが高すぎでした…。」
「僕がちゃんと言わなかったからいけないんだ。」

彼は申し訳なさそうにそう言う。

「私、利益がらみの政略結婚だと思っていました。」

「うん…。まあ、政略結婚には変わりないんだ。」

君は、如月社長が僕以外にも、たくさんの結婚相手を探していたって知ってた？」

「いえ…。知りませんでした。」

そんなにたくさんの相手を探していたなんて…。
父はどこまで、娘を仕事の道具として扱うんだ…。

「実は、僕の前にもうすでに君の婚約者は決まっていたんだ。」
「うそ…。」

「正しくは、決まりかけてた…かな？」

そこへ、僕が無理やり割り込んだって感じだね。」

初めて聞く話ばかりで、頭がついていかない。

「君を写真で見つけて、他の奴に先を越されないように、とにかく急いで、如月社長に結婚の話を持ちかけた。」

“ そんなに、私を結婚相手にと望んでくれていたの…？ ”

彼の気持ちは本物だった。

それにしても…。

「何の写真を見たんですか？」

彼が偶然にも目にするような写真があったのだろうか？

「3年ぐらい前に、僕の父親の誕生日パーティーがあって、それに出席したのを覚えてる？」

3年ぐらい前の誕生日パーティー？
そういえば…。

「出席した気がします…。父がどうしても行けと言ったので…。」

やむを得ず出席したことは覚えているが、主催者のことまでは覚えていなかった。

それが、彼の父親のものであったとは…。

「いつもは出席するんだけど、

その時はたまたま用事があったって僕は出席していなかったんだ。」

「じゃあ、私たちはそこで会ってなかったんですか？」

今の流れだと、パーティーで会ったのかと思った。

「パーティーでは会わなかった。でも、つい3カ月前に出会ったんだ。」

3年前会わなかったのに、3か月前に会った？
ここ最近パーティーの類には一切出席していない。

「父が会社で使っている部屋の片づけをしていて、偶然3年前のパーティーの写真が出てきてね…。
出席者全員の記念撮影のものであった。

何気なく見てたら、気になる子を見つけた…。
それが、君だったんだ。」

「たくさん居る人の中から、なぜ私を？」

記憶をたどると、かなりの人があの場に居たはずだ。

「ここで、君がもう一つ知りたがっていることが関係するんだ。」
「もしかして、昔会ったこと……ですか？」

この前、パーティーが開かれた家の中庭にある薔薇のアーチで昔出会った時のことだ。
それが関係するとは……。

彼は、体を私の方へ向けて、じっと見つめる……。
もう、これで私は彼に捕われて、動けない……。

「僕は、昔たった一度しか会っていない君のことを、
10年以上……ずっと探していたんだ。」

第50話 初恋

“私を探していた…”

たった一度しか会っていない私を、
なぜそんなに必死になって探していたのだろうか…。

「…どうしてですか？」

「君が好きだったから。」

信じられない…。

そんな昔から私を想ってくれていたなんて…。

「でも…、昔会ったとき、

恭哉さんと話した時間はとても短かったですよね？」

時間になると30分もなかったはずだ。

「話した時間は短かったけど、君を好きになるには、十分過ぎる時間だった…。」

「あの時の恭哉さんは、10歳ぐらいだったのに、

とても大人びてて、私にしたらかなり年の離れたお兄さんって感じでした。

対して、私は年相応の子供で…。」

夢に出てきた自分は、話かたや動作が幼稚で、彼から見たら幼い子供に見えたと思う。

そんな私のどこを好きになったのだろう…？

「別に、君の容姿や行動を見て好きになったわけではないんだ。君の優しさと笑顔に惹かれた…。」

あの瞬間、僕よりも幼い君に恋をした。

ほんの短い時間だったけど…確かにあれは僕の初恋だった。」

“初恋…私が……？”

「初恋は、いつまで経っても忘れられないってよく聞くけど…。あれは本当だな……。」

僕も忘れられなかったから、10年以上経って君の写真を見ても、すぐにわかったんだ。」

夜で、暗かったはずなのに…。

ちゃんと覚えてくれていた……。

彼は紅茶を一口飲んで、「僕は、昔と今では雰囲気違ってたかな」
と言った。

「あの頃の僕はずいぶん生意気で反抗的で…、ませてただろう？
誰も信じたくないっていうほどの人間不信に陥っていたんだ。
僕の容姿や肩書きしか見ていないヤツらを、心底嫌悪してた。」

彼が言うように、昔はかなり反抗的のようだった。

「昔の恭哉さんは大人っぽくて、それに口調とかも違っていました
…。」

「あの時のパーティーあたりが、反抗のピークだったな…。
自分の事を“俺”って言ってたしね。
とげとげしい言い方しかできなかったんだ。冷めた子供だった。」

昔の彼と今の彼では、まったく受ける印象が違う。

「あの日のパーティーもまともに出る気が全然なくて、会場を抜け出した。
一人になれる静かな場所を探していたら、中庭に出て…、
そこで時間を潰していた。」

だから、中庭の…薔薇のアーチに居たのか……。

きつと、彼は四條グループの跡取りとして、

早くから大人とまじって生活をしていたのだろう。

心の成長が早かったから、冷静で大人な彼と、

同じ年の子達は合わなくて、辛かったのかもしれない…。

「中身が必要とされない自分が生きていく意味があるのかって…、
およそその年の子供が考えないことを考えていた。

なんか、つくづく自分の人生がくだらなく思えたな…。

そんな暗いことばかり考えていたところで、…君が現れたんだ。」

“小さい体の中に、そこまでの深い闇を抱えていたなんて…”

私の登場は、かなり空気を読めていないものだったのかもしれない。

「初めは“何だこの子？”って思ってたんだけど、

僕のことを知らない君になぜか、本音をぶちまけてた。

いや…僕のことを知らなかったから、話せたのかもしれないな。

僕を色眼鏡で見えない君は、とても素直で純粹で…。
自然と心を開いていたみたいだった。」

彼は、昔話をするようにぼつりぼつりと、当時を思い出しながら話す。

私が知らない彼をもっと知りたくて、彼の話を聞いた。

第51話 見つからない私

当然、幼い私は彼のことを知らずに、話しかけた。

小さい彼は美少年だったけど、

子供の私はそこに意識はしていなかった。

ただただ、悲しそうに俯いている彼を放ってはおけなかったのだろう。

「たぶん、私は“なんで元気がないのかな”って、
思ってたんでしょうね…。

だから、話しかけたんだと思います…。」

そんな彼を黙って見過ごせなかった…。

「あの時も、再会した時も、

君は同じ言葉を言ってくれたんだ。

僕のことを見てくれてる人がちゃんと居る、

だから僕は一人ではないんだって…。

君は特に何も意識していなかったかもしれないけど、

昔も今も、その言葉が本当に嬉しかった。僕は救われた気がしたんだ…。」

子供が悩むには重すぎる問題を、一人で抱えていたのか…。

孤独な彼に、誰も手を差し伸べてあげなかったのかと考えると、可哀想だった…。

でも、今彼は私の言葉に救われたと言った。

“ 何気なく言った事を、そんな風に喜んでくれていたなんて…”

そのことを知って、今度は私が嬉しくなる。

「それと同時に、これまで感じたことのない感情が生まれた。

目の前の女の子がとても愛おしく思えたんだ…。

でも、君はすぐにその場から立ち去ってしまっ…、

パーティー会場に戻ったら居るかもしれないと探したんだけど、どこにも居なかった。

結局、僕は“ みお ”という名前しか、

君のことを知ることができなかった…。」

名字は言わずに、名前しか彼に教えていなかったことを思い出した。

自分の自己紹介もまともにできないぐらい、私は子供だったようだ。

「あれから、すぐに帰ってしまっただけだ。」

父に呼ばれて、パーティーがお開きになる前に帰ったのだ。だから、会場には戻らなかった。

「せめて、君のフルネームを知りたくて、パーティーの後、あの会場に居た女の子の名前を片っぱしから探した。何度も何度も探した……」

でも、“みお”という名前の子は居なかった。
「え……？でも……」

途中で帰ったものの、私はパーティーに出席したのだから、父が署名をしたのでは？
この前のパーティーだって、署名したはずだ。

「父親に頼んで、主催者の人から出席名簿を借りたけど、そこにも名前が記入されていなかった。」

後でわかったことなんだが、如月社長は当日に招待を受けたらしくて、

名簿に署名はしなかったらしい。

署名は招待客の確認をするためのものだから、必要なかったんだ。どうりでいくら探しても、名前がなかったわけだよな……」

昔は、今よりも会社が小さくて、
パーティーの招待を受けることも少なかった。

受けても急だったものが多かったような…。

“主催者の人に名簿を借りてまで、私を探してしてくれたんだ…”

相当な客の数の名前を一つ一つ調べて…。
大変な作業だっただろう。

そんなに私を探していたなんて…これっぽちも知らなかった。

知らないどころか、私は昨日まで彼と昔会ったことさえ、
ちゃんと覚えていなかったのに…。

第52話 溢れる想い

「それでも、他のパーティーに君が出席するかもしれないと思って、色々僕も出席したけど、どこの会場にも居なかった。」

子供の彼にとって、

嫌で仕方なかったパーティーに出席してまで探してくれていた…。

私はなぜ、他のパーティーには出席しなかったのだろうか。

招待されることは今よりは少なかったが、

どれか一つぐらいに参加していてもよさそうなのに…。

“ そういえば、あの頃って…”

母が亡くなった時期だ…。

私が6歳の時だから…間違いない。

「パーティーが終わってすぐぐらいに、母が亡くなったんです…。それから、パーティーに出ることがほとんどなくなりました。」

母が死んだことがショックで、
華やかで騒がしいところには行きたくなかった。

どうしても行かないといけない時しか、出席していなかったはずだ……。

「それも後から聞いてね……。お母さんが早く亡くなってしまって……、パーティーどころじゃなかったんだろう。」

「はい……。私は母にべったりだったので、亡くなって本当に悲しかったんです……。毎日ずっと泣き続けていました……。」

その時のことを思い出すと、今でも泣きそうだ。母が大好きだった……。

彼も悲しそうな顔をしている。

「いつも傍に居た大切な人が居なくなっただ……。大人でも悲しいことなのに、子供の君にとったら絶望的だっただろうね……。あまりにも、早い別れだったようだし……。」

“過去の私の悲しみを、分かち合おうとしてくれているの？”

もう過ぎたことだが、彼の心遣いは素直に嬉しい……。

「君と再会したときに、昔会ったことを言わなかったのは…、お母さんが亡くなったときのことを、一緒に思い出してほしくなかったから。わざわざ辛いことを思い出させたくはなかったんだ。本心では言いたかったけど、君の気持ちを考えると、とても言えなかった。」

ああ…そうか。

それで、昔私に会ったことを言えなかったのか…。私が傷つかないようにと。

目に見えない彼の優しさに、私は守られていた。優しいのは私ではなく、彼の方だ。

“ どうしよう…涙が溢れそう… ”

心配をかけたなくて、必死でこらえた。

「どんなに探しても君は居なかったから、あの時僕は夢を見ていたんじゃないかってことも考えたよ。」

自分が言っただけの言葉で、都合良く夢で見たのかなって。でも、夢にしてはやけにリアルだったし、夢だとは思いたくなかった。

だから、いくら時間が掛っても、必ず君を見つけて出してみせるって心に決めたんだ。」

せつなく笑う彼を見て、鼓動が高鳴る…。

「写真で君を見つけたときは、信じられないぐらい驚いた。会ったのは、

10年以上も前のことだったから、同一人物だという確証はなかったし。

でも、君の横に如月社長が写っていて、もしかして娘さんなのかもしれないと思ってね、

仕事で如月社長に会ったときに、尋ねたんだ。

そしたら、“娘の名前は美緒です”って言われて…。」

「そうだったんですか…。」

「やっと、見つけ出すことができた。

君に会いたいと、十年越しにしつこいぐらい想っていたから、叶ったんだ。

忘れることなんてできなかったんだから、仕方がないよな…。」

涙が頬を伝う。

私が彼のことを想う以上に、この人は私を想ってくれている…。

第53話 捕われる二人

「美緒…？」

「嬉しくて…。ずっと私を想っていてくれたことが…。」

私が泣きだしたので、彼は困った顔をしている。

困らせたくないのに、どうしようもなく勝手に溢れてくる。

「恭哉さんが想い続けてくれなければ、

私はあなたと再び出会うことはできなかった…。

好きになることができなかったはずだから…。」

諦めないでいてくれたから、もう一度出会うことができ、
彼を好きになれたのだ。

「僕も自分の執念深さには驚くけどね。」

はにかんでいた彼が、長い指で私の涙を拭う。

「写真で君を見つけて、君のことがわかってから、どうしても会いたかった。でも、婚約者が決まりかけてると聞いて、焦ったよ…。如月社長に接触して、なんとか自分が婚約者になれて…嬉しかった。最初は君が僕のことを好きになってくれなくても、そばに居られたらそれでいいと思っていたんだ…。」

涙を拭っていた手を止めて、頬を包むように触れる。その手はとても温かい…。

「だけど、欲が出た。」

一つの欲求がみたされると、次の欲が生まれる。

僕を好きになってももらいたって考えるようになった…。

だから、政略結婚なんて言葉を振りかざして、

僕に縛りつけようとしたんだ。

君に結婚相手は僕しか居ないと思わせようって…。

僕は欲深い人間だろう？」

確かに、彼の言葉に惑わされていた。

“結婚は歴史や家柄がないと出来ない”と言われて、それを考える
と、

彼以上に結婚相手にふさわしい人はいないと思ったのだから…。

「言葉巧みに、君の気持ちを自分のいいように誘導して…。

君を想っているなんて言いながら、自分のことしか考えていなかった。」

頬に触れている彼の手の上に自分の手を重ねる。

「私こそ自分のことしか考えていなかったんです…。私だけがあなたの事を好きになるのが恐くて、逃げた…。あなたの気持ちに気付くことができなくて、自分の保身のためにたくさんひどいことを言って…」

言い終わらないうちに、突然抱きしめられた。でも、この前のように力任せなものとは違って、優しい…。

「次に君に出会えたときは、必ず捕まえようと思ったんだ。もう見失わないように、この腕の中に君を閉じ込めて、僕から逃げられないようにしようって…。」

彼の胸に頭を預けるようにしてもたれ、背中に腕を回す。

「私…今の恭哉さんと初めて会った時、予感がしたんです…。」
「予感…？」

どきどきと心臓が鳴っているが、それは私のものなのか、それとも彼のものなのか、わからない…。

「捕われそうだと…。」
あなたに惑わされてしまったら、絶対に逃れることはできないって…。」

今思えば、出会ったときにはすでに、心は捕われていたのかもしれない。

「でも、先に僕を捕まえたのは君だ…。」
僕の心を持って行ったまま、居なくなるなんて…ずるいな。
だから、今度は僕が君を捕まえる番だと思った。」

抱きしめる腕に力が入った。

「捕まえたと思ったら、逃げられて…。

もどかしくて、仕方なかった。

でも、もう逃がさないから…。」

この甘くて心地よい抱擁に、私は酔いそうだ…。

「好きだ…美緒。

もっと僕のことを好きになって…。

もっと僕のことを考えて…。」

こんなに彼が好きでいつも考えてるのに、

これ以上を求められたら、自分が自分でなくなる…。

第54話 掌の上

どれぐらいの時間、抱き合っていたかわからない…。

自分の気持ちを、彼に伝えられるだけでいいと思っていたのに、彼は昔も今も変わらず私を想ってくれている。

“お互いを分かり合うつて、こういうことなんだ”

不安だった心が、晴れ渡るように明るくなる。

彼の温もりを感じながら、私はそんな事を考えていた…。

どちらともなく、抱き合っていた腕を離す。

“思いあまって、彼に抱きついてたけど…なんかすごく恥ずかしい気が…”

少し冷静になった頭で考えると、

普段の自分なら絶対にしないような行動だった。

腕は離しても、彼と近くで向き合ったままだ…。

「美緒は華奢だから、強く抱きしめたら折れそうだ。」
「へっ？」

抱擁の感想を言われても…困る…。

「でも、もっと君に近づきたくて…我慢できずに、
力を入れてしまった。」

憂いを含んだその表情は、私をまた落ち着かなくさせる。
美形がそんな顔をしないほしい…。

何か他に意識を向けようとしていたら、ある事を思い出した。

「そう言えば、さっきのカフェで恭哉さんが、
私に話したいことがあると言ってましたけど、何だったんですか？」

このどことなく盛り上がった甘い雰囲気は、

壊れるようなことだったらどうしようか…。

「ああ…。もういいんだ。」

「いいって言われても…気になりますか…。」

私に話したいことってどんな内容だったのか。
気になる、知りたい。

彼は珍しく私から目をそらした。
言いにくいことなのだろうか？

「結婚をなかったことにしようとか言っておきながら、
やっぱり諦められなくて…。

君には黙ったまま、婚約はしたままにしておこうと考えてたんだ。」

「え…？」

「婚約を解消してしまったら、君を他の男に取られるかもしれない
だろう？

だから、解消することができなかった。

君には一度白紙に戻ったと思わせて、僕は改めて君にアプローチを
しようとしていた。

せっかく探し出せたのに、このまま引き下がることができなかった
んだ。

でも、それは君を騙していることだと思って…。

それで、もう一度君に会って、僕との結婚を考え直してほしいと頼
もうと思った。」

そこまで、考えていたとは…。

結局、私が彼に対して素直な気持ちをぶつけられなかったから、私たちの想いはすれ違ったのだろう。

ずいぶんと遠回りしてしまった…。

「君との結婚が取り消されようとしていた時でさえ、どうすれば一番いいのかって計算してた…。どこまでも、経営者の考えしかできない自分が情けない。」

彼は自分のことをそう言うが、私はそんな風には思わなかった。

「そこまで、私を想ってくれていたんですね…？それを聞いて私は本当に嬉しいです。」

こんなに素敵な彼から想ってもらえるなんて、私は幸せ者だ。

彼は逸らしていた目を私に向けて優しく微笑む。

「なんで君は、そんなに僕が喜ぶことばかり言うんだろうな…。完全に僕は君の手中にあるな。掌の上で転がされてるんだ。」

そんなことを言われても…。

まるで私は彼をたぶらかす、小悪魔のようだと思われるようだ。恋愛に超鈍感なこの私が、そこまで高度なスキルを持っているはずがない…。

「でも、僕は君にならいくら振り回されてもかまわない。」

「…なぜですか。」

「君が好きだから。」

私の首に腕を回すようにして、顔を覗きこんできた。上目遣いに私を見る。

「ねえ…美緒。僕をこんなにも夢中にさせたんだ。

当然、覚悟はできてるよね…?」

「かっ覚悟とは…!?!?」

彼は口角をあげ、ニヤリと笑う。

「僕のことしか考えられないように…、
これから嫌というほど君を愛してあげる…。」

…できない。

覚悟なんてできない！

その前に心臓が爆発してしまう…。

絶対、私の方が彼の掌の上で、
コロコロといいように転がされている。

どうやら、私はとんでもない人を好きになってしまったらしい……。

第55話 政略結婚の相手

段々と、彼の顔が近付いてくる…。

“近い！近いってば…！！”

「あつ、あの…えっと…その…」

頭はパニック状態で、体は硬直したまま動かない。
このままでは呼吸が止まる…。
私は命の危機さえ感じた…。

「あまり、君をからかって嫌われても困るから、
この辺で止めておこうか。」

クスクス笑いながらそう言って、彼は私から離れた。
性質が悪すぎる…。

“たっ助かった…。やっと、普通に息が吸える…”

いつも意識せずに、

普通に呼吸ができていることのありがたみがわかった。

遊ばれている…。

やはり、彼は私より何枚も上手だ。

笑っていた顔が急に真剣な表情に変わる。

「僕は、美緒が思いやりのある、優しい子だっていうことはよく知ってる。

だけど、それ以外の君は全然知らない。」

「恭哉さん？」

「だから、これからお互いのことを知っていこう。」

私もそうだ。

彼が私のことを大切に想ってくれていて、大事にしてくれているのはわかった。

しかし、それ以外の彼はまだ何も知らない…。

「焦らずに、少しずつ…。

僕たちは、一般の恋人が会う方法とは全く違う出会いだった。

踏まないといけない段階をすっ飛ばしてきてしまったから、

もう一度、最初に戻ってみよう…?」

「…はい。」

会ってすぐに婚約だったのだから、段階を踏んでいないのは当然だ。

しかし、私は彼を好きになった。

何も知らない彼のことをいつの間にか好きになっていた…。

政略結婚は嫌だったが、彼とならそれでもいい。

「私、今回ばかりは父に感謝します。」

「如月社長？」

「だって、父が恭哉さんを結婚相手に選んでくれなかったら、私は他の人と結婚していたかもしれないでしょう？」

彼の前に他の相手が、結婚相手として決まりかけていたと知って、本当にびっくりした。

今となっては、彼以外の誰かと結婚するなんて、到底考えられないことだ。

きっと、彼だから私は好きになれた。

別の誰かを好きになるなんて…考えられない。

それを思うと、父が今回の政略結婚を持ちかけてきたことに、私は感謝するべきだろう。

「美緒。君は如月社長のことを少し誤解してないか？」

私が心の中で、滅多に思わない父への感謝の気持ちを感じていると、聞き流せないことを言われた。

「父を誤解している？ありえないですよ。」

これまで、家族らしい付き合いはあまりしてこなかったが、それなりに親子としての時間を過ごしてきた。

その私が、父に対して誤解するようなことはない。

「君が考えているよりも、ずっと如月社長は君のことを考えてるよ。」

「知ってます。より、会社の利益につながりそうな結婚相手を探して、

私と結婚させようとしてたって…。

でも、それは私のことを考えていたのではなくて、会社のことを考えていたんです。」

昔から、根っからの会社人である父…。

常に自分の会社を大きくしようかと、そんなことばかり考えていたのだろう。

家族の存在など、気にも留めない程に…。

「如月社長の立場からして、更に会社を発展させるためにも、君にはどうしても政略結婚してもらわなければいけなかった。」

「そうですね…。政略結婚はそういう家に生まれてきた者の宿命ですから…。」

彼にそう聞いたから、私は仕方がないと思っていた。

「利益重視するだけなら、相手が誰であってもかまわないだろうけど、

如月社長はちゃんと君にふさわしい相手を選んでいたんだ。」

ふさわしい相手というのが、

家柄が良いとか、会社が大きい人のことなのではないだろうか？

彼を最終的に私の相手として選んだのが、その証拠だ。

「私にふさわしいのではなくて、父の会社にふさわしい人の間違いですよ。」

「そういう意味じゃない。

会社のことをだけを考えるのなら、君はもっと前に婚約者が決まって

いたんじゃないか？」

彼の言いたいことが、よくわからない。

私が訝しそうな顔をしていたら、「簡潔に言うて…」と切り出された。

「利益なんてのは、二の次で一番は、
君のことを幸せにしてやれる相手を探していたんだ。」
「そんな……。」

そんなの嘘だ…。
あの父が会社よりも私の幸せを考えていたなんて…。
簡単に信じられるわけない……。

第56話 親子の溝

「利益重視でいくなら、きつとんでもない男と結婚させられてる。金持ちの男っていうのは女好きが多くてね…、

愛人なんて片手で数えられたらいいほうじゃないか？

金を持っててろくでもない男なら、その辺にごろごろいるけど、そんなやつと結婚させたら、君は絶対に幸せにはなれないし、例え、相手が嫌になって離婚することになっても、

女の君が生きて行くにはかなり肩身が狭くなるだろうね。

だから、如月社長は君を幸せにできる相手を探していたんだ。」

「僕は君以外の女には一つも興味がなから安心して」と、ときめきそうなことを言われたが、その時の私には彼の言葉が頭に入ってこなかった。

“ 相手を選んでいたというのは、つまりただ単に金持ちの相手ではなくて、

結婚しても安心できる相手ということ…？ ”

「君のことを幸せにできそうな相手を何人もピックアップして、その中からより良い相手を選んでいたようだね。

政略結婚には変わりないけど、父親としては少しでも君に幸せになっほしくて、

必死で探していたみたいだ。」

「：知りませんでした。

でも、にわかには信じられません。

私は、ずっと父に強いられて生きてきたんですから：。」

何をするにも、いつも口挟んできことごとく私の意見を無視した。

まるで、“お前は言うことだけ聞いていればいい”とされている
ようで、

そう感じると、腹が立って反抗した。

「本当だよ。僕が本人から聞いたんだから。」

「聞いたって：いつ？」

父は彼に何を言ったというのだろうか：。

「僕が写真で君を探し出して、

なんとか自分が婚約者になろうと如月社長に直談判した時。」

直談判なんてしてたのか：。

これもまた初耳だ。

「どんなことを父に言ったんですか？」

「今候補に挙がっている男よりも、僕の方が娘さんを幸せに出来ます」、
“利益などは望んでいませんので、政略結婚の相手を探しているのなら、
僕にすべきです” って言ったんだ。」

そんな恥ずかしいことを…。

いきなりそう言われて、父はどんな反応をしたらろうか……。

「そしたら、“娘を幸せにできる確証はありますか？” って。
「父が…？」」

意外すぎる…。

父の口から私の幸せを案じる言葉が出るなんて…。

「遊びのつもりなら、他を探してください”なんて言われたから、僕は何年も前から君が好きだったこと、ずっと探していたことを話した。」

それでも、なかなか信じてもらえなくてね。」

なんとなく、父が彼の言うことを信じられないのはわかる気がする…。

うちの会社など比べ物にならないぐらいの大会社の御曹司が、娘との結婚を望んでいるなんて簡単に信じられないだろう。

それに、彼はただの御曹司とは違って、容姿も完璧な人だ。
余計怪しんだに違いない…。

「だから、仕方なく奥の手を使った。」

「奥の手…とは？」

「婚約者にしていただけないのなら、娘さんが結婚しても、
僕はどこまでも追いかけて結婚の邪魔をしますよ」と言ったんだ。」

なっ何てことを言うんだ…！？

やんわりと言ってはいるが、言い換えると…。

“結婚をだめにしてぶち壊してほしくなければ、娘を婚約者として
寄こせ”

になるのでは…？

確かに本気度はこれ以上ないぐらいに伝わる…。

父にそこまで言えるとは…さすがだ…。

恐れ入る…。

「なんて言っていました…？」

「青い顔をしてたけど、“そこまで言うのなら…”って言われて、
なんとか婚約者の相手として認めてもらったんだ。

未来のお義父さんだから、出来る限りにこやかに対応していたのが

良かったのかも。」

違うだろう…。

完全にそれは脅しだ。

彼のような美貌の持ち主に微笑みかけられながら、脅されたら、父も断れないだろう…。

承諾せざるを得ない。

「あなたのように娘を想ってくれる人なら、娘も幸せになれるでしょうね」

「え…？」

「そう言ったんだ。如月社長は、君の幸せを願っていたんだよ。でも、社長という立場もあるから会社のことも考えないといけない。割りとポーカーフェイスだから、表情には表れないけど、心の中では“父親”と“社長”で葛藤してたんじゃないかな？僕も同じような立場だからよくわかるんだ。」

葛藤…？

“父親”と“社長”で…？？

「君は昔、“おとうさんはみてくれない”って言ってたけど、昔から今も変わらず、君を見て、考えて想ってくれてる。」

僕は男だからあんまりなかったけど、姉さんはよく父からねちねち言われてたよ。

門限作ったり、交友関係にうるさかったり…。

姉さんは中学から大学までずっと女子校に行かされていたし。」

私に似ている。

彼のお姉さんも、そうやって強いられてきたのか…。

「姉さんは元から気が強いっていうのもあって、父親が言うことは全てにおいて反抗していたな…。うるさく言われるのが我慢できなかったんだろう。」

「私も一緒です…。」

押さえつけられるから、反抗する。

仕方がないことなのだ。

「でも、姉さんにうるさく言っていたのは、女の子だから色々心配していたからだった。

現に僕は割とほったらかしだった。男親なんて、そんなもんじゃないの？

もっと前から、お互いがしっかりと話合っていたら良かっただろうね…。

親の心子知らずでもあるし、子の心親知らずでもあるな。

君たち親子には話合う時間が必要だよ。今からでも遅くない。十分間に合う。だから、腹を割って話してみなよ?」

“心配”…。

父が私に……？

そんなこと全然気付かなかった…。

父の気持ちなんて、今まで考えたこともなかった…。

“知ろうとしなかった…”

第57話 踏み出す一歩

彼に家まで送ってもらった。

自分で帰れると言ったのだが、

「もう暗くなったら、危ないから送る」と言われたら、
断るわけにもいかない。

しばらく車で走ると、家の前に着いた。

彼のマンションから私の家までは案外近いということがわかった。

「じゃあね、美緒。」

暗がりでも、彼が私に微笑んでくれているのがよくわかる。

「今日はお宅にお邪魔して、
それに帰りも送っていただいて、ありがとうございます。」

なんだか、いたれりつくせりで、彼に悪い。

お礼を言って、車のドアを開けると、「美緒」と呼び止められた。

「あと少しで、仕事が落ち着きそうなんだ。そしたら、どこかへ出掛けないか？」

ハンドルに手をかけて、もたれながら私の顔を窺ってくる。そんなふとしたしぐさにも、私はどきどきする…。

「…はい。楽しみにしています。」

きつと、彼と一緒に出かけられるところなら、どこでも楽しいだろう。

「また、連絡する」そう言って、彼と別れた。

玄関のカギを開けて、家の中に入る。

誰も居ないので、家の中は真っ暗だ。

部屋の電気を付けると、置時計の針が19時前にあった。

とりあえず、部屋着に着替えてテレビを付けて、ソファ―に座る。

「今日は色々あったなあ…。」

彼には自分の気持ちを告げるだけで、
まったくその後のことなんて考えてもいなかった。

なのに、思いもよらないことが次々起こって…。

彼は昔から私のことを想ってくれていて、
それは今も変わらないと言ってくれた。

私は本当に幸せ者だと思う。

あんなに素敵な人にずっと想ってもらえるなんて、
たぶんこれからこの先、一生起きないことだろう…。

私が知らなかった、彼の気持ちもたくさん聞くことができた。
何も私が不安に思うことなんてなかったのだ…。

でも、こうやって、遠回りしたからこそ、
私も本当の気持ちを彼に伝えられることができたのだろう…。

あと…父の…気持ちも…………。

まだ、本人から聞いたわけではないので、よくわからないが…。

“もっと前から、お互いがしっかりと話し合えていたら良かっただろうね…”

彼に言われたことが、頭の中を駆け巡る。

「話し合う…か…。」

今まで、父とちゃんと話したことなんて、一度たりともなかった。

何度か、父の方から話たい素ぶりを感じられたが、

私はそれに気づかないふりそして、無視をしていた。

どうせ、話したって分かりあえるどころか、

余計父との関係がこじれると思った…。

でも、私をもっと早くに父に向き合えたら、

もう少し親子らしくできたのだろうか？

本当に今からでも、まだ間に合うだろうか…？

わからない。

でも、せつかく彼が私たち親子に向き合うきっかけをくれたのだ。

こんな時でなければ、もう機会は訪れないかもしれない。

そう思うと、自然と手に携帯を持って、父にメールを打っていた。

メールアドレスは知っていたが、送ったことなどなかった。初めてだ。

“お疲れ様です。お父さんと話したいことがあるので、もし時間に都合が着いた時に少しでもいいので、話させてもらえませんか？”

娘が、父親に送るメールとは到底思えないような、堅苦しい内容…。

普通の親子なら、もっとフランクな感じなのだろうか…。
私たちにはこれが当たり前だから、わからない。

父にメールを送信して、5分も経たないうちに返信がきた。

あまりにも、早いのでびっくりした。
忙しいからと、返信を後回しにされて結局忘れられるというパターンも想像していた。

“今、取引先との仕事が終わったばかりだから、今日なら大丈夫だ。

もし、夕食を食べていないなら、店で食事でもしながらにしないか。”

これから、何を食べようかと考えていたので、まだ夕食は食べていなかった。

“まだ食べていません。私はどこに行けばいいですか？”

父に返信をすると、すぐに返事が返ってきた。

“今から30分後に車をそちらに行かせる”

30分後…すぐだ。

せっかく部屋着に着替えたが、再び外出着に着替えた。それから、簡単にメイク直しをして急いで外に出た。

ちょうど、迎えの車だ来たようだった。

私はその車に乗り込むが、父の姿がない。

「あの、父は？」と運転手さんに尋ねると、

「社長は取引先から直に向かわれました」と答えた。

本当なら、取引先からまた会社に戻る予定だったのではないだろう

か？

なんだか、申し訳ない気持ちになる…。

40分程走ったところで、車が止まった。

車を降りると、店の外にフランスの国旗が掲げられていた。
フレンチの店か…。

店のドアを開けて、中に入ると店員さんが父の居る席まで案内してくれた。

椅子を引いてもらって席に着く。

父はさっそくワインを飲んでいた。

「お疲れ様です。突然すみません。」

正面に座っている父に対して、挨拶代わりに軽く会釈する。

「そんなに畏まらなくてもいいから、もっと楽にしなさい。」

そう言って、ワイングラスを手を持ち、口に運ぶ。

父が言うように、どうやら私は緊張しているらしい…。

第58話 向き合う親子

一皿ずつ料理が運ばれてくる。

色とりどりで目にも鮮やかな料理だ。

私はナイフとフォークを持って食べ始める。

完璧なマナーは知らないが、ざっとしたことなら学んだことがある。

見た目同様においしかった。

……違う。普通に料理を食べにきたわけではない。

「私に何の話があるんだ？」

先に父から切り出された。

どうも、私は話し出しが上手くいかない。

逆に相手から聞かれるほうが話しやすいが…。

「結婚の話なんですけど、私、ちゃんと恭哉さんと婚約します。」

まず、一つ報告したかったことだ。

「そうか…良かった。きっとそれが一番いい。」

心なしか、父が笑ったように見えた。

いつもの私なら、政略結婚がまとまったことに喜んでいるのだろうと思うが、

今日は別の想いがあった。

「どうして、お父さんは恭哉さんを婚約者にしたのですか？」

何て答えるだろう…。

父の表情を読み取ろうと顔をじっと見る。

「彼は、お前にとってこれ以上ない相手だ。

彼は利益に関係なくお前と結婚したいと本気で思ってくれている。そんな彼なら、きっとお前も幸せになれるはずだ。」

「お父さん…。」

「何か、恭哉くんから聞いたんじゃないか？」

さすが父だ…。勘がいい。

「…はい。彼の前にすでに私には婚約者が居たことや、

その他にも婚約者候補がたくさんいたことを聞きました。」

いずれも、私が知らなかったことばかりだった。

「その通りだ。何人かピックアップしていた。

そして、その中から最も良い条件だろう相手を選んでいた。」

「最も良い条件というのは、

会社が大きいとか家柄が良いとかということですか…?」

まわりくどく聞かずに、直球に投げかけた。

この方が、父も本当のことを言ってくれそうだと思ったからだ。

「…お前にそう思われても仕方ないだろうな。

政略結婚させることには変わりないんだから…。

それでもお前には幸せになって欲しくて、

できるだけお前のことを大切にしてくれそうな相手を選んでいたんだ。」

彼に聞いたことと同じだ…。

ただ単に、私の相手を選んでいたわけではなかった。

私の幸せを十分に重視してくれていたのだ…。

「私：お父さんがそんなことを考えているなんて、思いませんでした…。」

「お前が知らなくても、結果としてお前が幸せになってくれたらそれで良かったんだ。」

“私が幸せに…？”

娘に誤解されたままでも、よかったのだろうか…。

「お前に嫌われていると知っていた…。

話そうと思っても、いつも避けられていたしな。

でも、全ては私が悪いんだ…。」

いつもの、威厳に満ち溢れた顔とは違って、
なんだか弱々しく感じられる。初めて見る父の顔だ…。

「昔から、仕事ばかりでお前と話す時間さえなかった…。
ひどい父親だと思っていただろう？

会社では偉そうにしている、自分の子供にはどうすることもでき
なかった。」

「…子供のころはずっと、私には父親なんていないのだと思って
いました。」

「美緒…。」

これから言うことは父をもしかしたら傷つけることかもしれないが、
ずっと胸にしまい込んでいた気持ちだ…。

全部聞いて欲しい。

「…そう思っていたけど、やっぱり寂しかったんだと思います。
お母さんが居たときはまだ良かったけど、
居なくなってから、私はずっと一人ぼっちだった…。」

誰も居ない家に一人で居る…。

今はもう慣れてしまったが、子供の頃はたまらなく不安だった。

「どうして、お父さんは傍に居てくれないのだろうって、
思ってたんです…。」

お母さんが居なくなってから、家に帰って来てくれて嬉しかったけど、

何の話をしたらいいいのかわからなかったし…。
だから、避けてしまったんです。」

学校であった話をして父が聞いてくれるだろうか、
見たテレビのことを話してもいいだろうか…。

そんなことを考えると、話したくなくて、父を自然と避けていた。

「…そんな昔から、お前に寂しくて辛い思いをたくさんさせてきたのか…。

母さんにまかせっきりで、父親としては最悪だった。もっと、お前たちの傍に居てやるべきだった…。

やはり事業を拡大なんてさせなければよかった…。」

「…事業の拡大？」

事業を拡大させることに、昔も今も力を注いできただろうに、なぜそんなことを言うのだろうか？

「母さんと結婚した時、
仕事よりも必ず家族を優先させようと決めていた。」

父は遠い昔に想いを馳せているように、目を閉じる。

「お前が生まれてからすぐに、大きな取引が成功して、
会社が急成長すると途端に忙しくなった。家に帰れない日が多くな
ってな…。」

閉じていた目を少し開いた。

「これ以上会社を大きくして、家族との時間がとれなくなるよりは、現状を維持するほうがいいと思ったんだ。

けど、それを母さんに言ったら叱られてな。」

「お母さんがですか…?」

遠い日の母はとても穏やかで、いつも笑っていて私は注意されたことはあっても、叱られたことなどなかった。

そんな母に父が叱られた…?

第59話 父の愛情

“あなたは、一体何人の社員の生活を預かっていると思っているの？
自分の私情を会社に持ち込んではいけない。家庭は私が切り盛りで
きるけど、
会社はあなたしか動かすことができないでしょう？自分の役割を見
失ってはだめ”

「そう言われて、延々に叱られた。お前の母さんは、しっかりして
るな。

そんな母さんと結婚できて、私は幸せだったが、
私は母さんを幸せにしてやれなかった…。

母さんの望みを聞いてあげても、それは母さんにとっては辛いこと
だっただろうな…。」

「今も後悔している」と父は言った。

二人の間でそのようなやり取りがあったのか…。
だから、母はいつも明るく振舞って、

父の分の愛情も私にそそいでくれていたのだろう。

今やっとわかった…父は悪くない。

私たち家族のことを愛してくれていた、優しい人だった。

「私は、お父さんの気持ちも考えずに、反抗ばかりして…。愚かでした…。」

「年頃の娘なんて、皆そういうものなのだろう…。それに、お前のためだと思って気持ちを無視して勝手に決めてしまっていた。」

私こそがお前に謝らなければいけない。」

そう言うと、父は私に向かって頭を下げた。

「すまない、美緒…。」

全てのことにについて許してはくれないとは思うが、お前の幸せを考えてしたことだったんだ。

ふがいない父親だが、お前を愛している…。」

父が私に頭を下げてまで許しを乞うなんて…。

「もう、いいんです…。こうやってお父さんと話ができただけで、私は一人ではないのだと分かりました。だから、頭を上げてくださ
い。」

父はおそるおそる頭を上げるが、私から目をそらしている。

「これで、過去は清算することができました。

だから、これからお互いぶつかり合いながらも、

親子として良い関係を築いていきましよう。まだ間に合うはずです。

」

「美緒…。ありがとう…。」

私をちゃんと見て、父は泣きそうな顔で微笑んだ。

今までの溝は簡単に埋まらないかもしれないが、

親子の絆を確かめ合った私たちならば、

これからでも十分他の家族に負けない良い家族になれるはずだ。

長年胸の奥につかえていたいたものが、すっとなくなっていくように、

私はとてもすっきりした気分になった。

「しかし、恭哉くんは…恐ろしいな…。」

わだかまりも解けたところで、父が急にそんなことを言い出した。

「恐ろしい…ですか？とても優しい人ですよ。」

たまにからかったりして、私を困らせてもくるが、彼は優しい。
そんな彼のどこが恐いのだろうか？

「お前の婚約者が決まりかけた時に、彼が会社までやってきてな…。
四條グループのご子息がわざわざうちに出向く程だから、
仕事上のトラブルでもあったのかと冷や冷やしたのを覚えている。」
「確か、彼もそんなことを言っていました。お父さんに直談判？した
と…。」

急に父の会社に乗り込んだのだろうか…？
それは父も焦るだろう。

「私に会って、開口一番に“娘さんの婚約者は今すぐ僕にしてくだ
さい”と、
言ってきてな…。開いた口が塞がらなかった。」
「それは、驚きますね…。」

また、急な話だ…。
何の前置きもなく、すぐに本題に入ってしまったのか…。

「それより前に3年前の写真を見せられて、お前の名前を聞かれたときから、

おかしいとは思っていたのだが…。

10年も前からお前を探していて、やっと見つけたと聞いて…。

それでも、金持ちの息子の冗談かと思って聞き流していたら、どうやら本気で言っているらしいと思った。」

彼も必死で父を説得したと言っていた。

その熱意父に伝わったのだろう。

「極めつけは、“婚約者にしていただけないのなら、娘さんが結婚しても、

僕はどこまでも追いかけて結婚の邪魔をしますよ”の一言だったな。

あの時の恭哉くんの顔は本当に恐ろしかった…。

顔は笑っていたが、有無を言わせない目をしていた。

年上の私にもかまうことなく、本気をぶつけてきたんだ。」

…やっぱり。

彼は未来の義父親に、にこやかな対応をしていたのが、

良かったのだろうと言っていたが、やっぱりそうじゃなかったよう
だ…。

父をもひれ伏せさせるとは…。

「でも、それだけ彼がお前のことを好きなのだとわかった。それに、四條グループは大手の会社で経営も安定しているから、お前が結婚しても不自由することはないだろうと思った。だから、結婚相手には最適だと考えて、どうしてもお前を結婚させたかった。」

それで、父は彼との結婚を私に勧めてきたのか…。
利益を重視しただけの、政略結婚ではなかった。

父の隠された私への気持ちを知って、本当に、本当に嬉しかった…。
…。

終 第60話 永遠への誓い

「そっか！それで、彼とも無事にこ・い・び・とになれて、お父さんとも和解できたんだね！！」

「うん。」

私は今カフェで裕子と、その後の報告をしていた。

裕子にはたくさん迷惑をかけて、たくさん助けてもらった。

今、こうやって、笑って話せているのも、彼女のおかげだ。

「うんうん。よかった！私も安心したよ。

これで、講義も身が入るってもんよ！」

「え？いつも寝てばかりで、

身が入っているところなんか見たことないけど？」

「失礼なっ！睡眠学習ってヤツよ。

…でも、いつも通りの美緒に戻ってよかった！」

「ありがとう。」

きつと彼女には感謝してもしきれない。

いくらか、裕子と話していると、私の携帯が鳴った。開いてみると、彼からだった。

「カフェの前まで来てるみたいだから、もう行くね。お金は私が払っておくから！」

「おっ、悪いね。ごちそうさま。仲良くやんなよ。」

手を振る裕子に私も手を振って、会計を済まし、外に出る。すると、店からわずかばかり離れたところに、彼の車が止まっていた。

車の傍まで寄ると、助手席の窓から「乗って」と言われたので、「おじゃまします」と乗る。

実は彼に会うのは久しぶりだ。

もういい加減慣れるべきではあるが、それでも緊張する。何度会っても、彼は私にはまぶしいぐらいの人でいつもそわそわしてしまう。

「元気だった？」

「はい。元気です！」

小学校の健康観察じゃないのだから、もっと言い方があっただろうに…。

完全にテンパっているらしい。

「確かに元気そうだね。」

クスクスと笑いながら、彼は車を走らせる。
子供っぽいと思われただろうか…。

「美緒は花は好き？」

「好きです。母とガーデニングしていましたし。」

「じゃあ、今日はフラワーパークでも行ってみようか。」

フラワーパークか…。

最近花を見ることもなかったから、久しぶりに見てみたい。

「行ってみたいです！」

「了解。」

高速に乗って、1時間ぐらいかけて私たちはフラワーパークへとやってきた。

彼が入場券を買ってくれて、一緒に園内へと入る。

まるで、イギリス庭園のようで、整えられた花々が咲き乱れている。

広い敷地内を、ゆっくりと二人で歩いて行く。

隣に立つ彼を、ちらっと盗み見る。

ここに咲いている花に負けず劣らず、凜とした表情をしていて、彼が背中に花を背負っているようだ。

少し見ただけなのに、彼は私の視線に気づいた。

「どうした？」

「なんか、恭哉さんが花を背負ってるようで…、どこかの国の王子様みたい…」

言った後に気付く。

今、私はものすごく恥ずかしいことを言ったのだと…。

彼に影響されているのだろうか…!?

真っ赤になって、俯いていると急に手を握られた。

びっくりして顔を上げると、口元を緩めて笑っている彼と目が合った。

「僕が、王子なら美緒はお姫様だね。エスコートいたしますよ？
僕のかわいいお姫様…。」

そのまま私の手を持ち上げて、軽く口づけする。

しまった…もっと自分の言うことをよく考えてから言わないと、
とんでもないことになる…。

後悔してももう遅いが…。

心臓が好き勝手に暴れている。

そのまま手を繋いで、歩いていると彼が立ち止まった。
どうしたのだろうかと思っていたら、「如月社長とはどうなった？」
と、聞かれた。

「君の家のことだし、他人の僕が口を挟むんものではないとはわか
っているんだけど、
気になっててね。」

“私たち親子の事を心配してくれていたの？”

どこまでも、優しい彼がとても愛おしく思えた。

「あれから、ちゃんと話合って和解しました。
まだ、ぎこちなさはお互いありますけど、それなりに楽しいのでいいんです。」

私たち親子は似た者同士みたいだ。

焦ると話し方がカタコトになったり、話しだしが被ってしまったりと、

色々な発見が見つかって、やっぱり親子なんだなと実感している。

「それなら良かった。和解も出来たことだし…、そろそろ僕は如月社長のことを、

“お義父さん”と呼んでもいいのだろうか？」

「え！？」

「だって、そう遠くない未来の“お義父さん”と、
少しでも仲良くしたいじゃないか。」

「…はあ。」

父は彼を婚約者として認めてはいるようだが、どうやら彼が苦手らしい。

「恭哉くんは良い人だが、何を考えているのかわからない…」と、

言っていた。

私もまだ彼についてはわからないことが多いのだから、父がそう感じるのも無理はない。

そんなことは露知らず、

「今度改めて挨拶しないとね」と呑気そうなことを言っていた。

冷たい風が吹いてきた。

日に日に気温が下がって、冬もすぐ傍まできているようだ。

「寒くない？」

「大丈夫です。」

彼は自分を盾にして私に風が当たらないように、風よけになってくれた。

彼に引き寄せられるような形になってしまい、体が密着する。

「あっ、あの…。」

声を掛けようとしたら、優しく抱きしめられた。

さっきまでの、冷たい風も今は何も感じない。

そこにあるのは、彼の温もりだけだった。

「こうして、君と一緒に居られるなんて信じられないな…。」
「恭哉さん…?」

耳元でくすぐるようにそう言われて、私はたじろぐ。

「もう、君には会えないかもしれないって、半ば諦めていたんだ。だから、こうして君の隣に居られるなんて…思っていなかった。」
「ちゃんと私は、恭哉さんの隣に居ますよ? これからも、ずっと…。」
「ありがとう…。美緒、愛してる…。」

彼は、私から少し体をずらして上から覗きこんでくる。
その目は今まで以上に真剣で、強い…。

私を捕えるその目…。
逸らすことが許されない…。

「僕は、“永遠”なんてこの世には存在しないと思う。どんな物質にしても、

必ず朽ち果てていくだろう？」

私の髪を、指でさらさらとすいていく。
されるがまま、私は彼を見つめる。

「だけど、君を想うこの愛は“永遠”に続くものだと言いきれる。
これから何度別の誰かに生まれ変わっても、必ず君を見つけ出す。
そして、変わらない愛を何度でも君に誓う…。」

情熱的なその言葉は、私の胸の奥へと深く入って行く。

「僕の愛を“永遠”に君へ捧げる。だから、僕の傍にずっと居てほしいんだ。」

「…はい。」

これ以上ないぐらいの、愛の告白だ…。

涙が流れてきた。

「泣かないで…。君に泣かれると僕は非常に困るんだ…。」

「だって、恭哉さんがそんなこと言うから…。」

「いや…、自分でもかなりくさいセリフを言ったとは思ってたけど…。」

でも、まぎれもない、君への愛だよ。

受け止めてもらえないと、僕はまた子供の時のようにひねくれてしまっただけど？」

冗談を言う彼が、涙でかすんで見えるけど、目の前に居る人は、私の大好きな人だ。

「私で良いのなら、お供しますよ？」

笑いながらそう答えると、彼も笑った。

あなたが、求めてくれるのなら、私は喜んであなたに捕われよう……。どこへも行けないように、しっかりと捕まえていて……。

END< そしたら、私もあなたを“永遠”に思い続けるから…。

>

終）第60話 永遠への誓い（後書き）

ここまで、読んでくださって本当にありがとうございました。
果たして、これは完成するのだろうかと心配でしたが、
なんやかんやでどうにかまとまりました…。

小説を書くのは全く初めてで、文章や表現などもめちゃくちゃだ
と思います…（汗）

作品に関してご感想をいただけると嬉しいです。
とても励みになります！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7405w/>

Amour ?ternel

2011年10月25日18時17分発行